

PL

755

.35

N5

v.31

Nihon meicho zenshū; Edo
bungei no bu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL

755

.35

N5

V. 31



商に氣の廣いむさし男
秋の色種
秋の時候
秋の日の序
秋の七草
秋の白膠木
秋の野に出て
示_ニ秋之坊_一辭
秋の山ぶみ
秋の山ぶみといふを題にて作れる文
秋の夜長に
秋の夜は
惡漢は天罰を受け親兵衛は神隠しとなる
惡性あらはす螢の光
惡事見へすく揃へ帷子
惡報明を失ふて更に懺悔を事とす
明烏花濡衣
明烏
明烏
明烏后眞夢
明烏夢泡雪
明智計
明て驚く書置箱

[illegible]

明て悔しき養子が銀宮	曙草紙(解説)	曙草紙 卷之一	同 卷之二	同 卷之三	同 卷之四	同 卷之五	曙	揚屋町の意氣づくに小指の身がはり	阿漕	阿古屋松(曲舞四十六番のうち)	阿古屋松(番外謡曲のうち)	朝顔	朝顔姫道行	朝顔	朝香山	浅草觀世音境内の場	同 奥山の場	同 裏田圃の場	浅草新寺町於西光寺開卷桃井庵和	笛追善句合	浅草寺	浅草の人芝の花作
西上	讀	同	同	同	同	同	謡	浄下	謡	謡	謡	謡	浄上	音	西下	歌舞	同	同	川	西上	西下	
九七八	九	一	三八	六三	八四	一八	六四四	二五九	三四一	六〇〇	六〇〇	七〇〇	一一	九三五	四一四	七六	七四九	七五二	七四八	四二八	四〇九	

淺草見附
 淺くとも
 朝開野歌舞して暗に釵兒を遣す
 淺茅が宿
 淺妻
 朝寝辭
 麻布神明宮奉納句合
 淺間
 麻生後序
 安佐虫
 朝谷村に船虫古管を贈る
 朝湯の光景
 朝湯より晝前のありさま
 足利館四足門之古瓦
 足柄山
 足柄山
 足利義教異人に遇ふ話
 蘆刈
 朝の鹽籠夕の油桶
 あしだ作り
 あじなことから
 荊野
 蘆屋道滿大内鑑(解題)

西下	音	八上	怪	音	俳	川	音	俳	西下	八上	滑	滑	滑	滑	怪	怪	西下	怪	諸	西下	俳	音	西下	浄上
歌澤			長唄			富本																歌澤		
四九	九六	六九	八五	四三	七四	五〇六	二七	三八	六〇九	二二〇	二七〇	六五	二七	二七	二七	二七	四八	七〇三	三九五	一六四	三九	九四一	四八	三三
蘆屋道滿大内鑑第一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
第二	第三	第四	第五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
脚小を櫃にして惡師徒手足を斷る	あじろ車	飛鳥川	飛鳥山賦	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅	安宅

浄上	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四三	四二	四三	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五

名ニ阿段一説
 揚揮豆賦
 厚狹應報
 熱田社
 東の伽羅様
 吾妻八景
 渥美浦に便船紀二六を送る
 敦盛
 跡の剝たる唄入長持
 穴山の枯野に村長秋實を救ふ
 淡路
 淡島
 安房侯仁心軍令を定む
 栗津原
 荒屋の奇計
 哀れなる淨瑠璃に節のない材木屋の娘
 阿武隈川
 あぶなき物は筆の命毛
 油賣
 油掛地藏
 油屋の段
 逢へば別れと
 網乾謾歌曲を賣る

俳	俳	怪	西下	西上	音	八下	謠	西上	八中	論	音	八下	西下	讀	浮	西下	西下	俳	西下	音	音	八上
二五九	二四三	二三八	四九五	七九三	八七六	一〇一	一三七	六九一	七〇	一六	八〇一	三八七	五三	一八四	七九	四七	三七〇	三四一	四〇五	二〇一	九三	二七四

海士	雨乞小町	雨乞表	あまつをとめ	天羽衣(解説)	天羽衣 上	同 下	尼法師の唄の君	雨岡がり行き黄葉をめづる辭	編笠賛	編笠は重ての恨み	網すきの翁	天降言	雨の鉢木	雨のふる夜は	綾鼓	操三番叟	あやむしろの序	あやめに似たる	菖蒲ゆかた	藍染川	荒井	嵐坂
----	------	-----	--------	---------	-------	-----	---------	---------------	-----	----------	-------	-----	------	--------	----	------	---------	---------	-------	-----	----	----

論	音	俳	讀	讀	同	同	讀	和上	俳	西上	西上	和上	音	音	論	音	和上	音	音	論	西下	西下
六〇八	五七七	三六	九〇六	八三	八七三	八九五	九〇一	二〇〇	四五七	八〇一	四七一	六三	四二八	九三九	三五三	九二〇	三八六	九三四	九七	三八	四八三	四一

嵐山

曠野(解説)

曠野集序

阿羅野 上

同 下

同 員外

荒御靈新田神徳口上

荒御靈新田神徳後序

荒小田跋

有種恥を雪て郷黨を復歸す

蟻通

在原業平文海に託して冤怪を訴ふる事

贈_二或法師_一辭

與_二或人_一文

贈_二或人書_一

爲_二或人_一書序

ある人の七十の賀の序

有まて美人執行

あれ春雨

あれ見やしやんせ

安房の卷

暗女は晝の化物

案内しつてむかしの寢所

謠

芭

俳

芭

同

同

狂

狂

俳

八下

謠

怪

俳

芭

俳

俳

和上

西上

音

音

八上

西上

西上

七九

五八

二四

六〇一

六二七

六二五

七七八

七九

七三

六六五

四八八

八六三

四九二

二六五

四八二

四九一

二〇五

三〇〇

九四〇

九三六

二

六六五

九七

菴記

讓菴名一文

暗夜の駿馬

いの部

題

目

居合もだますに手なし

飯酢の銘

飯森が陰徳の報

菴さがせば思ひ草

家主殿の鼻ばしら

伊右衛門の住家の段

いをうり

伊賀越道中雙六(解題)

同 第一(鶴ヶ岡の段)

同 第二(行家屋敷の段)

同 第三(圓覺寺の段)

同 第四(郡山宮居の段)

同 第五(郡山屋敷の段)

同 第六(沼津の段)

同 第七(關所の段)

同 第八(岡崎の段)

同 第九(伏見の段)

俳

俳

讀

書名種類

頁

西上

俳

怪

西上

西下

音義太

淨下解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五〇七

五〇五

二〇一

九八二

二八七

三六六

二八六

七九一

一八二

三三九

八〇

七七八

七九〇

七九五

八〇〇

八〇四

八三

八二

八五

八三八

同 第十(敵討の段)

伊賀新大佛之記

筏士

碇潜

生寫朝顔活

いきほひ

生肝は妙薬によし

異香薰ずる女郎内懷

いく夜さか

生田敦盛

生玉心中(解題)

生玉心中上之卷

同 中之卷

同 下の卷

池田の宿

池贊

池西言水が一周忌に送りける詞書をよむ

池の中島の上

池の中島の下

異見はきかぬ藥心をなほさぬ醫者形氣

遺恨の草履

十六夜清心

十六夜賦

同 八四五

芭 八二六

俳 三六六

謠 五九二

音 義太 一九一

音 長唄 八三

西下 三〇一

浮 四五六

音 歌澤 九四〇

謠 一四〇

近下 二八

同 二二

同 二九

同 一三五

同 四八〇

西下 七三二

謠 七八

俳 七六

讀 七六

讀 七七一

浮 六六八

讀 一七一

音 清元 六六六

五十子の城に信乃姓名を留む

石白之讃

石白頌

碓引べき垣生の琴

石垣山

石垣の戀くづれ

石川五衛門渡世の事

石川豊信

石川流宣

韋叔堅

いしばま

石濱の卷

石原正明にこたふる書

石部

石藥師の堂に賢少年朝賞を辭ふ

石山寺

伊勢海老は春の梶

伊勢えびの高買

伊勢音頭戀寝劍

伊勢紀行の跋

伊勢のあらめ

伊勢兵庫仙境に致る

伊勢参り名所道行

八中 四六四

芭 八三三

俳 三三四

西下 一〇八七

西下 四五〇

西上 六四九

浮 三九七

風 評傳 七

風 評傳 七

怪 評傳 七

讀 梗概 九六七

八中 梗概 四一

和上 四〇三

西下 五〇八

八下 二七五

西下 五二

西下 五七六

西下 一四八

音 二〇一

俳 二五八

音 九四三

怪 一〇五

淨上 一九一

磯田湖龍齋

同

磯田濱

いたか

板垣信形逢ニ天狗

いたづら子のひいき／＼かけ合

伊丹發句合跋

一雅話三笑(解説)

市子口寫の段

一言聞身行衛

一日かして何程が物ぞ

一日暮の中宿

一顆の智玉途に一騎の驕將を懲す

一色亭記

市子まぎるゝ武士

一瀬川

一谷嫩軍記(解説)

一谷嫩軍記 第一

同 第二

同 第三

同 第四

同 第五

一番むすこ

風 評傳

四三 九

風 評傳

四三

讀

八六

俳

三八

怪

三七

滑

四六

俳

七三

滑

七三

音

七〇六

西上

二〇三

西上

八三

西下

八二

俳

六三

西下

二五

音

二四

淨下

河東

解

四

同

三〇四

同

三〇四

同

三〇四

同

三〇四

浮

三五

一ふく一錢

一葉を浮めて壯士兩友を送る

一葉を獻して窮士前愆を償ふ

一もじ賣

一柳千古にこたふる書

一力之夜合錢贖

一虜を挾て現八橋梁を斷つ

壹歩の數

市川評判圖會

一夜の枕物ぐらゐ

一立齋廣重

同

一翁畫贊

一角仙人

一姫一僧死生榮貴を等くす

一級之首の南彌六を愆つ

一茶發句集(解説)

一茶發句集

上(春の部)

同(夏の部)

同(秋の部)

同(冬の部)

同(雜の部)

俳 三七六

八上

八中

俳

六五九

和上

三八二

滑

四〇九

八下

六六八

浮

四七八

滑

八

西上

七一

風

四四

風

四四

俳

五九七

謠

五二

八下

七二五

八中

五七

俳

六一

解

二〇五

同

二〇五

同

二〇五

同

二〇五

同

二〇五

同

二〇五

一睡卅年の夢

一箭を飛して俠者を白馬を誤

一雙の玉兒義を結ぶ

一桃子におくる詞

井筒

井筒業平河内通(解題)

井筒業平河内通

同 第二

同 第三

同 第四

同 第五

一滴の酒一生をあやまる

五つ橋

一德辨

一盃綺言(解題)

一盃綺言

一盃たゞいて戀里

僞もいひすこし

一筆齋文調

同

幾菊蝶初音道行

何れも京の妾女四人

伊藤帶刀中將重衡の姫と冥婚の事

怪

八上

八上

俳

諺

近下解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

八二

三八

二二九

七四

一五

六二

三八七

三九六

四〇三

四〇四

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

四〇三

絲櫻本朝育(解題)

絲櫻本朝育第一(淺草の段)

同 第二(屋形の段)

同 第三(中の町の段)

同 第四(糸屋の段)

同 第五(道行妹脊の組糸)

同 第六(駒形の段)

同 第七(行徳の段)

同 第八(小石川の段)

同 絲の五月雨

同 井戸は則ち末期の水

同 田舎の句合 解説

同 田舎の句合

同 田舎のものにかたられし事

同 稻毛直道におくれる書

同 稻瀬川の場

同 稻荷町に化を顯す手くだ男

同 大江親兵衛

同 大江親兵衛話ながら素藤を提ふ

同 大江親兵衛魔を破り賊を夷ぐ

同 大江親兵衛高峯に勅寇を拉ぐ

同 大江前諾して關符を請ふ

同 大江仁名を華夏に揚ぐ

淨下解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

七五

七一

七八

七三

七九

七七

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

七九

浮瀬の居續に相圖の笛賣	浮名立てじと	浮名の嬌夫	うきは餅屋つらきは碓ふみ	うきふね	浮舟	憂目に見する竹の世の中	浮世傀儡師	浮世風呂(解説)	浮世風呂	前編 卷上	同 卷下	同 女湯の卷	同 卷上	同 卷下	同 女湯の卷	同 卷上	同 女湯の卷	同 卷下	同 男湯の卷	同 卷上	同 卷中	同 卷下	浮世床(解説)
-------------	--------	-------	--------------	------	----	-------------	-------	----------	------	-------	------	--------	------	------	--------	------	--------	------	--------	------	------	------	---------

淨下	音 歌澤	讀	西下	讀	謠	西上	音 河東	滑	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	滑	同	同	同	滑 解
二四五	九三三	七六六	六九七	九七五	二六九	九六四	二九五	三五	三二	三九	二四四	二六三	二七〇	二八六	三〇三	三二〇	三三五	三四五	三五四	三六七	三七八	五三	
浮世床 初編	同 卷上	同 卷中	同 卷下	同 二編	同 卷上	同 卷下	浮世草子集解説	浮世親仁形氣(解説)	浮世親仁形氣	同 一卷	同 二卷	同 三卷	同 四卷	同 五卷	鶯の巢に時鳥	鶯の身はさかさまに	鶯笛といふ笑話の序	請狀	雨月物語(解説)	雨月物語	同 卷一	同 卷二	

滑	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五二	五二〇	五三七	五四七	五五九	五七〇	五八一	一	九二	八四九	八五二	八六三	八七四	八八四	八九六	九四八	九三三	八〇七	八二三	八四	六二	六三五	六三九	

梅がぬしなら

梅川

梅川

梅兒譽美(解説)

梅兒譽美卷之一

同 卷之二

同 卷之三

同 卷之四

同 卷之五

同 卷之六

同 卷之七

同 卷之八

同 卷之九

同 卷之十

同 卷之十一

同 卷之十二

梅兒譽美第一齣

同 第二齣

同 第三齣

同 第四齣

同 第五齣

同 第六齣

第七齣

音 歌澤

音 蘭八

音 蘭八

人 解

同 二〇

同 一三

同 一四

同 一五

同 一六

同 一七

同 一八

同 一九

同 二〇

同 二一

同 二二

同 二三

同 二四

同 二五

同 二六

同 二七

同 二八

梅兒譽美

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

梅唇餘興春色辰巳園

梅の花山に登り詰る男

梅の花笠に降掛る村雨

梅の春

梅の名の鳥が啼東路の別

第八齣

第九齣

第十齣

第十一齣

第十二齣

第十三齣

第十四齣

第十五齣

第十六齣

第十七齣

第十八齣

第十九齣

第二十齣

第二一齣

第二二齣

第二三齣の上

第二三齣の下

第二四齣

同

同

同

人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

人

浮

浮

音

浮

一六

一七〇

一七三

一七六

一七九

一八七

一九一

一九三

一九八

二〇一

二〇六

二一五

二二八

二三三

二三六

二九

二三三

二三六

二五三

二五七

二六三

梅の匂ひ吹わたる大橋

梅美婦禰

同 卷之一

同 卷之二

同 卷之三

同 卷之四

同 卷之五

同 卷之六

同 卷之七

同 卷之八

同 卷之九

同 卷之十

同 卷之十一

同 卷之十二

同 卷之十三

同 卷之十四

同 卷之十五

梅美婦禰

同 第一回

同 第二回

同 第三回

同 第四回

同 第五回

同 第六回

人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二六七

五七

五六一

五六八

五七六

五八七

五九四

六〇一

六一

六二八

六三五

六三六

六四三

六五〇

六六〇

六六六

六七三

五六一

五六四

五六八

五七三

五七六

五八〇

梅美婦禰

同 第七回

同 第八回

同 第九回

同 第十回

同 第十一回

同 第十二回

同 第十三回

同 第十四回

同 第十五回

同 第十六回

同 第十七回

同 第十八回

同 第十九回

同 第二〇回

同 第二一回

同 第二二回

同 第二三回

同 第二四回

同 第二五回

同 第二六回

同 第二七回

同 第二八回

同 第二九回

人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五八七

五九〇

五九四

五九八

六〇一

六〇四

六一

六一四

六二

六二八

六三

六三六

六三八

六四〇

六四三

六四七

六五〇

六五五

六六〇

六六三

六六六

六七〇

六七三

梅美婦禰 第三〇回

梅柳中宵月

梅も松も打交ての大寄

梅よりすいた萩野が一風

植込の大江山榮華は大格子の唐織

浦島

浦島（拙筆力七以呂波の内）

浦島（浦島歸帆）

浦島の歸帆（浦島）

裏田圃西の町の場

浦のしほ貝

浦のしほ貝春の歌

同 夏の歌

同 秋の歌

同 冬の歌

同 戀の歌

同 雜の歌

浦人

怨を含て沼蘭四大傷害す

恨み千萬近所へ縁付

恨見の數をうつたり年竹

恨の數讀む永樂通寶

瓜の蔓に茄子の珍物子胤の間違

人

音

浮

浮

近下

諸

音

音

音

和下

同

同

同

同

同

同

俳

八上

西下

西上

西下

滑

六七

六六

二四

二四

二九

六六

八七

八五

八五

一〇九

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

八三

五三

一三〇

うら屋も住所
愁の中へ樽肴

鱗形

浮氣妾の嘘

浮氣妾のまこと

うはなり

嬬染分紅葉

雲華園銘

雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話

雲中の腕押

雲竹の讃

雲霧を拂て妖孽はじめて休

雲霧を起して神靈小兒を奪ふ

雲林院

えの部

題

目

榮花の引込所

詠歌の前道行

英對暖語 卷之一

同 卷之二

同 卷之三

同 卷之四

西上

西上

諸

滑

滑

音

音

俳

怪

西上

芭

八上

八上

諸

三三

一二

九五

六三

六三

七九

七九

二八

五九

三三

二六

一七

四四

一九

書名種類 頁

西下 九一八

近下 五八八

人 四八

同 四七

同 四三

同 四六

英對暖語 卷之五
同 卷之六
同 卷之七
同 卷之八
同 卷之九
同 卷之十
同 卷之十一
同 卷之十二
同 卷之十三
同 卷之十四
同 卷之十五
同 第一回
同 第二回
同 第三回
同 第四回
同 第五回
同 第六回
同 第七回
同 第八回
同 第九回
同 第十章
同 第十一章
同 第十二章

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同人

四六四
四七五
四八五
四九三
五〇六
五一四
五二一
五三二
五三九
五四七
四八一
四二二
四三二
四三五
四四〇
四四六
四五〇
四五五
四五六
四六四
四六八

同	第十三章
同	第十四章
同	第十五章
同	第十六章
同	第十七章
同	第十八章
同	第十九章
同	第二十章
同	第二十一章
同	第二十二章
同	第二十三章
同	第二十四章
同	第二十五章
同	第二十六章
同	第二十七章
同	第二十八章
同	第二十九章
同	第三十章
江口	遊女の薄情を憤りて珠玉を沈むる話
繪師	下
江尻	

西併謠同怪同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
下

四七
四八一
四八五
四八九
四九三
四九八
五〇六
五一〇
五一四
五一七
五二一
五二五
五三二
五三六
五三九
五四三
五四七
五五〇
五五五
五五九
六〇五
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

夷千嶋
穢多
越後獅子
越前のかうの殿に侍ふきち子のもと
へ贈れる書
江戸
江戸鶯
江戸から尋ねて俄坊主
燕都枝折 初編
同 二編
同 三編
同 四編
同 五編
同 六編
同 七編
同 八編
江戸子の芝居好
江戸男色細見序
江戸根岸にて女の住居を求む
江戸の繪姿
江戸の小主人と京の唐土と
江戸花海老序
江戸前嘶鰻(解説)
江戸前嘶鰻

西下 三六四
俳 三八一
音 長唄 八三九
西上 四三三
西下 四三三
音 河東 二八五
西上 八四八
川 一六三
同 一七八
同 一九七
同 二二三
同 二二三
同 二三八
同 二九三
同 二九七
同 二七三
同 二七三
滑 四五四
狂 七七五
怪 九五三
音 七三七
西下 七七一
狂 七九
膝上 九四
膝下 二〇五

江戸生艶氣棒焼(解説) 二元
江戸生艶棒焼 一五一
ゑぬのこ 九二〇
江の島 四四四
夷の太郎たばかられし事 三八八
簾 一〇四
簾細工 三八九
烏帽子折 三四二
烏帽子折 五三〇
烏帽子折 一〇五
烏帽子折名づくし 四六九
烏帽子山 三三一
繪本吾妻挾 五一
繪本江戸土産 二四三
繪本江戸紫 七五三
繪本御伽品鑑 七三五
繪本家賀御伽 九四
繪本太功記(解題) 九三九
發端 九四一
六月朔日の段 九四六
六月二日の段 九五〇
六月三日の段 九五四
六月四日の段 九五六
六月五日の段

黄 解 二元
黄 一五一
諸 九二〇
西下 四四四
浮 三八八
諸 一〇四
俳 三八九
俳 三四二
諸 五三〇
近上 一〇五
西下 四六九
風 三三一
風 五一
風 二四三
風 七五三
風 七三五
淨下 解 九四
同 九三九
同 九四一
同 九四六
同 九五〇
同 九五四
同 九五六

大磯石の枕
大岩村
追分
奥州安達原(解題)
奥州安達原
贈-奥州株人-辭
あふぎ賣
扉谷の間謀假使を導く
扇幕之段
拾レ扇說
扇賣高尾
大江山
悼大飯貸人祭文
大塚の巻
大津裏狼谷の場
枳を卸して磯九殘雪密に墜つ
大内義隆の歌
大釜のぬきのこし
大河原
大口理右衛門家の格式人に越たりけるをことぶきておくることば
大隈言道
大隈言道全集

浮 一三八
西下 四八六
西下 四九九
浄下 四七
浄下 三五九
俳 四三五
俳 三四三
八下 三六五
歌 六〇七
俳 四九七
音 五五六
諺 五七五
狂 八一九
八上 梗概 二九
歌舞 一〇〇六
八中 一九九
怪 三三三
西下 六五七
西下 四〇六
俳 七四
和下 解 七五
和下 四六一

大隈言道全集甲辰集
同 己酉集
同 庚戌集
同 辛亥集
同 壬子集
同 戊午集卷一
同 卷二
同 卷三
同 卷五
同 卷六
同 今橋集
同 ひとりごち
同 こごのちり
大治牧
大坂
相坂山
王子みやげ
逢ふ度に
逢た夜
大節季にない袖の雨
近江の水海
芋うみの尼
近江のお兼(晒女の落雁)

和下 四六三
和下 四七四
和下 四八五
和下 五〇七
和下 五三三
和下 五五〇
和下 五七三
和下 五八三
和下 六〇四
和下 六二七
和下 六三九
和下 八四五
和下 八五九
西下 三九一
西下 五三三
西下 五四
音 長唄 九三三
音 歌澤 九三三
音 歌澤 九四三
西上 六八八
浮 一〇二
西上 四四四
音 長唄 八五一

近江の大太郎聞おちする事

近江八景

近江八景序

近江源氏先陣館(解題)

同 第一

同 第二

同 第三

同 第四

同 第五

同 第六

同 第七

同 第八

同 第九

櫻題萬句合書拔(寅三月)

歐陽紇

大繩里

大節季はおもひの闇

大晦日の伊勢参わら屋の琴

大晦日はあはぬ算用

鸚鵡小町

大森彦七

大社

大和田

浮 三六一

諸 六六

俳 二七五

浄下 六〇

同 五一四

同 五六

同 五三

同 五二

同 五三

同 五六

同 五五

同 五五〇

同 五六〇

川 五八

怪 三九二

西下 四五八

西上 五九

同上 七〇四

西上 三七

同上 二四

音 四九一

音 四二

西下 四一五

おかけ参り

黄金百兩

岡崎

岡崎の市隠真葛原艶男

岡部

岡部屋敷内の場

岡目八目

おかる妓名標識

総幕内傳序

お菊幸助

沖津しら波(解題)

沖津しら波

同 一

同 二

同 三

同 四

同 五

翁

翁像賛

翁草戀種蒔(種蒔二番叟)

隠岐院

同

同

音 清元 六一

怪 二九

西下 四九一

同上 四三

西上 四六八

歌舞 九五三

狂 八六

滑 八六

狂 八〇一

音 五三〇

浮 五七

同 三五三

同 三五九

同 三七〇

同 三八三

同 三九五

同 四〇六

音 九一四

俳 四三八

音 八五

諸 六三九

同 六四〇

同 七〇七

沖の石
 荻野井返命して偽刀舊主に還る
 沖の大船
 おきてみつ
 置みやげ
 置みやげ奥附
 置みやげ技
 お客をしかる村間馬鹿
 小笹山
 奥の海
 奥村政信
 同
 小澤蘆庵
 おさん茂兵衛
 おさん茂兵衛
 おさん茂兵衛こよみ歌
 教草吉原雀
 雄ノ島
 鴛鴦の段
 お霜月の作り髭
 遅櫻手爾葉七文字
 御城外堀端の場
 惜や姿は隠れ里

西下 三九七
 八中 三三四
 音 歌澤 九四一
 音 歌澤 九三五
 浮 三五
 西下 七二六
 西下 七二四
 滑 七三五
 西下 四六六
 西下 三九五
 風 評傳 四
 風 一二
 和 下 解 五
 近 下 解 三
 近 下 一八
 音 長唄 七九四
 西下 三九六
 音 富本 四九六
 西上 三五六
 音 長唄 八三七
 歌舞 九六一
 西上 二七三

惜や前髪箱根山嵐
 お染
 おその六三
 おそめ 秋の白しぼり(解題)
 おそめ 秋の白しぼり上の巻
 久松 秋の白しぼり上の巻
 同 中の巻
 同 下の巻
 大高何某義を属し影の石に賊を射る話
 大塔の宮熊野篠懸
 大塔宮藏鑑(解題)
 大塔宮藏鑑第一
 同 第二
 同 第三
 同 第四
 同 第五
 緒絶橋
 小田原
 小田原
 讀阿多福面
 遠近の山姥
 落人
 御乳人のゆうれい
 落葉

西上 一二三
 音 清元 六〇三
 音 常磐 四五〇
 浄上 解 二八
 同 一二三
 同 一二七
 同 一三三
 怪 八八
 浄上 二八五
 浄上 解 五四
 同 二五五
 同 二六四
 同 二七四
 同 二八五
 同 二九六
 同 三九六
 西下 四一三
 西下 四二〇
 狂 八〇八
 音 常磐 三七八
 音 清元 六三二
 浮 七六
 謠 一九八

お千代道行星の數
 小黒崎
 落し手有拾ひ手有
 御歳玉海老手遊（とんび奴）
 男かと思へばしれぬ人様
 男地藏
 おどけ俄煮珠
 音 音江中に一船を焼く
 お夏笠物狂
 お夏笠物狂
 同じ子ながら捨たり抱たり
 同じ事
 おなじ事をくどくいふ酒癖
 音羽丹七
 乙姫
 踊の中の似世姿
 踊はくづれ桶夜更て化物
 蠱は三十七度
 鬼鹿毛無佐志鑑 解題
 鬼鹿毛無佐志鑑 第一
 同
 第二
 同
 第三
 同
 第四

浄上 二四九
 西下 三三二
 西下 三八五
 音 長唄 一八四
 西上 三八二
 西上 三六二
 音 清元 六二九
 八下 五九一
 音 一中 三三九
 近上 五五五
 西下 六〇
 音 歌澤 九三九
 滑 七〇四
 音 新内 六八二
 音 富本 五五三
 西上 一〇六一
 西上 五〇五
 西上 三七三
 浄上 解 三六
 同 一四〇
 同 一四四
 同 一五〇
 同 一五四

鬼鹿毛無佐志鑑第五
 鬼貫句選（解説）
 鬼貫句選上
 同 卷之一 春之部
 同 卷之二 夏之部
 同 卷之三 秋之部
 同 卷之四 冬之部
 同 下
 同 卷之五 禁足旅記
 鬼貫句選跋
 鬼傳
 大盗人入相の鐘
 鬼次拍子舞（月瀬最中名取種）
 鬼の妙薬爰に有
 鬼柳
 小野の炭かしらも消時
 小野姫道行
 屋上伊太八
 尾上の雲賤機帶
 おはつ住吉参り道行
 おはつ久兵衛河内へ道行
 お花半七
 おはな半七道行

浄上 一六〇
 俳 解 一
 同 二七
 同 元
 同 三二
 同 三三
 同 三六
 同 四〇
 同 四〇
 同 四〇
 俳 六八四
 俳 四二三
 西上 九六二
 音 長唄 八二九
 西下 九八七
 西下 三九一
 西下 二〇一五
 近上 一二二
 音 新内 六七八
 音 一中 三四〇
 浄上 四四
 浄上 四九
 音 蘭八 七三七
 近下 九六

小原女（黒木賣）
大原御行

お半

お半長右衛門

思ひ入吹女尺八

思ひの焼付は火打石賣

おもひもよらぬ首途の簀入

思ひおぼ

倅の似せ男

面影は乗掛の繪馬

而影の焼残り

表むきは夫婦の中垣

表向は佛の白人金色の花代

おもはくちがひの酒樽

おもはせ姿今は土人形

おもはれぬ

親の良は見ぬ初夢

親子五人仍書置如^レ伴

親仁形の部

親と子の縁を繋いだ貫ざしの捕縄

親敵打腹鼓（解説）

親敵打腹鼓

小山

音 長唄 八三
音 清元 二九

音 蘭八 五八〇
音 七三〇

音 一〇五

西上 八四

西上 三七

西下 九三

音 歌澤 九七五

西上 八五一

西上 三五四

西下 七三

浮 四八〇

西下 八五

西下 六八七

音 歌澤 九三九

西上 一五二

西上 七二

滑 一三三

滑 四九二

淨下 五〇

黄 二二

同 二二

西下 四七

小山三郎武者修業の事
おらが春（解説）

おらが春

織殿

織留序

織物屋の今中将繼

御談染長壽小紋（解説）

御談染長壽小紋

音曲説

恩愛晴關守

御恨みを傳へよゐらせ候

女方も爲なる土佐日記

女勢揃へ

恩に答て化龍升天を示す

御名残押繪交張

女太夫

女の作れる男文字

陰摩羅鬼

おまへと一生

御身の上は無左だに重きが上の銀煙管

おひな

帶文桂川水

帶は紫の塵人手を握

浮 三六九
俳 六二

同 一〇七三

音 九〇六

西下 七三九

西上 九八四

黄 六五

同 六二七

俳 四三八

音 常磐 四二七

西下 九六八

西上 八六六

近上 一九一

八中 六三三

音 清元 五八三

音 清元 五七七

西上 一〇八五

怪 四三三

音 歌澤 九三三

滑 一三六

音 蘭八 七二七

音 常磐 三九八

西上 二六五

[illegible]

鏡磨
鏡山
加々見山舊の錦繪
書置の思案箱
書送る
柿崎和泉守亡魂
杜若
杜若七重の染衣
垣根卯の花
垣根草（解説ノ
垣根草
同 卷ノ一
同 卷ノ二
同 卷ノ三
同 卷ノ四
同 卷ノ五
垣根草卷首
垣根草惣目錄
篋内に孝吉髻を逐ふ
垣の中は松楓柳は腰付
郭元振
額藏間牒信乃を全す
額藏を誣て奸黨殘毒を逞す

交野忠次郎發心
 交野の雉子も喰しる客人
 かたみの金
 形見の作り小袖
 筐花手向櫛
 形見の水櫛
 形見の山吹
 形見は貳尺三寸
 から
 家中に隠れなき蛇嫌ひ
 勝川春英
 同
 勝川春好
 同
 勝川春章
 同
 勝川春潮
 同
 勝三郎千代の壽
 勝三郎連彌子
 花鳥篇序
 火猪を放て信乃戰車を焼く
 上總の民孝義再思を稟く

怪	西下	二九二	上總國長者町地藏尊奉納句會	川	七四三
讀	西下	一〇二六	上總國菊麻八幡大神の神主根本常陸	和上	二二二
音	清元	八九五	介伴胤が碑の名	西下	四二五
西上	五九九	二九	勝鹿浦	風	評傳
怪	六〇	三〇二	葛飾北齊	風	評傳
西上	三七九	合甫	同	諸	四九四
俳	三三三	桂川戀の櫛	同	音	蘭八
西下	四一	桂川連理櫛	同	音	義太
風	二一	葛城	葛城天狗	諸	二〇六
同	四六	甲冑堂	甲冑堂	西下	四〇八
風	一一	桂隼人寛を雪ぎて舊恩を報ずる話	桂隼人寛を雪ぎて舊恩を報ずる話	怪	七九
同	四〇	門傾城	門傾城	音	長唄
風	一〇	門出京人形	門出京人形	音	長唄
同	四一	門出八鳥(解題)	門出八鳥(解題)	近上	七六五
風	二一	第一	第一	解	四一
同	四四	第二	第二	同	五九
音	九一八	第三	第三	同	六三
音	九二一	第四	第四	同	六六
俳	六六七	第五	第五	同	七一
八下	四七六	門柱も皆かりの世	門柱も皆かりの世	同	七五
八下	三七八	楫取魚彦	楫取魚彦	西下	五九五
				和上	八八

楳取魚彦家集

假名手本藏意抄 解説)

假名手本藏意抄

假名手本忠臣藏(解題)

假名手本忠臣藏第一

同 第二

同 第三

同 第四

同 第五

同 第六

同 第七

同 第八

同 第九

同 第十

同 第十一

假名文章娘節用(解説)

假名文章娘節用前編

同 上卷

同 中卷

同 下卷

同 後編

同 上卷

同 中卷

和上

滑

同

淨下解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四七

五七

六七

二八

八一

一八四

一八九

一九五

二〇〇

二〇五

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

二二三

假名文章娘節用後篇下之卷

同 三篇

同 上之卷

同 中之卷

同 下之卷

同

金碗八郎孝吉

金碗八郎の死

金碗後無して更に後あり

要石

金屋金五郎浮名額(解題)

金屋金五郎浮名額

金屋金五郎道行

金屋金五郎後日雛形

金谷丹前

鐵輪

神宮渡に信乃猪平に遭ふ

鐘入解脫衣

金を樂む高利の親父

鐘入の段

銀が落てある

銀遣へとは各別の書置

兼てより

人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

六七

八七

九七

一〇九

一九

二

九

七四

七七

一一

五

五七

一八

七六三

三五六

四九三

七七一

八六四

二二七

三九三

三三五

九三一

七八二

金の土用干伽羅の口乞
銀のなる木は門口の柵

兼平

兼平の諷過

狩野雪姫道行

家廟に齎して良臣異刀を返す

花瓶臺記

歌舞伎脚本集例言

歌舞伎脚本集解說

禍福反覆して三士功を同くす

頭鎧を梟て忠與凱旋す

假捕使三路に兵を行る

禿萬歳

禿も水上してから即身上物

壁書

壁塗

嘉平次おさが道行

鎌鼬付提馬風

釜淵雙級巴 解説

釜淵雙級巴上の卷

同 中の卷

同 下の卷

西下

西下

謠

西下

淨上

八中

俳

歌舞

八下

八中

八下

音

浮

狂

俳

近下

怪

淨上

淨上

同

同

八九

一七三

一六

三〇九

九

二〇三

四〇

一

二

六〇

三七四

一三

二五

五三

八八

三三

一五

二〇一

十五

五九

六二

鎌倉三代記

鎌倉賦

龜

龜崎

釜賦

釜迄琢く心底

蝦蟇丸の傳、帶取の池の記

蝦蟇を唾へて小蛇兩士を會せしむ

上方の芝居好

上方土產女郎哥舞妓

髮きりても捨られぬ世

紙子身袋の破れ時

紙さへ御目違ひ

紙すき

紙漉

神鳴の病中

神のとがめの榎木屋敷

紙袋序

髮は島田の車僧

禪獅子蟲履物(新獅子)

紙屋の段

音 義太

俳

西下

西下

俳

西上

讀

讀

滑

浮

西上

西下

西下

俳

俳

西上

西下

音

音

八上

西下

二〇〇

二二三

三六九

四〇七

四七三

二六三

八三

六三

六

一八七

二四

一三三

六二

三七三

三七四

三四三

一四

四九三

一八〇

八五四

七八

力

新田宮
 借物の辨
 苧菅桑門築柴轆（解題）
 苧菅桑門築柴轆第一
 同 第二
 同 第三
 同 第四
 同 第五
 苧萱
 枯尾花 解説）
 枯尾花上
 同 下
 川を隔て孝嗣志を演ぶ
 皮買う
 川風に
 川上
 革籠
 かはご作り
 川崎
 河内宿禰太郎館の場
 蛙
 蛙合 解説）
 蛙合

官女（八島落官女の業）

菅承相花園の場

観修寺

閑情末摘花（解説）

官女に人のしらぬ灸所

官女のうつり氣

願書の卷

觀山寺の隱家に戀路のまぼろし

觀進帳

寛政七年四月三日二日二荒の宮の御

前の舞樂を見侍りし時宮のおもと

人岸本土佐守利貞主のもとめによ

りて書きておくりけるふみ

奸詐之悔執權還を送る

神田祭

邯鄲

邯鄲

關東小六後雛形（淡島）

勘當は請太刀親の家を鞠走る待形氣

官に登る座頭

關八州繫馬（解題）

關八州繫馬

同

第二

音 長唄

歌舞

西下

人 解

西下

西下

淨上

淨下

音 長唄

和上

八下

音 清元

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

音 河東

八七七

四四

五四

八一

二五

八五

二七

二六

八九

二〇

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

二六

關八州繫馬第三

同 第四

同 第五

神原

かんれぎ

韓朋

冠師

咸陽宮

勘岩は世帯樂き、過た始末形氣

閑立和尚におくる詞

管領議を容て良臣を疑ふ

管領邸に禍鬼新兵衛を抑む

漢和手引草序

きの部

題

目

鬼一法眼三畧卷（解題）

鬼一法眼三畧卷第一

同 第二

同 第三

同 第四

同 第五

利風流のうそ

近下

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五九三

六〇七

六二二

六四〇

三〇九

三九一

三五四

四七三

六八九

七三

三八三

一〇一

四七四

書名種類 頁

淨上 解

同

同

同

同

同

同

利風流のまこと
 紀伊の國
 勢獅子
 勢獅子劇場花替
 祇園祭禮信仰記
 聞ぬ良は夜明の釣鐘
 義俠元を瘞て郭號を遺す
 義兄弟雨林に恵を懲す
 菊合賦
 菊花の約
 菊川英山
 同
 菊慈童
 菊慈童
 菊壽の草摺
 木屑の松やうじ一寸先の命
 問レ菊辭
 菊露
 菊の翁
 菊畑の三勝
 奇功を呈して義俠冤囚を寧す
 鬼谷に落て鬼となる
 木こり

俳	怪	八中	音	西上	諺	俳	西上	音	音	音	同	風	怪	俳	八下	八中	浮	音	音	音	滑
			清元					長唄	長唄	長唄	五〇一	評傳						義太	常磐	歌澤	
三五三	三〇一	三〇一	六三八	六四九	六四四	四六六	五二三	八三三	七六九	四六七	五〇一	一三	五七	五七	一三	五八〇	七四二	二五	四八	四八	六三三
同	吉例花角力會 (午正月)	吉原寺四十八夜の夜見世談義 (申正月)	來る十九日の榮耀獻立	同	喜多川歌麿	北尾政演	同	北尾重政	蟻道一周忌に手向る詞	岐岨賦	木曾のたけ山	岐岨路紀行	木曾	喜撰法師	喜撰	黃瀬川	義士を渡して俠輔河水に投む	紀二六月下に直刺に逢ふ	吉書初	岸連瀟常磐松島	義士忠臣藏

同	川	浮	西下	同	風	同	風	同	風	俳	俳	音	俳	諺	音	音	西下	八上	八下	狂	音	音	音
					評傳		評傳		評傳			歌澤			清元	長唄				長唄	常磐	義太	
六〇一	六二六	四九四	九三二	六九七	一五	三八三	九	一〇三	八	七六	四六三	九三二	五三七	四三三	六二五	八八一	四五四	五二〇	二五八	八〇六	九八	四八六	三六

吉例花角力會 (巳 春)
 同 (辰 春)
 同 (卯 正月)
 同 (寅 正月)
 同 (丑 正月)
 同 (子 正月)
 同 (亥 年)
 同 (戌 春)
 同 (西二月十五日)
 同 (申 春)
 同 (西正月廿五日)
 狐僞て人に契る
 木辻鳴川に深入する色男
 詰汾
 狐崎
 狐四天王
 狐妖恠
 喜怒哀樂虚誕之略圖
 奇特に驚て刺客等各歸順す
 喜内住家の段
 木に餅の生辯
 衣かづき思破車
 鬼怒川物語

川 五六
 同 五七〇
 同 五九六
 同 五三
 同 五七
 同 五三
 同 四九三
 同 四八二
 同 四八七
 同 四一
 同 六九
 怪 一七三
 浮 三九
 怪 三五
 怪 四六五
 西下 三五
 西上 四四
 怪 四〇三
 滑 四八三
 八中 三三
 音 義太
 狂 七六〇
 音 長唄
 音 新内
 音 六九八

きめくの 砧
 きめた 鬼念佛贊
 甲子 木下藤狭間合戦
 木下幸文 紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話
 紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話
 宜白亭記
 吉備津の釜
 黄表紙以前
 黄表紙校訂餘言
 黄表紙について
 黄表紙の特質
 黄表紙の變遷
 機變を旋して素藤手狼の因を易る
 京鎌倉に二犬士四友を憶念す
 きみなまつちの
 喜三之庭
 奇妙院頼智の禱祈之事
 奇妙圖彙 解説
 奇妙圖彙

音 歌澤 九三八
 謠 三三
 音 河東 二九七
 狂 八二
 音 一中 三三三
 音 義太 一三〇
 和下 七二
 怪 五五二
 怪 四八二
 俳 五六
 怪 六六
 黄 解 一
 黄 解 七三
 黄 解 一
 黄 解 三
 黄 解 六
 八中 五六〇
 八上 六八一
 音 歌澤 九四二
 音 長唄 九七
 滑 九三
 滑 解 二六
 同 二〇一

君は今頃

客を留めて次閨太閤牛に訪る

客者評判記(解説)

客者評判記

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

逆將人を樹にして公子衛を褒ふ

逆旅の小集妙に郷豪を懲す

客船を哄して水冤鬼酒を沾る

木やり

舊恩を報答して戌孝前言を全うす

仇家の恩人

九花亭記

舊君に謁して信乃父祖の忠義を詳にす

竊寇を追失ふて助友敵を換ふ

給仕盆丸年廿年の奉公

灸する巖の疊夜着

舊跡遺聞序

舊黨招に應じて土民益愛ふ

窮鳥舊巢に還りて巧に轉る

牛馬の沼

窮阨初て解て轉故人に遭ふ

音 歌澤

八中

滑 解

同

同

同

同

八中

八中

八下

音 富本

八下

讀

俳

八下

八上

浮

音

和上

八中

八下

西下

八上

九四三

二五

四六

四三

四三

四三

四三

四三

二五

八三

五四

五五

二四三

二七〇

五九

五三〇

五九六

二四七

三七六

四三

一四

四八

六二

京へ見せいで残りおほいもの

經を營む信心親父

供客提婆津多品

同

供客南瀾六素藤を襲ふ

狂歌才藏集(解題)

狂歌才藏集

同

春歌

同

夏歌

同

秋歌

同

冬歌

同

離別歌

同

露旅歌

同

哀傷歌

同

賀歌

西上

浮

讀

同

八下

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

八六八

九二

四八

四三

五七

三四

七二

七五

七三〇

七三三

七三七

七四〇

七四二

七四三

七四四

七五〇

七五五

七五八

七五九

八二〇

七九七

八〇四

京の人もらさぬ中忍びてあひ釘
俠婦節婦

狂亂(多見藏狂亂)

狂亂雲井袖

嬌裏書を遺して公連率を償ふ

魚膽の帷

玉兔

玉壺軒記

玉眞娘子

玉林道人雜談して回頭を屈する話

清經

魚服

清見關

清水を退去して清玄落魄す

清水の清玄櫻姫を眷戀す

きよみづもち口上

清見寺

清見八景

清元節の部

清盛の石塔

御油

去來誅

去來發句集(解説)

西上	五〇八	去來發句集	俳	八一
八中梗概	一五	同	同	一八五
音 長唄	八六六	同	同	一八七
音 長唄	八〇八	同	同	一八八
讀 元	元	同	同	一九一
怪 三五	三五	去來抄(解説)	芭	四三四
音 清元	五八四	去來抄	同	四三三
俳 五五	五五	許六離別詞	解	四三三
怪 四三	四三	吉良家討入の場	芭	八二〇
怪 七四	七四	吉良家奥殿の場	歌舞	一〇三
謠 二八	二八	久來石	歌舞	一〇六
怪 四〇五	四〇五	切兼曾我	西下	四一五
西下 四三	四三	桐壺に	謠	四三三
讀 六	六	梧の朽橋	音 歌澤	九七
讀 七	七	器量に打込舞の内證調て見る鼓屋の娘	西下	五〇五
狂 七八	七八	鬼燐馬を助けて雨嬢を導く	浮	八二
西下 四三	四三	麒麟變じて驚馬となる	八上	六〇五
音 河東	三〇四	英切白根金生木(解説)	滑	四〇六
音 五五	五五	英切白根金生木	黃	三三
西下 五五	五五	龜樓狂歌會序	同	一八三
西下 四八八	四八八	祇王	狂	七九八
俳 四八八	四八八	杵折の賛	謠	二三〇
俳 解	二二	祇園町祭典の場	芭	二六〇
		蝦蟇夕の講中	歌舞	一〇八
			西下	五七

金花山

銀河ノ序

金閣寺の段

金閣寺の幽霊に契る

金閣拜見之信牌

金紙の七髻結

金々先生榮花夢(解説)

金々先生榮花夢

金々先生造花夢(解説)

金々先生造化夢

金銀も持あまつて迷惑

金札

徑山寺

金子の折紙正直な伊勢商人

禁足旅記

巾着山白人寺に弘むる新宗

公平傳

金鳳釵

金堀

吟味は奥鳥の袴

金龍寺

金蓮寺に番作讐を撃つ

禁を犯して孝徳一婦人を失ふ

く の 部

題 目

書名種類 頁

喰さして袖の橋

杭野屋甚次郎櫻を植し事

くけ帯よりあらはるゝ文

九歳の神童氏を花營に請ふ

草刈

草刈説

稗史億説年代記(解説)

稗史億説年代記

草薙

草枕露の王歌和

公事は破らずに勝

櫛ひき

俱舍宗

國栖

九助江戸下りの事

九助が女房袖ごひする事

九助住所えたづね行殺さるゝ事

楠潭正左衛門不戦して敵を制する話

楠露

葛松原

西下

滑

西上

西上

八下

俳

俳

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

葛の松原 解説

葛の松原

藥賣

藥はきかぬ房枕

藥を樂む壽命親父

口舌して

口舌の事ふれ

口説八景

九世戸

曲舞舞

貝足甲も質種

貝具着て是見たか

くたけて物をおもふ碓

口添て酒輕籠

くらぬおもひ

ぐちも出る筈

杵作り

國豊かの西王母

國に移して風呂釜の大匠

國の掟はちえの海山

國見山

久能山

窪後満

芭 解

同

俳

西上

浮

音

西上

音

諸

俳

西下

西下

浮

西上

浮

音

俳

音

西下

西下

西下

風

評傳

四三

四一

三九

八〇

八五

九四

五三

七〇

七四

三五

八六

三〇

七三

二三

二二

九三

三八

八九

一三

二六

四〇

四四

六

窪後満

熊谷直好

熊坂

くまさか幼時より盜せし事

熊坂長伴ゆうれい的事

くみし

隈取安宅松

久米之介お梅道行

雲助

蜘蛛の絲

蜘蛛絲梓弦

雲の上を下からは量らぬ升屋が献立

蜘蛛拍子舞

蜘蛛の鏡

蜘蛛塚

蜘蛛の園に繋ぎ留た隙行駒下踏

曇は晴る影法師

闇の手がた

くら細工

鏡牡丹

鞍馬獅子

鞍馬天狗

鞍馬山

風 下 解

和 下 解

諸

浮

浮

俳

音

近上

音

音

滑

音

怪

怪

滑

西下

西上

俳

音

音

諸

音

二五

七

五三

三七五

三七三

三七七

七九七

四七三

六〇九

三六一

三六一

一五

八〇六

一三

三五

一三九

二八九

三八八

三三三

三四七

五〇三

五三四

九三

藏廻り
藏人傳
俱利加羅落
車僧
車作
車返里
廓三番叟
廓の壽
廓の花見時(解説)
廓の花見時
曲輪輝
吳服
黒川源太主山に入つて道を待たる話
黒かみ
黒髪山
黒木賣
くるさうし
黒主小町
羣小を射て夢便法場を闘す
桑名
桑名屋徳藏入舟物語(解説)

俳 三五四
俳 四七
謠 六三九
謠 五四〇
俳 三七
西下 四三三
音 長唄 八六三
音 一中 三四一
歌舞解 八二
同 六一
音 義太 九四
謠 八六
怪 四七〇
音 長唄 八〇八
西下 四九
音 長唄 八三一
芭 五〇七
音 長唄 八八二
八上 五二〇
西下 四九六
歌舞解 四九

桑名屋徳藏入舟物語		口明	歌舞	二六五
同		二段目	同	二六七
同		三段目	同	三〇二
同		四段目	同	三三三
同		五段目	同	三五六
君命を禀て清證再叛の賊を伐つ		八中	同	五六〇
君命を奉りて孝吉三賊を誅す		八上	同	五八〇
題		目	書名種類	頁
桂園一枝(花)		雑歌上	和下	二六
同		雑歌下	同	二三三
同		長歌	同	二三七
同		施頭歌	同	二五七
同		俳諧歌	同	二三八
桂園一枝拾遺上		春歌	同	二四九
同		夏歌	同	二五四
同		秋歌	同	二五八
同		冬歌	同	二六五
下		事につき時にふたる	同	二六八
戀歌		同	同	二七三
雜歌		同	同	二七五

桂園一枝(雪)

春歌

同

夏歌

同

秋歌

桂園一枝(月)

冬歌

事につき時にふれたる

同

戀歌

同

戀歌

稽古所の賦言

稽古所のまこと

慶志を悼て鷄賀へ送る言葉

藝者は人をそしりの種

傾情

傾城(門傾城)

傾城(かりそめの傾城)

傾城(戀傾城、芝翫の傾城)

けいせい浅間嶽(解説)

けいせい浅間嶽

同

同

同

傾城阿波の鳴門

けいせい色三味線(解説)

和下

同

同

同

同

和下

同

同

狂

滑

滑

俳

西下

音

音

音

歌舞

同

同

同

同

音

浮

一八五

一八七

二〇三

二〇七

二四

二七

三三

八〇三

空六

空六

六

七六

七六

八六

八六

六

六

一〇〇

一〇〇

一四三

三

六

けいせい色三味線

同

同

同

同

同

同

傾城請狀

傾城音羽瀧

傾城思升屋(解題)

傾城思升屋上の巻

同

同

傾城からくれなる

傾城禁短氣(解説)

傾城禁短氣

同

同

同

同

同

傾城戀飛脚

傾城島原蛙合戦(解題)

京之卷

大阪之卷

江戸之卷

鄙之卷

湊之卷

浮

同

同

同

同

同

同

近上

音

浄上

同

同

同

浄上

浮

同

同

同

同

同

同

音

近下

一八五

一八八

二三八

二七三

三八八

三三

一五

六八二

四

一九二

一九七

二〇一

二〇一

七

四二

四三

四八

四七〇

四九三

五七

五四

六

降旗を建て豊俊定正を愚にす
候元

甲子吟行解説

甲子吟行

孝子京を去る傳燈の法脉

郷士義に仗て大敵を俟つ

孔子縞子時藍染解説

孔子縞子時藍染

庚子道の記序

孝子白頭にして婚をなす話

口上の覺

好色傳受解説

好色傳受

同上

同上

同上

好色万金丹解説

好色万金丹

同 卷之一

同 卷之二

同 卷之三

同 卷之四

同 卷之五

八下

怪

芭

同

八下

八中

黃

同

和上

怪

滑

歌舞

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五九七

四〇〇

二七一

二七七

四一

三八三

三七

二四三

三七七

七四

七三

八

二五

二六

二七

七二

四

一

八

二

三

四

五

好色七色

孝心を固して信乃曝布に禪す

庚申山の巻

庚申塚の亂闘

庚申堂に俠者賊婦を因ふ

江村の釣翁雙狗を認る

かうぢ賣

香づくし

同

江都二色序

皇帝

孝と不孝の中にたつ武士

高武藏守婢を出して媒をなす話

高師直之覽書

高師直氏宅之繪圖

甲府の亡靈

香木記

後磨山賦

高野詣

高野物狂

紅梅に

更幽亭記

與レ號說

浮

八上

八中

八中

八上

俳

讀

同

狂

詠

西下

怪

滑

滑

怪

俳

俳

諸

諸

音

俳

俳

俳

五九

二〇八

七五

二

一七五

三七七

三四四

一五三

一五七

八〇四

五九六

八八七

五二

六五一

六七四

三〇九

四七四

二二九

七〇四

三九二

九三五

四七三

四六五

固山
 桑折
 氷浮橋
 甲路記行
 子をおもふ親仁
 聲に色ある化物の一ふし
 子が親の勘當逆川をおよぐ
 木蔭の袖口
 小鍛冶
 小鍛冶
 小鍛冶名劔の巻
 小督
 金商人難をのがるゝ事
 粉川寺
 虎眼に點して巽風公文廳を闊す
 孤雁の禍幅
 小菊半兵衛
 吾吟我集（解説）
 吾吟我集上
 同 下
 國主の艶姿
 黒潮夜を犯して曼讃に信館山に赴く
 國性爺合戦（解題）

西下 三九〇
 西下 四一〇
 芭 三八五
 西下 八三
 西下 八三二
 西上 八九三
 西下 六九〇
 西上 七三三
 謠 五五三
 音 八八三
 音 長唄
 音 河東
 謠 四〇三
 浮 三七七
 謠 七三三
 八下 二〇三
 讀 二五三
 音 清元
 狂 五七六
 解 五
 同 空
 同 八四
 同 五八〇
 同 五八〇
 同 五二
 近下 解 三〇

國性爺合戦
 同 第二
 同 第三
 同 第四
 同 第五
 國分寺
 極樂淨土の段
 後家に成ぞこなひ
 こけらは胸の焼付さら世帯
 五元集（解説）
 五元集元
 同 享
 同 拾遺春之部
 同 夏之部
 同 秋之部
 同 冬之部
 同 雑之部
 同 追加
 九日寄三服先生一辭
 心を入て釘付の枕
 心を染し香の圖は誰
 心を疊込古筆屏風
 心なのまるゝ蛇の形

近下 一三九
 同 一四七
 同 一五六
 同 一六六
 同 一七三
 同 四〇〇
 西下 四七四
 音 常磐
 西上 九三三
 西上 五二一
 俳 解 七
 俳 一〇五
 同 二四
 同 一三九
 同 一四四
 同 一五〇
 同 一五五
 同 一五九
 同 一六〇
 俳 四九三
 西上 一六〇
 西上 九〇六
 西下 一四〇
 西上 七一九

心をはたく扶香の煙は二代めの工夫
 志を傾けて夏行四賢を留む
 心玉が出て身の焼印
 心で留めて
 心の切れたる小夏屏風
 古今夷曲集(解説)
 古今夷曲集一
 同 二
 同 三
 同 四
 古今百馬鹿(解説)
 古今百馬鹿
 同 上卷
 同 下卷
 小坂部館の段
 小さん金五郎道行
 小櫻奇縁によりて貴子なうむ事
 越川
 乞食も米に成男
 乞食も橋のわたり初
 來路を説て次團太驢尾に附く
 乞食畫賛
 伍子胥

浮 五九
 八中 二六四
 西上 二八
 音 歌澤 九四一
 西下 二七八
 狂 解 六
 同 一〇三
 同 一三
 同 一四
 同 一六
 滑 解 六三
 同 七二
 同 七四
 同 七五
 同 義太 一四
 音 義太 一四
 淨上 六
 怪 八八
 西下 四〇八
 西下 二七三
 西下 一〇九
 八中 六五三
 俳 四三六
 怪 三六

腰ぬけ仙人
 五色の糸
 木下闇に妙直依介を訝る
 古實者
 五十年忌歌念佛(解題)
 五十年忌歌念佛上の卷
 同 中の卷
 同 下の卷
 木島加伯
 五車反古序
 五條の笙吹清水の乞食
 五條の天神
 御所染の袖色ふかし
 五條の頭に代四郎宿夢を啓く
 悼五條坊一文
 贈五條房一畫賛
 五十初度賀戯文
 故事を尋て政元名畫を疑ふ
 湖水賦
 木末の點滴
 木末に驚く猿の執心
 子捨川
 弔古戰場一文

西下 一〇六
 音 長唄 九〇九
 八上 四九三
 滑 四九二
 近上 解 九八
 同 五三
 同 五七
 同 五五
 同 三六
 怪 六四
 俳 四三
 西上 三六八
 怪 八三
 西下 一六三
 八下 五一
 俳 五三
 狂 八九
 八下 一九三
 俳 二二六
 讀 七四八
 西下 一九九
 西下 四〇七
 俳 二九六

後撰夷曲集(解説)

後撰夷曲集

同 卷第一

同 卷第二

同 卷第三

同 卷第四

同 卷第五

同 卷第六

同 卷第七

同 卷第八

同 卷第九

同 卷第十

御前義經記(解説)

御前義經記

同 卷之一

同 卷之二

同 卷之三

同 卷之四

同 卷之五

同 卷之六

同 卷之七

同 卷之八

御前道行

狂 解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

浮

同

同

同

同

同

同

同

同

同

滑

六

一五

一七

一九

二〇

二二

二四

二六

二八

三〇

三二

三四

三六

三八

四〇

四二

四四

四六

四八

五〇

五二

五四

五六

小袖曾我

小袖簞笥引出していはれぬ悪性娘

小袖物ぐるひ

火壁松千貫目の翠

後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話

木村の怪異

孤忠鑑に携りて衆惡を訟ふ

滑稽本集解説

胡蝶

琴後集

同 卷一春歌

同 卷二夏歌

同 卷三秋歌

同 卷四冬歌

同 卷五戀歌

同 卷六雜歌

同 卷七題畫歌

同 卷八百二十首

同 卷九長歌

同 卷十記

同 卷十一序

同 卷十二跋

同 卷十三書牘

諸

浮

淨上

浮

怪

讀

八中

滑 解

諸

和上

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四六

六四

四七

六三

四四

五三

三四

一

三四

二七

三一

四六

五四

二七

二六

二七

二八

二九

三〇

三七

三五

三六

三九

琴後集卷十四雜文
同 卷十五墓文

五大堂

恭太平記白石嘶

五大力

子寶三番史

火燧もありく四足の庭

小谷村

小剛次の小鍛冶

小鶴の沼

言葉とがめ耳にかゝる人様

詞ニ角のたゝぬ丸山の口舌

五頭を献りて衆奸卒數頭を喪ふ

言葉の輕行張貫大黒

詞の清濁は古言清濁考に従ひて改む

べきやと人のとへるにこたふる書

詞葉の花 解説

詞葉の花

壽

古那屋の卷

古那屋文五兵衛

小糖三舍の冥加は十萬兩

此里にもう幾度か

和上

四三

同

四三五

西下

三九四

音

義太

音

八六

音

長唄

西上

八二

西下

常磐

音

三六

西上

一〇六

西下

四九

音

長唄

西下

九二〇

西上

四〇〇

浮

八六

八下

三二七

和上

三二

滑

七五

同

解

音

長唄

八上

一五七

八上

梗概

音

七三

此通りと始末の書付
此道に。いろはにほへと

子は三界の首かせ

小咄七種

小春治兵衛炬燵の段

小判しらぬ休み茶屋

恭盤大平記

恭盤大平記

小判は寝姿の夢

小文庫 解説

小文庫

同 冬之部

同 春之部

同 夏之部

同 秋之部

小文吾の山林房八

小文吾夜衣を喪ふ

小文吾諷諫して高く舟水を諷す

小文吾勇を奮て鴛鴦を撃つ

鼓盆の悼み定正過を和る

護法

高麗藏拍子舞

小町おもへば

西下

九五三

西上

七六二

浮

一八〇

滑

一〇九

音

蘭八

西上

七三

近上

五八

同

七三

西下

三七

芭

六〇八

同

四六

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

八二

同

小町少將道行
 小町の木像を九間にゆづりける副文
 小町姫
 小松岡
 小松曳
 小湊に義實義を聚む
 虛無僧
 子守
 米賣
 廻山姥 解題
 廻山姥
 同 第二
 同 第三
 同 第四
 同 第五
 薦野記
 抱守主の兒に代りて死す
 小紋雅話(解説)
 小紋雅話
 五文取の餅一口の鬼味噌屋
 子易森
 小山の關守
 子故の闇と戀の闇一寸先は見得ぬ方便

音 一中 三三
 俳 九九
 音 歌澤 九六
 西下 四〇三
 音 長唄 七九
 八上 六
 音 長唄 八〇
 音 清元 五〇
 俳 三八〇
 近上 一七
 同 六三
 同 六六
 同 七三
 同 七九
 同 八四
 俳 四四
 怪 四四
 滑 二六
 同 一七五
 浮 五七〇
 西下 四八〇
 西上 九〇三
 滑 一四三

小指は戀の焼付
 小指は高くゝりの覺
 曆(解題)
 曆 同第一
 同第二
 同第三
 同第四
 同第五
 五葉松原序
 吾樂菴記
 狐龍化石を胎してゝ大蟬脱す
 碁立軍法
 五輪碎
 是ぞいもせのすがた山
 五郎
 五老井記
 五郎四郎傳
 ころはとこなつ
 衣川
 衣の關
 聲色好
 同

西上 二五五
 西下 三七一
 淨上 解
 同 一
 同 三
 同 五
 同 七
 同 一〇
 同 一二
 狂 八〇五
 俳 五三四
 八下 七五九
 近下 一六七
 謠 六四三
 西下 八九五
 音 八九七
 俳 二六九
 俳 八九七
 音 長唄
 西下 九三
 西下 三九二
 西下 三九二
 滑 四八三
 同 四八八

子別れ
權三 おさひ道行
紺の前垂
權八

さの部

音 常磐 四〇
近下 一八七
音 歌澤 九四三
清元 五七三

西鶴名残の友卷二
同 卷三
同 卷四
同 卷五

西鶴文反古(解説)

題

目

書名 種類 頁

才覺を笠に着る大黒

西下 一〇八

西鶴俗つれく(解説)

西鶴おきみやげ(解説)

西下 解 一〇三

西鶴おきみやげ卷一

同 六九

同 卷二

同 六九

同 卷三

同 六九

同 卷四

同 六九

同 卷五

同 七二

西鶴綴留(解説)

西下 一一

西鶴綴留卷一

同 七二

同 卷二

同 七三

同 卷三

同 七三

同 卷四

同 七三

同 卷五

同 七三

同 卷六

同 八二

西鶴名残の友(解説)

同 一三

西鶴名残の友卷一

同 九七五

西國下

西下

四九

定書號一序

諸

六四七

同

同

四五

災禍從地涌出品

讀

四七五

細工の唐船

怪

三六三

西行上人像譜

俳

三三五

西行櫻

諸

二〇三

佐伊川

西下

四〇八

才覺のちくすだれ

西下

六三八

同 卷五

同

八七

同 卷四

同

八八五

同 卷三

同

八七三

同 卷二

同

八五九

同 卷一

同

八四七

同

同

八三九

同

同

二六

同

同

九〇九

同

同

一三

同

同

一〇三

同

同

一〇三

同

同

一〇一

同

同

九八九

同

同

九八九

さいすり

再戦場に親兵衛五知己に會す

歳旦年鑑序

歳旦の口號

歳旦辭

歳旦說

齊藤五

歳暮

歳暮

最明寺殿百人上誦(解題)

最明寺殿百人上誦上の卷

同 下の卷

最明寺道行

齊明記童謡序

柴門辭

幸紋盡し

佐保山

境橋

堺明神

坂下

盃のとりやりのむづかしき酒癖

嵯峨日記(解説)

嵯峨日記

俳

八下

狂

俳

俳

俳

論

俳

芭

近上解

同

同

近上

和上

俳

音 長唄

論

西下

西下

西下

滑

芭

同

三七四

五四五

七九八

四七〇

六六六

六六六

七三三

九五四

二六五

五三

一七五

一八六

一八六

二六二

二二三

七二一

二五

四八五

四八八

五〇四

六九

二七四

三五

嵯峨の風流男

逆鋒

相模登

酒屋の段

さがらの殿の北のかたの御もとへかへし

同

同

同

詠梅松連理清元

鷺娘

鷺娘(柳羅諸鳥囀の内)

櫻池

櫻井

櫻川

櫻谷

櫻塚揚貴妃櫻の來由

櫻に被る御所染

櫻の句小序

櫻姫甦生す清玄枉死す

櫻姫薄命を悲みてふたたび病に臥す

櫻姫妖氣に魅はれて三たび病に臥す

櫻姫宗雄を慕ひてひとたび病に臥す

櫻姫離魂化して骸骨となる

西上

論

音 長唄

音 義太

和上

同

同

論

音 清元

音 長唄

音 長唄

西下

論

論

西下

論

西下

俳

讀

讀

讀

讀

讀

四八

七三

八四一

四二

四三

四三

二六六

五八六

八四八

七四

四九

四八

二五七

三九三

一三八

三六五

四九七

一〇七

一〇三

二二

六六

二七

櫻よし野山難義の冬
 左京兆恩を東臣に厚くす
 酒を樂む賢人親父
 酒つくり
 狭衣
 早衣喜之助
 佐々木
 佐々木曹五茶師紹芳を討つ話
 指面草(解説)
 指面草
 さす盃は百二十里
 貞任
 皐月五月雨
 薩埵山
 さつまくと
 殺生石
 定正將を連て水陸大軍を起す
 定正水路に大兵を行る
 貞行暗に靈書を献る
 貞行奥に託て釋子を留む
 貞行主に謁して克を奏す
 五月くす玉を人のもとへおくるとて
 雜庫中に限代戌孝を捕ふ

西下	八下	浮	俳	謠	音	謠	怪	滑	同	西上	謠	音	西下	音	西下	西下	八下	八下	八上	八下	八中	和上	八中
九七一	一七三	八八一	三七	六九三	六九三	七四〇	七二三	一八	二七	二八	六七九	九四〇	四一	九三三	四九	四九	二九四	五九一	一五二	三七一	五三三	四〇〇	九三
雜說	薩摩歌 解題	薩摩歌 上之卷	同 下之卷	殺を示して頑父再醮を羞む	茶店に憑ふて奸佞落葉を試す	座頭	座頭(官に登る座頭)	座頭(關三の座頭)	柳巷訛言(解説)	柳巷訛言	花街の色絲	里の花燈籠の記	青樓春道中双六	里見御曹司優に陣營に還る	里見源老侯富山に亡女を弔ふ	里見侯白濱に旅櫓を葬る	里見對聯合軍の大決勝戰	花街模倣薊色縫(解説)	花街模倣薊色縫	同	同	同	同
序幕	二幕目	三幕目	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
俳	近上	解	同	同	八上	八中	音	音	音	滑	同	音	狂	音	八中	八中	八下	八下	歌舞	同	同	同	同
二六一	六二	二〇六	二四	三一	二〇三	六〇五	八三八	八六五	七〇	一〇九一	七三三	八六	六四四	五四	四五六	五一	九五	九九	八五三	八五五	八五五	八五五	八五五

花街模様薊色縫四幕目

眞方

實方

實方塚

實盛

左母次郎と鑓上宮六

左母次郎夜新人を畧奪す

亮々遺稿上 春之部

同 夏之部

同 秋之部

同 冬之部

同 戀之部

同 雜之部

同 下 畫贊之部

同 組題百首

同 貧窮百首

同 文章之部

贈ニ佐屋洗耳一序

鞠當

鞠卷切

座右銘

佐夜中山

さらし三番叟

歌舞

謠

謠

西下

謠

八上

八上

和上

同

同

同

同

同

同

同

同

同

俳

音

俳

西下

音

九三

六六

七三

四四

二五

三九

三八

三三

三二

三九

三九

三五

三五

三五

三五

三五

三五

四七

九一

三三

二七

四七

七六

更科

更級紀行 解説)

更級紀行

更科姨捨月之辨

晒女

晒女の落雁

さりとては後悔坊

猿

猿石の旅宿に濱路を誘ふ

さるがく

申樂の諸座

佐留川

さるで戀する十二段

猿舞

猿簀ノ序

猿廻し

猿簀(解説)

猿簀

同 乾冬

同 夏

同 秋

同 春

同 坤

諸

芭

同

芭

音

音

西下

音

八中

俳

諸

西下

浮

音

俳

音

芭

同

同

同

同

同

同

六四

二七

二六

八三

八五

八五

一〇八

八三

七〇

三六

二

四三

一三

八五

二四

八四

四一

七一

七七

七九

八一

八三

八六

澤市内の段
 澤江
 澤紫色水上
 三勝半七
 山王宮
 三鶏集序
 山家秋
 三吉愁の段
 三匠の瓶里見候を醒す
 殘仇を斬て毛野莊介と戦ふ
 參宮の女殺されし事
 參詣は枯木に花の都人
 三大士再會して宿因重て話表す
 三冊子(解説)
 三冊子
 三士一僧五君を敬ふ
 三士挽歌
 殘槍を受けて齋僧禍鬼を告ぐ
 三尺の童子志を演
 三社祭禮の段
 卅三間堂棟由來
 山水のかたうつしたる繪を見るといふ題にて

和上	音	西下	音	音	西下	俳	諸	音	八中	八中	浮	西下	八中	芭	同	八中	俳	八中	八上	音	音	和上	
	義太		富本	新内				義太						解						義太	常磐		
二三	五〇六	五七	六七	四五	四九	六五	二二	五〇	二三	三九	三三	三四	四六	四五	一三	四三	六九	三三	四七	一七	二三	二三	
山水のかたかける繪を見る記	山水譜	三笑	三世相續文章	山中の鬼魅	山中の湯	山中問答(解説)	山中問答	三陣を衝突して靈猪再功を奏す	山本京傳畫美人合序	三七全傳南柯夢(解説)	三七全傳南柯夢	卷之一	卷之二	卷之三	卷之四	卷之五	卷之六上	卷之六下	三人吉三	三人生辭	三人の妓女趣を異にして各名を成す話	座蟲辰	
和上	俳	諸	音	怪	芭	芭	同	八下	狂	讀	同	同	同	同	同	同	同	同	同	音	音	怪	滑
			常磐							解										清元	常磐		
三九五	二五四	四六〇	四五〇	二五七	二六五	四三九	五二二	五五三	八〇七	五九	五三九	五五五	五七一	五九一	六二三	六三三	六五五	六六九	六八一	四三〇	四九七	四八三	

下帶斗の玉の段

下紐關

七騎落

七景記

七拳圖式

七福人

七福人(解説)

七福人初編

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

同 二編

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

同 三編

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

同 四編

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

西下

西下

謠

俳

狂 長唄

滑 解

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一〇三七

四〇九

四三

五〇三

八二七

七三三

六

九三一

九三三

九四四

九五三

九六三

九六七

九七七

九八六

九九七

一〇〇一

一〇〇九

一〇一八

一〇二七

一〇三二

一〇三九

一〇八八

七福人五編

同 卷之上

同 卷之中

同 卷之下

七步蛇の妖

七枚綴花の姿繪

賤が手業の

日月星晝夜綴分

突花集序

室の遊女に氣をはりま湯

賤機

志豆機山

蟲揃

死出の旅行約束の馬

してやられた枕の夢

四天王大江山入

自得の箴

志渡寺の段

品川

品玉とる種の松茸

死なば同じ浪枕とや

死なば諸共の木刀

信濃坂

滑

同

同

同

怪

音 長唄

音 歌澤

音 清元

俳

浮

音 長唄

西下

怪

西下

西上

音 常磐

芭

音 義太

西下

西下

西下

西上

西下

一〇五九

一〇六三

一〇七一

一〇八〇

一一〇

八三三

九三三

六三九

七〇

三三三

八七一

四六六

二五八

二二三

五二四

三七八

二六二

一一三

四三六

七三六

一五

二四〇

四三

死人は目前の劔の山
 自然居士
 自然居士過去物語
 師説
 信田妻釣狐の段
 信乃道簡甲主に謁す
 信乃と頼藏と糠助の子
 不忍池に親兵衛河鯉を釣る
 しのびごま
 忍び扇の長哥
 忍逢春雪解
 忍び川は手洗が越
 しのび車
 竊の術
 忍の段
 忍び盤男女の床違ひ
 忍夜戀曲者
 葱賣
 忍ぶ戀路は
 忍措石
 信夫峯
 志濃夫廼舍家集
 同 第一集(松籟艸)

同	和上	西下	音	音	音	西上	音	怪	音	西上	音	西上	浮	八中	八上	八中	音	俳	音	諸	西下
			歌澤	常磐	常磐	河東	長唄			清元					梗概		河東	一中			
六三六	六二五	四二一	九四三	四〇三	四三九	八六六	一九九	二三八	九一五	二四	六八八	三六九	六二	五九一	五	一三	三〇三	二五八	三九	四四	
島村蟹	島臺	同	姉妹本事品	信濃下り	指峯堂記	四方髪の傾城	柴門を敲きて羅衣宛托を訴ふ	柴田	柴樺の雨笠	柴賣説	四梅廬賦	芝居通	芝居好	芝居裏の喧嘩に難波のどろどろ	信夫山	同	同	同	同	同	
			品七漫に奸臣を話説す												補遺 (福壽艸)	第五集 (白蛇艸)	第四集 (君來艸)	第三集 (春明艸)	第二集 (襖襟艸)		

怪	音	同	讀	八上	近上	俳	浮	八中	八上	諸	讀	俳	俳	滑	滑	浮下	西下	同	同	同	同	同
	長唄																					
二六九	八九六	三九四	三八九	六三一	五五四	五七六	一五四	三三三	七〇四	六八五	八六三	二五八	二四四	四七六	四七〇	二七六	四四四	六九七	六七	六八	六五三	

鳥廻

同

死所も多きに爰は扱

清水濱臣がもとへ

清水濱臣の泊酒舎の記

師命を守りて星頼遺骨を齋す

能色相圖

下河邊拾水

仕もせぬ事を隠しそこなひ

下毛州赤岩庚申山の紀事

しもつまの

下の關のはんじやう

四々七分の玉もいたづら

罪姫の罪立身せず

舍整挽哥并序

射御辯

寂阿におくる書

錫を鳴して、大記總を索

石橋

石橋(外記の石橋)

杵子銘

車軸の難義かゝる迷惑

蛇神を責殺

諸

同

浮

和上

和上

八中

普

風

西下

八上

普

浮

西上

怪

俳

俳

和上

八上

諸

音

俳

浮

怪

七二五

六三二

七三二

四〇八

三五六

六六八

六三七

一七

三五

六二

九三九

一四四

二二六

二二九

五〇一

三四

四三〇

一八〇

六二九

八六六

五三〇

七四〇

一五七

邪性の姪

積善の餘慶

寂寞道人見に圓塚に火定す

洒落堂の記

舍利

與合整子一文

衆侯を以て孝嗣源公子を授く

衆口を數ふて京兆祿齋屋を誅す

十五日山行

十三夜十三體

十四傾城腹之内(解説)

十四傾城腹之内

執心の息筋

執念は箱入の男

秋千居記

執着獅子

男が慾を止め兼ねた紅粉絞の色入帷子

姑婆の虚

十二月天

十二月の往來

十二人の俄坊主

十二の銀藏に鶏の空音

十八樓記

怪

讀

八上

芭

諸

俳

八下

八下

俳

狂

黃

黃

西上

西上

俳

音

淨下

滑

西下

諸

西上

浮

俳

六六五

二八七

三八

二五九

五四七

四六一

五〇五

二〇三

九四九

八二一

五三

五九

三九〇

八九九

五二二

七三三

三八

六二七

四三九

六

三三三

五九三

二六八

十番功
 十萬億土の段
 十夜の半弓
 衆兇ト挑て信道武藝を顯す
 朱雀の狐福
 朱鍾道
 衆賊を盡して酒顚旅舎を脅す
 手足辯
 呪咀の毒鼠
 壽亭記
 酒顚童子出生の事
 酒中花
 出家にならねばならず
 出世景清(解題)
 出世景清第一
 同 第二
 同 第三
 同 第四
 同 第五
 衆道の友よぶ衛香妒
 衆道は兩の手に散花
 酒德頌
 集來は五匁の外

西上	俳	西上	西下	同	同	同	同	同	近上	西上	音	浮	俳	讀	俳	八中	音	西上	八中	西下	音	論
									解		河東						長唄				常磐	
四七	三四	四六	二	二七	二三	二二	二八	二五	四六	三	二五	三六	五二	一九	三一	一八	八四	一九	三〇	三七	四五	七五
春風馬堤曲	同	同	同	同	春泥發句集	春泥發句集(解説)	春泥集序	倭成忠度	春色惠の花	春色惠の花(解説)	春色辰巳園	春色辰巳園(解説)	春色英對談語	春色梅美婦禰(解説)	春色梅兒譽美(解説)	春抄媚景英對暖語(解説)	潤玉	俊寛	淳干梵	修羅の太鼓	酒樂の鉄男	
冬之部	秋之部	夏之部	春之部																			

俳	同	同	同	同	同	俳	俳	論	人	人	同	人	人	人	人	人	怪	論	論	怪	讀	西上
七九	六五	六〇	六二	六〇	六二	六二	六二	六二	三九	三九	三九	三九	四三	五一	二〇	五一	四〇	三七	四〇	三六	二二	四四

順禮歌の段

蕉翁全傳 解説

芭翁全傳

易生契

情を合て顔路憂苦を訟ふ

奈ニ端花ニ文

端花詠

鍾馗

鍾馗畫讃

上宮太子

上宮太子

昭君

上戸丸はだかみだれ髪

招魂賦

正直な親父を一呑にする上戸形氣

正神宜童部

正直ば一端の木綿商

しやうじきは明りを走る首かせ

賀ニ小女ニ辭

狸々

狸々賛

狸々亂

小乗樓に一僕故主に謁す

音 義太

芭 八六三

同 八六五

怪 二四

八上 二九

俳 四二

俳 五九

諸 五二

俳 四三

諸 五三

諸 五三

諸 五八

西下 八五〇

俳 二四五

浮 六六

淨上 三〇

浮 五九

浮 七〇

俳 五〇

諸 六三

狂 八七

音 七六

八中 六六

生死流轉藥草喻品

松操菴記

松窓乙二發句集(解説)

松窓乙二發句集

同 上春之部

同 夏之部

同 下秋之部

同 冬之部

同 雜之部

丈艸誅

丈草之跋

丈草發句集(解説)

丈草發句集

同 春

同 夏

同 秋

同 冬

同 追加

正尊

松竹梅嫁入雛形

庄野

狀箱は宿に置いて來た男

正札附

讀 五〇一

俳 五四六

俳 五九

同 一〇五

同 一〇二八

同 一〇三三

同 一〇三八

同 一〇四三

同 一〇四七

俳 二八九

俳 五四三

俳 一九五

同 一九七

同 一九八

同 二〇〇

同 二〇一

同 二〇三

同 四九三

諸 三八五

近下 五〇一

西下 四九四

西上 八五五

音 長唄

正札附根之草摺
菖蒲人形

燒亡有定限

聖靈祭文

淨瑠璃供養

淨瑠璃名作集解題

賞祿を後にして安房侯寒働を温す

助給書置

食を樂む達者親父

職人盡し

職人部類序

諸國の人を見しるは伊勢

諸國鏡じろし

序嵯峨の隠家好色菴

女宗にあうて衆道門尻から閉口

諸將の得失其尾を備にす

處女授記品

女中風俗艶鏡

女中湯之遺漏

同

初日

序跋類

敘文端歌の權輿

音	音	怪	俳	音	淨上	八中	近上	浮	近上	狂	西下	近上	西下	浮	八下	讀	風	滑	同	諺	俳	音
長唄	長唄				河東			解														歌澤
八五三	八五三	一〇〇	二九四	二八一	一	六七七	四一五	八三五	三六一	八〇四	七九六	二〇七	八八九	四六四	七三三	四五五	八三一	三〇〇	三三四	三	六九	三七
女郎買五重相傳一重紙子	女郎買惣回向の鐘木町	女郎買大善根の施主の企	女郎がよいといふ野良がよいといふ	女郎の虚言につき廻る大臣形氣	女郎の心中なつて見る鐘木町	女郎の手筈に迷ひの凡夫	女郎方便の一枚起請	女柳追善句合	諸禮女祐筆	諸分の日帳	白石	白糸主水	白井の郊外に狐忠簪を窺ふ	白雄句集(解説)	白雄句集	同	同	同	同	同	同	白川
浮	浮	浮	浮	浮	浮	浮	浮	川	西上	西上	西下	音	八上	俳	同	同	同	同	同	同	芭	西下
五五六	四三	五四六	七五	六九六	三三	五八	四七	六三	六五	二二	四七	六三	五二	四三	七六七	七九三	八〇三	八〇九	八九	三四〇	二六四	四七
清元																						

白川 葛男住吉の異人
 白川 鬪
 白川 橋
 白河 山に代四郎小姐を救ふ
 白菊 の方猿掛の岸に怪骨を射る話
 白坂
 白澤
 白介 の翁運に乗じてに大癡跡する話
 白浪 のうつ脉取坊
 白布 賣
 白濱
 白髭
 白拍 子
 白峯
 幃子 禮文
 しれぬ物 は 子の親
 白粉 賣
 白帷 子かりの世
 しろき 露
 しろさう し
 白酒 賣
 素人 繪に惡や金釘
 代主

西上 四二〇
 西下 四二七
 西下 五〇六
 八下 二四七
 怪 五五五
 西下 四一八
 西下 四二〇
 怪 八三三
 西下 三六八
 西下 三九〇
 俳 五五四
 西下 三九
 諸 三八四
 俳 六二五
 怪 四九
 俳 七八
 西下 三七〇
 俳 九六
 西下 三
 浮 四七
 芭 八二〇
 音 八六
 西上 二
 謠

心猿 心猿の秋の月
 心學 早染草(解説)
 心學 早染草上
 同 中
 同 下
 新可笑記(解説)
 新可笑記一
 同 二
 同 三
 同 四
 同 五
 新曲神樂獅子
 眞紅擊帶
 新古菴記
 甚三内之段
 新鶯娘
 新小夜嵐(解説)
 新小夜嵐上
 同 下
 申山の窟に冤鬼燭燭を託ぬ
 新獅子
 信州川中島合戦(解説)

音 長唄 八五一
 音 長唄 八五一
 黄 解 四〇
 同 二七二
 同 二八五
 同 二九七
 同 二九七
 西下 解 七五
 同 一八七
 同 二〇八
 同 二二九
 同 二四七
 同 二六五
 音 富本 五七
 怪 四〇
 俳 四九二
 歌舞 六八
 音 長唄 八九一
 浮 解 八九
 同 七一九
 同 七三五
 同 七三五
 八上 六九五
 音 長唄 八五四
 近下 解 七三

信州川中島合戦

第二

同 第三

同 第四

同 第五

心中二枚繪草紙(解題)

心中二枚繪草紙上の巻

同 中の巻

同 下の巻

心中箱

心中ふたつ腹帯(解題)

心中ふたつ腹帯第一

同 第二

同 第三

新酒頌

新そでづきん

神代の秤の家

身體破る落書の團

新田原藤太

心底を彈琵琶の海

新田

新内筋の部

近下

同

同

同

近上解

同

同

同

淨上解

同

同

同

同

狂 長唄

音

西下

西上

西上

西下

同

音

五九

五八

五三

五三

五五

七〇

二九

二九

二八

五八

五一

二二

二二

八七

八七

九三

二二

二二

九五

四一

四三

神木の咎めは弓矢八幡

新町

新町の夕暮島原の曙

新山姥

新吉原の段

新龍宮の遊興

すの部

題

すあひ

西王母

水音舎記

醉鶴亭記

醉客に起て小文吾次團太に遇ふ

水閣の扁舟兩雄を資く

瑞岩園

水軍艦を寄せて敗將を載す

隨時樓の記

水仙丹前

隨轉力量

醉墨散人盜魁を捕ふる話

醉菩薩方便品

粹なうき世

西上

西下

西上

音

音

西上

音

音

俳

俳

俳

八中

八上

西下

八下

和上

音

怪

怪

讀

音

一〇八

四九

二五

四四

八六

二五

三〇

八七

五〇

五二

一六

二七

三九

四九

三七

七六

二五

七五

三七

九四

歌澤

數鞭を借て大角義武を挂ゆ
季基訓を遺して節に死す

末摘花

末の松山

末廣がり

すがた繪ときはの松

姿の鏡關寺小町

姿の關守

姿の飛のり物

姿の花穠七種

形の花とは前髪の時

姿の花后雛形

姿に連理の小樓

須川

菅原傳授手習鑑(解題)

菅原傳授手習鑑

助友忠諫父の志に代る

菅谷九右衛門

過去の菴主

過ぎし夜すがら

相田

杉田彦左衛門天狗に殺さる

過て克は親の異見惡敷は酒

八下

五七

鉦花生簾

八上

一九

透間の風

人

六六

杉谷源次郎男色之辨

西下

三九

助六

音

長唄

助六

浮

一五七

助六上卷二度心中道行

音

長唄

助六廊の家樓

西上

五二

助六曲輪の菊

西上

三三

助六所縁江戸樓

音

長唄

双六

西下

八九

素盞鳴尊道行

音

長唄

筋目をつくり髭の男

西上

八三〇

鈴森に毛野縁連を撃つ

西下

四二

鈴が森の段

淨下

七

鈴木春信

同

五九

鈴木春信

八下

五七

鈴の森

怪

一四二

煤掃之説

讀

八三

鈴虫の

音

九三六

雀宮

西下

四二

硯きり

怪

三六〇

硯鄙文

西下

八四九

硯ひきよせ

俳

五三〇

浮

五八

怪

清元

三三

音

長唄

六五三

音

一中

八八九

音

河東

二六三

音

清元

六五三

音

河東

二六七

音

清元

六四四

近下

二三五

西下

七

八中

義太

三三

風

評傳

六四

風

三九

西下

四七

芭

八三

音

歌澤

九四三

西下

四二

俳

三八二

俳

四八五

音

歌澤

九三八

ス

隅田宮内卿家の怪異
隅田の流に
すだれおろした
澄月が一謀五虎を殲す
酢作り
捨てもとゝ様の鼻筋
砂村隠亡堀の場
須磨源氏
須磨硯記
須磨の浦
須磨都源平躰躰(解題)
須磨都源平躰躰
墨繪につらき銀菱の紋
墨繪浮氣袖
墨繪の烏臺
隅田川
隅田川
隅田川續俤(解説)
隅田川續俤
隅田川續俤
同 口明
同 二ツ目
同 三ツ目
同 四ツ目

角力會(午四月)	相撲の段	角紙を試て修驗争を解く	相撲の花扇に異見の親骨	相撲を樂む強力親父	角力取	すり師	駿河舞	摺鉢傳
川	音	八上	淨下	浮	俳	俳	風	風
六二七	富本	三六五	二五一	八五八	三五五	三六七	六九	四二〇
青松居なとぶく詞	誓紙は異見のたれ	青年の婦婦菩提に入る	青白舎記	成美家集(解説)	成美家集	乾春	同	同
七三	西上	八上	俳	俳	同	同	同	同
一五三	同上	五〇六	解	解	同	同	同	同
五七九	同上	五四	同	同	同	同	同	同
五〇六	同上	九七一	同	同	同	同	同	同
九七六	同上	九七六	同	同	同	同	同	同
九八一	同上	九八一	同	同	同	同	同	同
九八六	同上	九八六	同	同	同	同	同	同
九九一	同上	九九一	同	同	同	同	同	同
九九四	同上	九九四	同	同	同	同	同	同
二九〇	同上	二九〇	同	同	同	同	同	同
四〇	同上	四〇	同	同	同	同	同	同
七五七	同上	七五七	同	同	同	同	同	同
七六七	同上	七六七	同	同	同	同	同	同
七六九	同上	七六九	同	同	同	同	同	同
七七二	同上	七七二	同	同	同	同	同	同
七五五	同上	七五五	同	同	同	同	同	同
五三七	同上	五三七	同	同	同	同	同	同
一〇三	同上	一〇三	同	同	同	同	同	同
五一	同上	五一	同	同	同	同	同	同
八六五	同上	八六五	同	同	同	同	同	同
八六六	同上	八六六	同	同	同	同	同	同

關寺	關寺小町	關取千雨幟	關取千雨幟	關の扉	關原與市	石菩薩の前に信乃應報を悟る	世間寺大黒	世間にかくれない寛濶な驕娘	世間胸算用(解説)	世間胸算用	世間の人に鼻毛をよまるゝ歌人形の氣	世間子息氣質(解説)	世間子息氣質	世間娘容氣(解説)	世間娘容氣	世帯持ても錢銀より命を惜まぬ侍の娘	世帯の大事は正月仕舞	せたのはし	勢田橋	節小袖	節義貞操迭に苦諫す	節供遊戀の手習
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
富本	富本	浄下	浄下	常磐	常磐	八下	西上	浮	西下	同	浮	浮	同	浮	同	浮	西下	讀	西下	音	八上	音
五〇〇	二四三	五	四七	三六九	四九〇	一九	六〇三	七六七	九七	五五五	六八三	九三	六四七	九二	七六二	七九七	九一五	二〇四	五二	九〇八	五九	四三〇
雪溪の非熊	薛昭	攝州合邦辻(解説)	攝州合邦辻上の卷	同	殺生石	殺生を樂む佛嫌ひの親人	雪中の時鳥	攝待	節分庵記	節分賦	晴明蘇生の祈	瀬戸	錢の穴より天道の恵	瀬の上	是非齋の銘	是非もらひ着物	欽客	蟬引	蟬丸(解説)	蟬丸	蟬丸	蟬丸笠の段
讀	怪	浄下	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二六〇	四九二	七一	六八二	六九五	五四九	八六九	七九五	三七九	四六九	四六六	五〇二	四六九	四四一	四一〇	二八七	三九七	五〇二	四九	一五五	二八四	二九八	河東

蟬丸道行

せめては振袖着て成とも

善惡因果序品

同

善惡の二つ車

善惡ふたつの取物

示ニ先以一辭

禪院に寓して舊識再會す

千竿亭記

千貫目の時心得た

千貫目持の印判おして深き心

痴氣傳

淺間の宮

定ニ先後一辯

千載の斑狐一條太閤を試むる事

千崎所持弓張提燈

禪宗

禪師曾我

せんじ物師

仙術影畫はりこの虎の卷序

千疊敷其の世語

煎じやう常とはかはる問藥

近上

西下

讀

同

西上

西下

俳

八中

俳

西下

浮

俳

西下

俳

怪

滑

俳

謠

俳

謠

近下

西下

一三

五〇

三七

三五

七七

三八

四四

一〇四

五〇

八三

五七

三〇三

四六五

三二〇

九〇六

六五八

三六一

四九一

三七七

一七六

七九

五〇一

草賀

題

目

その部

全盛歌書羽織

全盛操花車

善玉惡玉

梅檀女道行

錢湯張札

船頭

千日寺名殘鐘

千日寺の柁

千日の夢後

千人前の居風呂桶

千本松原

前磨山賦

千里を跣皮草履一足

川柳校訂に就いて

川柳校訂の程度標準方法等

川柳雜俳集解題

川柳時代年表

川柳と柳楳

先例の命乞

西上

音

音

近下

狂

音

音

讀

讀

浮

俳

浮

川

川

川

川

川

西下

一〇六

五四一

六二七

一六六

八三

六〇六

六四四

六七四

七〇五

六二

四五六

二九

六二〇

八

一五

一

三三

二六

二〇七

書名種類

頁

西下

四六

早歌うたひ
 宗祇の旅蚊屋
 雙玉交其主に還る
 筆曲新譜序
 雙玉を相換て額藏類を識る
 送月堂記
 草子洗小町
 艸字藤説
 雄司ヶ谷四ッ谷町浪宅の場
 雜司ヶ谷伊藤喜兵衛内の場
 贈辭記讃類
 惣七小女郎
 増上寺
 僧正遍照小町
 莊介信義三舍を避く
 莊介伏を設て夜將衛を擒にす
 莊助三たび道節を試す
 嗽石香
 僧專吟餞別の辭
 題レ像文
 示ニ僧古鏡ニ辭
 早梅花妖精
 草風誄

俳	西下	三九二	素麁うり	俳	三九三
八上	一〇二五	草履打の段	俳	義太	一一五
和上	五九	草履作	八上	三五二	
八上	三八七	倉稟を開きて義實二郡を賑す	近下	九〇	
俳	三四三	曾我會稽山(解題)	同	四八	
謠	四七	曾我會稽山	音	二四五	
俳	二六	曾我記念贈	音	一	
俳	二六三	曾我駒の涙	俳	一	
歌舞	七五八	悼ニ楚巾子ニ文	俳	四九	
歌舞	七七〇	續後朗詠集跋	和上	四二五	
俳	七五	足水翁墓碑	黃	四三	
近下	三三	即席耳學問(解説)	同	三〇九	
西下	四三	即席耳學問	芭	三九一	
音	八七九	續の原(解説)	同	四一九	
八下	四一	續の原	芭	五四七	
八下	四九	續猿蓑(解説)	同	八三七	
八上	五九	續猿蓑 卷之上	同	八四三	
狂	七五	卷之下	同	八四六	
芭	二五七	春之部	同	八四八	
俳	四七三	夏之部	同	八五一	
俳	二三	秋之部	同	八五四	
怪	三七	冬之部	同	八五五	
俳	五〇	釋教之部	同		
俳		旅之部	同		

其面影二人枕久
 其面影は雪むかし
 其小唄夢廊
 第二番目九變化
 其容形七枚起請
 蘭八節の部
 其袋(解説)
 其袋
 同 春の部
 同 夏の部
 同 秋の部
 同 冬の部
 その文月
 其雪影序
 曾波可理(解説)
 曾波可理
 同 春
 同 夏
 同 秋
 同 冬
 蕎麥切頌
 蕎麥論
 ぞめきにごんせ

音 西上 長唄 八〇三
 音 清元 五七三
 音 長唄 八七七
 音 長唄 八〇〇
 音 七五五
 芭 五八八
 同 三三三
 同 三三三
 同 三三三
 同 三三三
 同 三三三
 俳 三三三
 俳 三三三
 音 九三三
 歌澤

空も長閑に
 興レ某文
 賀ニ某剃髪ニ文
 仍ニ其求ニ作序
 某別野記
 空辭宜の虛
 祖翁口訣
 それノ名付親
 大往生は女色の臺
 大會
 太神樂
 大柏の權輿
 對牛樓の復讐
 對牛樓に毛野讐を鑒にす
 太祇句選
 太祇句選(解説)
 前編
 同 春
 同 夏
 同 秋

たの部

目

音 歌澤 九三三
 俳 五二二
 俳 五〇二
 俳 四八五
 俳 五四四
 滑 六〇九
 芭 二六七
 西下 一〇一六
 西上 三〇三
 諸 五四三
 音 常磐 四一五
 讀 五八四
 八中 梗概 六九
 八上 六六一
 俳 六八五
 俳 二七
 同 五七三
 同 五七九
 同 五八二
 同 五八四

忠度 忠信 忠信 只是見せぬ佛箱 疊紙うり 疊さし 擊劔の場に親兵衛藝を見す 墮地獄の段 橘千蔭 橘千蔭古今集序墨帖序 橘千蔭書新百人一首色紙跋 橘曙覽 太刀堀 龍田 龍田川には 龍田川邊に 尋れてさく程ちぎり 贈ニ所レ訪不レ遇人ニ文 辰巳の四季 辰巳園 巽八景 伊達大木戸 立役之部

諸 一〇七 諸 四八五 音 富本 五一 西下 八〇九 俳 三八八 俳 三四五 八下 一六三 音 常磐 四六九 和上 解 八二 和上 三六四 和上 三九七 和上 解 九二 諸 六四二 諸 二〇八 音 歌澤 九三五 音 歌澤 九三五 西上 一三 俳 五〇八 音 一中 三〇九 人 二三八 音 長唄 八八八 西下 四〇九 滑 四五九

田上の雪地蔵 谷行 狸の圖贊 樂の罽裼の手 駄馬暗に兩夫妻を導く 丹波都加傳 詭僞の葬送 煙草説 田畑村早川善門院寺内西行庵奉納句合 旅 旅眼石(解説) 旅眼石 旅日記のはしがき 旅のでき心 霸旅の新關 旅の素足 旅の腹帶 旅ノ賦 旅ノ賦 霸旅の宿の上 旅論 旅論 行袱の秘密

怪 三八 諸 五九 狂 八七 西上 三八七 八上 五五九 讀 五六 讀 七二三 俳 四三三 川 七四五 俳 二 膝下 解 八四 同 二七 狂 二七 西上 八〇 讀 八〇七 近下 三八〇 近下 四八七 俳 二〇一 俳 四二〇 讀 六三 俳 三九 俳 五八 八中 梗概 三三

返壁の里
 玉葛
 玉川
 玉川
 玉川の
 環人見春澄を讀し家興さしむる事
 玉簫笛麻鐘
 玉琴の魂魄胎子に還著す
 鬼蛻吟
 玉島
 玉島川
 玉すり
 玉章は鐘に通はす
 玉取
 玉井
 玉野行
 玉藻前腰袂
 玉屋彌兵衛芝居見物の事
 魂よばひ百日の樂しみ
 蒼生子家集杉のしづえの序
 多見藏狂亂
 多見藏西王母
 田村

八中 梗概 六六
 諸 二六
 西下 四三
 音 富本 五〇
 音 歌澤 九三
 怪 九二
 音 長唄 七八
 讀 元
 諸 二三
 怪 三三
 西下 五八
 俳 三二
 西上 七六
 諸 六九
 諸 八五
 俳 九四
 音 義太 一四
 浮 三九
 西下 三五
 和上 二三
 音 長唄 八六
 音 長唄 八七
 諸 六九

爲永春水
 袂にあまる心覺
 手本浦
 田安宗武
 大夫格子に立名の男
 誰捨子の仕合
 誰かは住し菫屋敷
 調讀哥船
 倭屋宗旦七回忌をいたむ詞
 湛海
 斷絃の琵琶
 斷絃文
 談講谷に親兵衛大蟲を射る
 丹後物狂
 斷酒辨
 談州樓記
 團扇贊
 團扇會我 解題
 團扇會我
 短刀を携來し縁連師家を訪ふ
 短刀を懷にして假替女犬田を按摩す
 段々氣のつよくなる酒癖
 境浦兜軍記 解題

人 解 七七
 西上 二九三
 西下 四四
 和上 解 七九
 西上 一〇四七
 西上 一〇五一
 西上 九七
 西上 三〇
 俳 七六
 諸 四八三
 讀 二六
 俳 二九六
 八下 二四七
 諸 七〇九
 俳 四三七
 狂 八六
 俳 三六
 近上 解 四七
 同 一三一
 八中 三三
 八中 一六
 滑 七〇
 淨上 解 六二

壇浦兜軍記	丹波興作待夜の小室節(解題)	丹波興作待夜の小室節上の卷	同 中の卷	同 下の卷	丹波興作夢路の駒	續風	歎老辭
淨上解	近上解	同	同	同	音一中	謠	俳
三七	八八	四七	八三	四三	三八	五五	四七
近松門左衛門の家系及父祖に關して	近松門左門作者生活に入る迄	近松門左衛門の生活の初期	近松門左衛門の活躍時代	近松門左衛門の作品を通して見た作者生涯	近松名作集上卷(解題)	中有魂形化契	中山の狼
近上解	近上解	近上解	近上解	近上解	近上解	怪	怪
五	八	二	一五	二三	三五	一三六	四〇三
ちの部		題目		書名種類頁		忠臣藏前世幕無(解説)	
近頃河原達引(解題)	近頃河原達引上の卷(祇園の段)	同 (揚屋の段)	同 中の卷(河原の段)	同 (堀川の段)	同 下の卷(道行涙のあみ笠)	同 (聖護院の段)	盟誓を破りて景連兩城を圍む
淨下解	同	同	同	同	同	同	八上
八七	九二	九八	九三	九六	九三	九三	一六
知雨亭後記	知雨亭記	取扱人のうそ	取扱人のまこと	忠僕死に事る驢佛の起本	霹靂娘	逃客路無し老俠俘を献る	てうさい
忠臣藏前世幕無	忠臣藏前世幕無	取扱人のうそ	取扱人のまこと	忠僕死に事る驢佛の起本	霹靂娘	逃客路無し老俠俘を献る	てうさい
同	同	同	同	同	同	同	同
五二	四五	四〇	六二	六三	四一	四〇	三九
チ	チ	チ	チ	チ	チ	チ	チ

竹生島
 血死期の道行
 血汐の臙染
 知足菴記
 千足の眞言が古郷へ行くを送る詞
 千々三曜に師弟奸姪を屠る
 父尉延命冠者
 千引
 青樓年中行事
 張良
 長鬚國
 長生の道士
 張守一
 徵書を返して四彦來使に辭す
 長者經
 張遼言
 聽箴
 長短解
 着到馬ぞろへ
 定茶名一文
 茶碗銘
 鳥獸魚虫の掟
 塚中の契り

怪	俳	俳	俳	淨上	俳	俳	怪	近下	八上	怪	怪	怪	怪	諺	風	諺	諺	八中	和上	和上	近上	近上	諺
三三四	五四四	二八六	五三	二六	四〇八	二八四	四二	三三五	四六	三九八	一一四	一五一	五九四	七九	六七	七	三九	二〇三	三五七	四三〇	三〇〇	六六	
同	同	同	同	忠臣藏年中行事	忠臣藏年中行事(解説)	、大水陸に衆鬼を濟度す	、大命を聴く善巧方便	、大庵の厄に親兵衛伴を喪ふ	、大庵に十僧法筵を資く	、大巧に妖賊を滅す	同	同	同	同	同	樗良發句集	樗良發句集(解説)	同	同	同	同	千代尼句集上	千代尼句集(解説)
四月	三月	二月	正月								冬之部	地秋之部	夏之部	天春之部				冬	下秋	夏	春		
同	同	同	同	同	歌舞解	八下	八下	八中	八中	八中	同	同	同	同	同	同	俳	同	同	同	同	俳	
九七五	九六二	九五二	九四〇	九三七	一〇三	六六五	三二	六八六	二七三	六四三	六三九	六三	六二七	六五五	六三三	三〇	五六六	五六三	五五九	五五五	五四九	二六	

忠臣藏年中行事 五月
同 六月
同 七月
同 八月
同 九月
同 十月
同 十一月
同 十二月
忠兵衛梅川相合駕籠
身柱もとに千貫目の埃
陳情表

つ の 部

題 目

終には掘ぬきの井筒
對の編笠鞘當
追兵屢逼りて忠臣主を擁ふ
追慕辭
追善玉柳
通言無茶楠序
通事
通變のうらなひ
杖突の里

歌舞 一〇一
同 一〇八
同 一〇四
同 一〇五
同 一〇七
同 一〇九
同 一〇八
同 一〇三
近下 一〇
浮 六〇三
俳 三七

書名種類 頁
西上 二九七
音 長唄 九〇一
八下 六三〇
俳 六七六
川 六八七
狂 八〇一
俳 三五四
浮 一一
西下 四九九

津輕 月あかり
月影に
月花慈反鳥
對月言志といふことを題にて書けることは
月にも増る高雄の紅葉
月に彈る琴浦が三味
月に薄雲かゝる情
月にも花にも只濃紫
月の宴の歌の序になすらへたる文
月詣集跋
月より上に名は高松
月額最中名取種
親の木
月の卷
月見崎
月詣集跋
月雪花名殘文臺
月雪花名殘文臺
月雪花蒔繪の匣
月雪花蒔繪の匣
月夜がらす
月より上に名は高松

西下 三七
音 歌澤 九七
音 歌澤 九六
音 清元 五九六
和上 四三四
浮 二八一
浮 二九五
浮 三〇三
浮 二八五
和上 二〇五
和上 三九五
浮 二九〇
音 長唄 八一九
西下 四〇五
音 長唄 八六七
西下 三九三
和上 三九五
音 清元 五八四
音 長唄 八五七
音 清元 六〇六
音 長唄 八六六
浮 歌澤 九三三
浮 二九〇

津國女夫池第五

つのもじ序

椿は生木の手足

壺坂寺の段

壺坂靈驗記

壺石文

壺碑

壺堀て欲の入物

爪音幸紋づくし

妻に泣する梢の鶯

妻の夢を夫面に見る

詰り肴に戎大黒

つまりての夜市

つみやれ

積戀雪關扉

露の二葉

露は尾花

釣女

釣狐

弦賣

鶴龜

同

鶴龜

近下

五〇六

俳

四七三

西上

九四三

音

義太

音

義太

西下

三〇〇

俳

三九八

西下

三〇六

音

三六六

西下

三三七

怪

六一

西上

五一

西下

一五七

音

六五五

音

歌澤

音

九三七

音

常磐

音

三六九

音

河東

音

二七

音

歌澤

音

九四三

鶴見橋

徒然

つれないと

つれにこまらする酒癖

連吹の笛竹息の哀や

聾井戸に立聞の相場狀

聾棧敷の見物

聾も爰は聞所

ての部

題

目

書名種類頁

亭主の入替り

貞女の道を守り刀切先のより出世娘

出入の数をつまぐつた珠數三味の男作

貞柳翁狂歌全集類題(解説)

貞柳翁狂歌全集類題

同

同

同

同

同

同

同

西下

四三八

謠

三三三

音

九三六

滑

七〇五

西上

五五七

浮

六〇七

滑

四九一

西下

三六

西下

六四

浮

八四五

淨下

一四

狂

一七

同

三六

同

三七

同

三八

同

三九

同

四〇

同

四一

同

四二

同

四三

貞柳翁狂歌全集類題同

下

同 附録

定家

定家一字題

貞徳狂歌百首解説

貞徳狂歌百首

名レ亭説

同

剃髮辨

剃髮文

出世語

手形は消えて正直か立

敵無の花軍

手習子

手代が戀を漏出した浮牡丹の箱入娘

方便の揚話

小二變じて主管となる

寺岡平右衛門所佩刀劍

照を取畫舟の中

寺町孫兵衛内の場

照手の姫道行

照文二書を捧て東藩に還る

照文歸東して房總福多し

同

同

謠

謠

狂

同

同

俳

俳

俳

西下

西上

音

浮下

浮

滑

滑

西上

歌舞

淨上

八下

八下

四三

四〇

一七三

六三六

四

五

五五

五五

五五

四五〇

二五九

三八

二〇八

八七

二

一七

四〇三

六七三

九二〇

八七一

一四

二六六

手補はぬれの始

でんがく

天機を談じて老默舊洞を惜む

天狗塔中に棲

天狗は家な風車

天狗にとられ後に歸りて物かたり

天鼓

天資神祐石門窄戸を劈く

傳戸讓去

天神川の涼

殿上之うはなり討

殿中松廊下の場

傳援の雲龍

傳援の能太夫

天女の廟に夫妻一子を祈る

天神

天人羽衣

天綱島時雨の炬燵

天皇徒歩路の御幸

天満宮の場

天満宮菜種御供(解説)

天満宮菜種御供一つ目

歌舞

俳

八中

怪

西下

怪

俳

謠

八中

怪

讀

近上

歌舞

音

西下

八上

音

音

近下

歌舞

歌舞

同

七一

三八六

二八三

二四五

一一一

三五三

三二

四六九

六六六

二五一

八二七

一

九七〇

三五七

三七六

一九八

八六五

七五八

七九

三六

五六八

五七

唐橋

遠親邪説に惑て館山城を關す

遠千鳥序

道中雙六

道中膝栗毛

藤内だんうり出端

豆腐賣

豆腐辯

東北

東方朔

東甫東湖雨筆の萬歳の書替

遠山の夕霞

東遊日次記

唐來參和戲作の序

桃李序

道理と理屈との二種ある事

融

當流のものすき

當流の男を見しらぬ

燈籠の段

戶外を成りて一大脚者を拉ぐ

研

土器賣替

論

八中

俳

近上

音 新内

近上解

俳

俳

論

論

俳

讀

和上

狂

俳

芭

論

西下

西上

近下

八上

俳

俳

四二

四四

七三

四七九

七〇六

一五

三三三

三二〇

一四八

三六

四八七

七三三

五〇三

八〇一

六六六

五三四

六〇〇

七六七

八五

七三

四八

三三五

六八〇

妬忌を逞して墓六蜈蚣をやしたふ

常田合戦甲州軍兵幽霊

伽婢子(解説)

伽婢子

時致(五郎)

常磐御前道行

常磐島

常磐の聲

常磐の庭

常磐屋の句合(解説)

常磐屋の句合

木賊

木賊菊

得失地を易て勇士厄に遇ふ

得失響輪品

毒酒を請太刀の身

とくくの句合(解説)

とくくの句合

毒婦を巧て縁連白井に還る

徳兵衛おはつ道行

毒藥は箱入の命

觸髅化城喻品

床の責道具

八上

怪

怪

同

音

近上

西下

音

音

芭

同

論

音

八中

讀

西上

俳

同

八中

近上

西上

讀

西上

二〇八

三三五

六〇

一

八九七

九八

三八五

二六一

九〇七

三九〇

四二一

三六七

八三三

二四五

三六五

一〇九一

五

八五

五三

二〇三

九九九

五三

一〇二八

所は近江蚊屋女才覺

徳和歌後萬載集(解説)

徳和歌後萬載集

同 春歌

同 夏歌

同 秋歌

同 冬歌

同 離別歌

同 羈旅歌

同 哀傷歌

同 賀歌

同 戀歌

同 雜歌

同 雜體

同 釋教歌

同 神祇歌

同 ところてん賣

土佐の國狗神付金簫

土佐の麻衣報條

戸澤山

年朝嘉例壽

年の内の餅ばなは詠め

年わすれの糸鬢

十津川の仙境

西下 解

狂 三

同 六五三

同 六五五

同 六七一

同 六七四

同 六八〇

同 六八三

同 六八四

同 六八五

同 六八七

同 六八九

同 六九六

同 七〇七

同 七〇九

同 七二〇

同 七二二

怪 八二八

狂 八二八

西下 四〇七

音 四〇五

西下 四〇六

怪 二三八

殿の詮意を卷込んだおやま論の拜領物

鳥羽繪

鳥羽繪

鳥羽繪

飛加藤

十府の里

妬婦水神となる

富々岡八幡の場

富仁親王嵯峨錦(解題)

富仁親王嵯峨錦

富田の里

知章

知達に心を碎いた石割雪踏の合印

朝長

朝の兄弟

靱晴宗夫婦再生の縁をたすふ事

供奴

巴

富山の洞に畜生菩提心を發す

富山の窟に念成遺題の歌を見る

豊俊時を得て思敵を請ふ

豊の前

豊原兼秋音を聴きて國の盛衰を知る話

淨下

音 清元

音 長唄

俳 四一〇

怪 一三四

西下 三九八

怪 一九三

歌舞 九四〇

淨上 解

同 二六

西下 八九

諸 四九八

淨下 二九

諸 四一

西上 一三一

怪 四七五

音 八七七

諸 八六九

八上 二三五

八下 一六〇

八下 七六八

音 三六三

怪 五三三

虎を免れて狼に攫はる
虎少將道行 三段目

同

虎少將道行

虎少將十番斬

鳥居清重

同

鳥居清經

同

鳥居清長

同

鳥居清佐

同

鳥居清滿

同

馬追舟

居龍之枝

解説

居龍之枝

鳥影に

鳥越輪

取付世帯は表向を張てゐる太鼓形氣

鷄の聲

鳥の名も

八上 梗概 五三

近上

同

同

近上

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鳥邊山
取やりなしに天下徳政
頼智之掙從者妙に利く
とんび奴(御歳玉海老手遊)

な の 部

題

目

内儀の利養は替た姿

内侍狂女の段

内證はしらぬが佛有難い出家形氣

内府

長生見度記(解説)

長生見度記

中市場

長柄川

長柄堤の場

長崎

長崎

長崎の餅柱

長背眞幸が肥の道のしり熊本の城に

歸るを送る序

仲藏狂亂

中田

音 蘭八 七三八

西下

八下

音

長唄

八五

西上

近下

浮

諸

黄

同

西下

西下

歌舞

西下

風

西下

和上

音

長唄

西下

江子城

西下

四七四

七車(解説)

俳

—

七車

同 卷の一 春部

同 卷の二 夏部

同 卷の三 秋部

同 卷の四 冬部

同 卷の五 序跋類

同 小町容彩四季

七つ森

七墓参りに逢は昔の

七不思議後序

名にしおふ

何ともしれぬ京の杉二重

何にても知恵の振賣

何がしのるん

難波

難波何がしが家にて紅梅をめづる辭

難波の哥翁

難波の門出

難波の新艸水上の新談義

難波の太夫即身根引の成佛

難波武部源藏内の場

浪華の富人孤の兒を得る

名は聞え長ぬ人の良

俳

同

同

同

同

同

同

音

西下

西上

俳

音

西下

西下

浮

諸

和上

西上

浮

浮

浮

歌舞

怪

西下

四九

五

五

六

六

六

六

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

五七

歸ころする袖の雪

鍋賣

鍋蓋額装

浪風靜に神通丸

泪のたれは紙見せ

波枕月濤妻

南彌六靈を顯して子を祐く

奈良國替

なら坂の倭人

奈良の庭龜

奈良八景

奈良法師

成秀が庭上の松をほむる詞

業平

業平歌念佛道行

業平小町

鳴澤

成ほとかるい縁組

南柯の接木

南行紀

死難先兆

何の姿序

南都賦

西上

俳

俳

西下

西上

音

八下

讀

西下

諸

芭

音

近下

西下

西下

讀

俳

怪

俳

俳

俳

俳

俳

八〇五

三三七

四二六

九二

八三九

八五八

六二二

四〇八

五六

六三

六四五

三五九

二六六

八三九

三九六

八八〇

四九

四七

七〇三

二七三

二二八

七〇

三三二

三

如是菴挽詞

薙髮山

俄鹿島踊

俄獅子

俄大工は都の費

鷄龍田

忍を破りて犬田與二山林一戰ふ

人間萬事吹矢的(解説)

人間萬事吹矢的

人意吹矢的

人間萬事虛誕計(解説)

人間萬事虛誕計前編

人情本解説その一 後編

同 その二

人參辨

ぬの部

題

目

書名種類 頁

縫物し

鶴

糠塚

糖助病て其子と思ふ

俳 謠 西下 八上
五六 四〇四 二三

俳 西下 四〇六
音 長唄 八四八
音 長唄 八四四
西下 三四
謠 七九
八上 四七
黄 六
同 六七一
同 七〇三
滑 五
同 解 五九
同 六三
人 解 一
同 八九
俳 三二

ねの部

題

目

書名種類 頁

主なき園の花

主なき馬に送り狀

盗人の従者倫走りて盜に戮さる

ぬは玉の

沼津

塗師

ぬれ扇

濡問屋視

軍木媒して莊官に説く

願絲綠苧環
ねかひの搔餅
ねぎ
祭レ猫文
寐言を云ふ癖
猫自畫賛
猫の妻
寢覺
寢覺の榮好
根白
彌津小町

讀 六四六
浮 九六
八中 四〇三
音 歌澤 八四一
西下 四五五
俳 三五
音 河東 二五
西上 六五七
八上 二八八

のの部

題

目

書名種類頁

鼠の文づかし
鼠の妖怪
鼠賦
寐物語後序
念がとゞいて
念玉戯に笛を借る
拈華庵に手束客を留む
念珠挽
念佛賣てかねの聲
念佛宗

能樂の大成者
能樂の流儀
能樂の組織
能辯軍記を講じて餅を薦む
能本作者註文
軒瑞松
のこりの菊をめづる記
残る物とて金の鍋
後にぞしるゝ戀の闇打
後の月酒宴烏臺

西下 五七九
怪 三七一
俳 二四〇
俳 五三二
音 歌澤 九四三
八上 四二四
八上 一八八
俳 四七九
西下 三三三
俳 三五九

諸 解 六
諸 一五
諸 三六
八下 一四一
諸 附糸 七七七
音 長唄 九〇三
和上 三七四
西上 三三六
西下 七六
音 常磐 四三五

後の月酒宴烏臺(角兵衛獅子)
後は様つけて呼
野机の煙くらべ
連路
野邊の書置
野宮
信隆機變族の兵を借る
信隆舊城に還任して罪過を免る
のぼり下りの
蚤の籠ぬけ
野守
のり合の女舞
乗合船
乗合船恵方萬歳
乗掛情の夏木立(興作)
憲重憲儀聚兵使を同くす
法花四季花
法花姿色同
乗物の中に香を留る梅は武士
轎に坐して守如主を救ふ
轎を飛して使女溪澗を渉
野分の方季春櫻姫を誑す
野分の方嫉妬玉琴を害す

音 長唄 八七一
西上 七六
西上 二一九
西下 三八九
音 富本 五三六
諸 一四三
八下 三九七
八下 七四八
音 歌澤 九四三
西上 三五九
諸 五三三
浮 一一〇
音 常磐 四四一
音 常磐 四四一
音 長唄 七五三
八下 三二一
音 長唄 八二七
音 清元 五九四
滑 一三一
八中 三五七
八上 一八〇
讀 四六
讀 二三

はの部

題

目

書名種類頁

梅花屏風

俳諧歌并婦

俳諧職人盡(解説)

俳諧職人盡前集

附録

同

同

同

同

同

同

同

同

俳諧大意

俳諧童子教序

俳諧頌

俳諧發願文

俳諧武玉川(解説)

俳諧武玉川自初編至十八編

俳諧悔(解説)

怪

俳

俳

同

同

同

同

同

同

同

同

同

芭

俳

俳

俳

川

同

俳

俳

六六

五四〇

二〇

三三

三三

三六

三六

三六

三六

三五

三五

三五

三五

七〇

三三

三三

二九

五

一三七

八

俳諧悔 春夏

同 秋冬

稗史本傳を大成す二十八年

俳書編纂をお引受けするまで

俳書の整理に就て

俳席の掟

俳席掟

俳題正名序

癡毀院に義任船虫を送る

馬頭娘

俳風柳樽(解説)

俳風柳樽 自初編至三十一編

同 拾遺 自初編至十編

羽織かくして

博多小女郎浪枕(解題)

博多小女郎浪枕上之卷

同 下之卷

博多物狂

馬鹿長命子氣物語(解説)

馬鹿長命子氣物語

秤は情の掛そこなひ

祭芳宜閑大人墓文

和上

同

同

八下

俳

俳

俳

俳

俳

八中

怪

川

同

同

同

音

近下

同

同

同

諸

黄

同

浮

和上

八九一

九一六

七九四

一

二

四七

四八

六八

一七五

二九

一

二九一

七三六

七九一

八五三

九三三

五

三二

三三

三三

六六

四八

三七

萩桔梗

馬琴の日記

萩の百よせの序

萩本夫婦奇縁を結ぶ話

萩をめぐる記

はく打

白銀百枚歳暮の御祝義

白骨の妖怪

伯州蕃士分限帳

白刃の下に鸞鳳良縁を結ぶ

白水翁が賣卜直言奇を示す話

白藏主賛

白頭の情人合盃の途々

白樂天

白龍雲を挟みて南に歸く

羽黒山

化地藏

箱崎

箱崎

箱根瀧の段

箱根の富士笠

箱根靈驗壁仇討

羽衣

音 歌澤

八下 讀餘

俳 七三

怪 七三〇

和上 三六六

俳 三四〇

浮 五七〇

怪 二六

滑 六五九

八上 一九八

怪 五二五

俳 四九七

八上 五七九

謠 三五

八上 一九

西下 四二

西下 四六

謠 六五一

西下 五五五

音 義太 一五三

音 義太 九六

音 義太 一五三

西下 一九六

葉櫻や

夾剪を揃て犬田進退を決む

棧敷はり

棧敷はり二人のかけ合

半部

橋下の歌船

橋辨慶

橋辨慶

はじめて女郎の懷

巴雀木兒三吟十二表長歌行の奥書

橋本の辻駕籠に相與の駈落

蓮見の辭

贈巴水一辭

巴西侯

芭蕉

芭蕉が辻

芭蕉紀行集

芭蕉句選(解説)

芭蕉句選

上 春之部

同 夏之部

同 秋之部

同 冬之部

音 歌澤

八上

滑 五一

滑 四八一

謠 四八二

讀 一六四

謠 六五五

音 長唄 四八〇

浮 八三九

俳 八八

俳 五〇一

淨下 二七九

俳 三七

俳 五二四

怪 四三

謠 一五七

西下 四〇二

芭 二六九

芭 一五

同 一九

同 二七

同 三二

同 三七

文作れるに山里の月といふ題にて
八月十五夜芳宜園にてくもる夜の月
を見る記

八月十五夜蘆中の月をめづる言葉

八疊敷の蓮の葉

八陣守護城

鉢扣辭

鉢叩

八人の狸々講

鉢木

鉢の木

八幡大名 附りいもせのなみだ川

弔ニ初秋七日兩星一

初秋や

初卯がへりに

初午は乗てくる仕合

初霞淺間嶽

初雁を聞く辭

初鴈をきく記

戲ニ八龜一

悼ニ八龜一辭

初懷紙評註(解説)

初懷紙詳註

和上

二〇〇

八犬傳解題的梗概

八下 梗序 一

和上

三七〇

八犬傳物語

八上 梗概 一

狂

八〇七

八犬傳と私

八下 談餘 二

西上

美〇〇

八犬傳及失明後終結

八下 談餘 六

音

義太

八犬傳の人物詠題

八下 談餘 三〇

俳

三五

八犬傳の歴史地理

八下 談餘 一六

西上

三五

八犬傳總括評

八下 談餘 一三

音

一〇

八犬傳年表 (一)

八上 年表 一〇九

謠

一〇

八犬傳年表 (二)

八中 年表 一二

音

一〇

八犬傳人物一覽 (三)

八下 年表 一〇二

芭

一〇

八犬傳人物一覽 (二)

八上 人物 一二三

歌

一〇

八犬傳人物一覽 (一)

八中 人物 一二七

音

九三

八犬傳人物一覽 (三)

八下 人物 一〇三

音

九三

八犬傳人物一覽 (三)

八上 人物 一〇三

西下

八七

八犬傳人物一覽 (三)

八上 人物 一〇三

音

九三

八犬傳人物一覽 (三)

八上 人物 一〇三

和上

一六

八犬傳人物一覽 (三)

八中 人物 一〇三

和上

一六

八犬傳人物一覽 (三)

八下 人物 一〇三

俳

四九

八犬傳人物一覽 (三)

八下 人物 一〇三

俳

四九

八犬傳人物一覽 (三)

八下 人物 一〇三

同

四九

八犬傳人物一覽 (三)

八下 人物 一〇三

初時雨
 八笑人(解説)
 八笑人
 初瀬小路妾宅の場
 初瀬六代
 初茸狩は戀草の種
 八町の目
 初子日
 初花たるなみかだち
 初春厄拂ひ
 八百尼山居に敗將・誘引ふ
 八百丘尼人魚を放生して壽々益々話
 八百八人毛野大敵を鑒にす
 發明は瓢箪より出る
 初木綿
 初櫓囃高島
 初雪
 艶容女舞衣
 波底に汲みて海龍王仁を刺んとす
 花を惜む詞
 花ををしむ記
 花ををしむ記をすが子にかはりて
 花を繕ふ柏木の衣紋

音	滑	滑	歌	謠	西上	西下	音	讀	近上	八中	怪	八下	西下	近上	音	謠	音	八下	和上	和上	浮
長唄	解		舞				清元	長唄								義太					
八八八	六三	七九	八七五	六三七	一〇四五	四二	八八	八八	八八	三三	七六一	六〇四	五〇六	六〇一	三〇四	四九	八三	二〇六	三六四	三六五	二二〇

花軍	花笠踊	花筐	花かみ	花川戸身替の段	花兄弟十二日所作	花車	花車岩井扇	花翫唇色所八景	鼻毛のぼす御亭主馬鹿	花咲綱五郎	花崎實のる玉の興	花園平三	花ちるころ	花錦嫩丹前	華に啼く	花に葉錦廊	花にも負けぬ三五の月	花の色替て江戸紫	花の雲助合扇	花の曇か	花の下紐ながと短と	花箴
----	-----	----	-----	---------	----------	----	-------	---------	------------	-------	----------	------	-------	-------	------	-------	------------	----------	--------	------	-----------	----

謠	音	謠	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	西上	音	音	浮	浮	俳
長唄																						
三七五	七六	二八七	二五〇	五二九	八四四	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八

花上野譽の石碑
 花は散ど名は九重に残る女
 英草紙(解説)
 英草紙
 英獅子の亂曲
 英執着獅子
 花舞臺霞猿曳
 花水橋
 離小島
 花牧
 羽生田貴良がもとへ
 埴生村の段
 はにふの寢道具
 馬入
 羽突禿
 母育雪間鶯
 母に不孝の子狗となる
 憚關
 馬場求馬妻を沈めて樋口を架と成る話
 蛤賣
 濱路死地に落つ
 濱路竊に親族を悼む
 濱路姫病牀に冤鬼に饜はる

音	浮	怪	同	音	音	音	音	西下	西下	西上	音	音	西下	音	怪	西下	西下	俳	八上	八上	八中
義太		解		長唄	長唄	常磐				義太		長唄		富本				梗概			
一三三	二三四	七六	四三三	七五三	七六三	四三三	四三六	三六五	三六一	四〇七	一五九	三三	四四五	八二〇	五八八	三八	四〇五	四〇五	四七	二七三	五三〇

早變胸機關(解説)
 早變胸機關
 はや姫道行
 時花笠の被物
 腹を裂て伏姫八犬子を走らす
 腹を劈て鎌衣響を仆す
 腹自慢する大食馬鹿
 原
 腹からの友退刺
 原町
 馬蘭亭舊友尺牘帳後序
 針すり
 春風に
 春風に
 春駒の封面
 春雨ふる友達のもとよりなこと引き
 て遊ばむまでこよといひおこせた
 るにさはる事のありければ
 春近
 春の遊びの記
 春の色
 春の調
 春の初の松葉山

滑	同	近上	西下	八上	八中	滑	西下	西下	西下	狂	俳	音	音	音	和上	狂	音	音	西下
解												歌澤	歌澤				長唄	長唄	
四〇	三九三	七三	八三八	二七	四三	七四一	四五六	二七六	四〇一	八〇五	三七九	九四〇	九四三	八二五	四〇〇	七五三	八二二	九〇三	九三三

春調娘七種	音	長唄	七九〇	反魂香	諸	六四〇
春の日(解説)	芭		五七	同	同	七二六
春の日	同		五三	幡州の浦浪皆歸り打	西下	一二六
春野邊櫻袂	音	長唄	八六	反魂術を異にして美人彌奇なり	八中	四三
春の山ぶみといふを題にて	和上		二〇七	はんざう	俳	三三
春の山ぶみ	和上		三六三	番作と墓六	八上	三三七
春の夜障子櫻	音	富本	五四	番作遠謀孤兒を托す	八上	二二七
春は昔由縁英	音	長唄	八〇九	幡州曾根の濱邊の場	歌舞	五二
春も長閑に	音	歌澤	九三六	同 海上の場	歌舞	五三七
濱名橋	西下		四八四	班女	諸	二五九
濱松	西下		四八二	半田稻荷	音	八四七
濱松風	音	長唄	八三〇	坂東河原に現八勇を顯す	八上	二五四
濱松風戀歌	音	長唄	八三〇	萬里一水道商小仇を射る	八下	六〇四
番外謡曲五十一番	諸		六四九	ひの部		
悼反喬舎文	俳		五三			
半化坊句集(解説)	俳	解	四六			
半化坊句集上	同		八七一			
同 夏	同		八七八			
同 秋	同		八八三	ひいきのかけ合	滑	四六二
同 下	同		八八七	蟲屋定連	滑	四五九
同 冬	同		八八七	飛雲	諸	五七四
同 雜	同		八八九	檜垣	諸	二四八
反間の衛妙椿大江を遠ざく	八中		五四一	暮の夏の花の上	讀	八三三
伴蒿蹊におくる書	和上		四〇三	同 下	同	八二六
				東銘	俳	二六五

東山の銀閣に老和尚驕君を醒す

東山八景

同

火神鳴の雲がくれ

飛花落葉序

飛花落葉(解説)

飛花落葉

光堂

彼岸夢の女不思議

ひきめくり

飛行を樂む仙人親父

ひきれ賣

慕六僞りて神宮に漁す

引手になびく狸祖母

ひくに

比丘尼に無用の長刀

引馬野

ひけ過ぎや

彦山

膝栗毛

膝栗毛東海道中

秘策を詳にして忠款奸佞を鋤く

飄長者傳

八下

讀

同

西上

狂

狂解

同

西下

西上

俳

浮

俳

八上

西下

俳

西上

西下

音歌澤

西下

膝上解

同

八中

俳

二七五

一五二

一五七

六九

八〇〇

元

七五五

三九三

二四六

三九

八七八

三七三

二六八

七五五

三九三

九三八

四七三

九四三

五一

一

一四三八

三〇一

四〇一

飄ノ辭

ひさご(解説)

ひさご

飄歌并序

飄之銘

びさもんでん

菱川師宣

同

美女に招小木

美人變じて髑髏となる

備前の水汲

美扇の戀風

ひたゝれ賣

常陸帶

常陸帶花櫛

飛彈匠物語(解説)

飛彈匠物語

七犬兵を煉り夢想三使を遣る

畢栗道心

莠句冊(解説)

莠句冊

ひと色たらぬ一卷

非道に人々殺す報

俳

芭

同

俳

芭

讀

風

同

西下

滑

西上

西上

俳

諸

音

讀

同

八下

西上

怪

同

西下

怪

三三

五九

六七

九五五

二六四

一〇一

一

九七

九八三

四〇一

四八〇

六五四

三九〇

七六五

二八〇

七四

九一五

二九四

四六一

七六一

一〇〇

三三

百花譜
 百鬼夜狂集序
 百魚譜
 百丸追悼
 百丸妻の身まかりしを聞ておくる悼の詞
 百三十里の所を拾刃の無心
 百性形氣
 百人女郎品定
 百の錢よみ兼る歌好の娘
 百中賣ト兩將を倡ふ
 百蟲譜
 百鳥譜
 百度の願事
 百人一首八八十の手習
 百物語に恨が出る
 百六歳なる大工勘助がけづたる箸を
 入の饋ければ
 百萬
 百話亭辭
 病客華を辭して齡を延ぶ
 彌筆餘
 兵法の奥は宮城野
 屏風の繪の人形躍歌

怪	西下	音	八上	俳	論	俳	西上	浮	俳	讀	俳	俳	八下	浮	風	浮	西下	俳	狂	俳
一七二	二二〇	八七一	四四六	四四四	二六四	四八一	一八七	六六六	六六七	二四六	四四四	三三三	七七二	七七二	六五三	九三〇	七七	四一	八〇三	二五〇

貧福論	同	同	同	同	同	枇杷園句集(解説)	枇杷園句集乾	びわ法師	日和田	琵琶亭記	廣瀬川	廣き江戸に方覺男	ひろをか	晝のつり狐	晝時の光景	午後光景	ひらかな盛衰記(解題)	ひらかな盛衰記	平田村	平和泉	ひよつくりの座頭	日吉丸稚櫻	兵法を樂しむ陽氣親父
	同	同	同	同	同	春	夏	坤秋	冬														

怪	同	同	同	同	同	俳	俳	西下	俳	西下	西下	讀	西上	滑	滑	同	淨上	西下	西下	音	音	浮
						解											解			義太	義太	八九一
六六六	九五三	九四七	九四四	九四一	九三九	五二	三三三	四二三	二七〇	四〇一	九六三	九五五	六六	二四二	二四四	六三三	七六	五二〇	三九二	八六五	一六二	

深川集

深川之段

深草の翁相子の衛蛇妖を知る事

豊干

吹上演

贈不及法師文

舞ぎよくの遊興

ぶ器量に身をはたく抹香屋の娘

福島

福人になる世忤が身の上知ぬ占形氣

福原

福来すゝめ(解説)

福来すゝめ

袋井

袋賛

武家義理物語(解説)

武家義理物語

弔三不幸文

不孝の子の雷にうたる

房八の最期

藤枝

藤桂戀の櫓

富士川

芭歌舞

六九七

蘇川

伏木曾我

富士垢離

怪

謠

西下

六八二

怪

西上

二八四

三三二

四六八

五八

五八

四〇九

三〇六

五九一

四四〇

五二五

二二五

二〇四

六六九

五八

六四四

九三三

七二

七三九

五五一

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

六九五

船番所
 舟人馬かた燈屋の庭
 船辨慶
 船虫奸計禮度に説く
 船虫謀て縲綬を脱る
 船の高尾
 父母安樂行品
 文月本の夜の光物
 尺素を遺して因果みづから訟
 文反古序
 山脚村に音手舊犬を拒む
 冬田の晩稻
 冬の日（解説）
 冬の日
 武陽官邸記
 故事を辨して禮儀薄命を告ぐ
 古朽木（解説）
 古朽木
 ふるき都を立出て雨
 古田孫兵衛が事
 古帳よりは十八人口
 布留の中道 上（ちりひち）
 同 中（あしかび）

西下 四九五
 西下 一五
 謠 五八
 八中 一五
 八中 六
 音 五七
 讀 四四
 怪 九五
 八上 一七
 西下 九二
 八上 四二
 讀 二五
 芭 五九
 同 四二
 伴 七〇
 八上 一三
 滑 五五
 同 七六
 西上 四〇
 浮 七三
 西下 一五
 和下 一七

布留の中道 下 或問
 布留乃能
 古山姥
 文七清川
 文者
 文臺記
 聞中上人の都にのほ行くを送る歌の本
 文武二道萬石通（解説）
 文武二道萬石通
 贈二分平菴文
 文屋康秀
 分里數女
 平安二十歌仙序
 閉關說
 閉關之說
 平家女護島 解題
 平家女護島
 平次住家の段
 餅酒論
 餅書教に因て祕密を告ぐ

へ の 部

目

和 下 一六九
 謠 五五
 音 常磐 三七八
 音 長唄 八〇一
 俳 三五七
 俳 七四
 和上 三八六
 黃 解 三五
 同 二三
 俳 四五五
 音 清元 六四
 西上 五八
 俳 六四
 俳 一五
 芭 八三
 近下 解 五七
 同 三六
 音 義太 三
 狂 七六
 八下 一五

書名種類 頁

兵燹山を焼て五彦を走らす	平太郎住家の段	平太郎殿	平兵衛小かん夜の朝顔	糸瓜辭	別座鋪(解説)	別座鋪	べにとき	蛇癭の中より出	尻ひりの翁	蛇山庵室の場	片袖禍を移して賢女獨知る	返店文	ほの部		題	目	書名種類	頁	八上	音義太	西下	近上	芭	同	俳	怪	怪	怪	歌舞	八中	俳	六〇五	一七三	六〇〇	六二八	四四四	四四四	三七	三五六	二五〇	九三一	八三六	二四四	二九六	反古尋て思ひの中宿	亡魂を八幡に鎮祭る	奉公人請人の嘘	奉公人請人のまこと	法師の腹切	方十園記	望鱸亭記	放生川	北條團水が許より愚者といふ題をこして發句乞ひけるほどに	北條五郎出家	北條	法藏寺	寶藏寺	烹茶樵書序	望帝	庖丁師	訪剃髮辭	傍輩の惡性うつりにけりな徒娘	褒美變じて批謗となる	鳳來寺	蓬萊の山	法樂舞	西上	怪	滑	滑	浮	俳	俳	諸	俳	怪	諸	西下	西下	和上	怪	俳	俳	滑	滑	西下	讀	音	二八三	三五九	六二七	六二七	一六六	四七六	五〇八	三一	七六	二九	六八七	四八九	五〇三	三六	三八五	三九〇	四三	八三三	四二〇	四八七	九〇〇	七七七	ホ

芳流閣上に信乃血戦す
 芳流閣上龍虎の争ひ
 炮爆賛
 法論味増寶
 法會舞
 穗北の驟雨に禮義行裏を喪ふ
 北州
 北州千歳壽
 牧童傳
 北母自賞罰を恣にす
 ト養狂歌集(解説)
 ト養狂歌集
 木履説
 癡子はむかしの面影
 星川
 ほたる火
 螢も夜は勤めの尻
 牡丹灯籠
 牡丹燈記
 保津川のながれ山崎の長者
 法華宗
 發句塚序
 布袋

音俳	俳	西下	怪	怪	西上	浮	西下	西下	俳	同	狂	八中	俳	音	音	八中	謠	俳	俳	八上
長唄			解								解			清元	清元				梗概	
七七	四六	三五	三	六〇	八三	八	四九	四〇	三〇	二二	一四	三〇	五七〇	五七〇	二二〇	五	三七三	四四	六六	

布袋庵風客句集序
 佛の兄序
 佛の爲常灯遊女の爲の髪油
 佛原
 佛の箔を削る頓欲の鉤
 佛面變じて鬼面となる
 佛の夢は五十日
 時鳥れぐら
 郭公の巻の跋
 時鳥露間の雲色
 骨寄せ岩藤
 郭公文臺記
 堀河波鼓(解題)
 堀河波鼓
 堀どもつきぬ佛石
 暮露
 母衣
 本海道虎石(解題)
 本海道虎石
 本海道から組
 本郷天満宮奉納句合(西三月廿二日)
 盆石記
 本藏下屋敷の段

音俳	川	浮	同	浄上	謠	俳	西下	同	近上	俳	音	音	俳	音	西下	滑	浮	謠	西下	俳	俳
義太				解					解		長唄	清元	歌澤								
三六	四九	一〇六	一七	五	六四	三四	二三八	三四五	七七	四九六	八八六	六三三	七三	九四三	三二〇	四一〇	五八四	一五三	九三	七〇	

本大臣成佛金銀の花の臺
 奔馬北るを遂て大江暴瀟禽を籠にす
 本朝櫻陰比事 解説
 本朝櫻陰比事
 本朝醉菩提全傳 解説
 本朝醉菩提全傳
 本朝廿四孝(解題)
 本朝廿四孝
 ほんにおもへば
 木に其人の面影
 煩悩の垢かき

まの部

題

目

書名 種類 頁

舞扇
 舞扇蘭生梅
 舞車(美本揃)
 舞車(妻戸)
 まひたけ
 舞人
 舞姫且閑野
 とり連理橋
 送三眞顔旅行詞

浮	八下	七四九
西下	解	五四五
同	解	八二
讀	解	二六三
同	解	四一
淨下	解	二九五
同	歌澤	五一
音	歌澤	四三
西上		九三三
西上		七五五
西上		一四

音	長唄	八三九
音	長唄	八三九
諸		八三八
諸		八三八
讀		八三八
俳		三三三
八中	梗概	六三
音	富本	五四
狂		八〇四

籬島	まかしよ	三九七
眞葛が朝風		八五九
馬加大記の舊惡		六一五
馬加竊に船虫を奪ふ		五三
枕賣		六三
枕慈童		三三
枕慈童		四六
枕慈童		九三〇
枕自鳴鏡		六五四
枕にうつろちゝの惡性		一三九
枕に残す筆の先		七三〇
枕に残る藥違ひ		二〇七
枕拍子之唄下		六七六
枕に残るおけほの縁		九五五
負て腹立つ下戸象棋馬鹿		七三〇
まことのあやは後にしるゝ		八六八
將門		四三九
政本肇て政本を詳にす		六三
政清本城の段		一六六
正行		四二〇
政元權を弄びて正副使を分つ		一三七
眞夢		六七
鱒血染抱柏		六六

西下	長唄	三九七
音	長唄	八五九
讀		六一五
八中	梗概	五三
八上		六三
俳		三三
諸		四六
音	長唄	九三〇
滑		六五四
浮		一三九
西上		七三〇
西上		二〇七
滑		六七六
西上		九五五
滑		七三〇
西下	常磐	八六八
音	常磐	四三九
八中		六三
音	義太	一六六
諸		四二〇
八下		一三七
音	新内	六七
音	新内	六六

禮儀義家祿を捨つ

禮儀時を失ふて時に爲す有り

増田

復新三組達

馬大記藤して道に龍山を窮せしむ

閨藍姿八景

又助住家の段

再々暮雨の鉢木

待筆しは三年目の命

町藝者のうそ

町藝者のまこと

待人

町屋川

松井町酒屋の場

松尾

松襲

松風

松風

松風ばかりや残るらん脇差

末期の道行

同

松島

松島賦

八中

八下

西下

音

八上

音

音

音

西上

滑

滑

音

西下

歌舞

諸

音

諸

西下

近上

同

西下

俳

六〇

六三

四〇三

六〇〇

六三

八四九

一〇八

四八

八八

六五

五八八

四七

一〇七九

二三

一三

三四三

二九

五三

二七

三四〇

四〇七

三九四

二三四

末社らく遊び
待乳しづんで

待乳山

松盡し

松前

松虫

松村兵庫古井の妖鏡を得たる事

松山天狗

松の内

松の歌

松の風

松のみどり

松色操高砂

待夜のすご六

松浦

松浦湯

松浦物狂

同

松山鏡

松は唐崎

松は常磐色あげぬ裕羽織

待てば算用もあいよる中

眞野の萱原

西上

音

西下

替

西下

怪

諸

音

俳

音

音

浮

諸

西下

諸

同

音

浮

西下

西下

西下

西下

一一四

九三二

四二六

三二〇

三八六

三四五

九〇三

五四五

二五五

四七八

七八

九二四

四二五

九二

七一九

五五九

六二四

七二七

五二〇

九四四

六二二

三三四

四〇七

身替長枕
 三熊野かげるふ姿
 見功者
 三島
 短夜に
 みすあみ
 見せぬ所は女大工
 寄未足齋歌
 彌蛇二郎綱して佛像を得る
 三田八幡
 亂髮夜の編笠
 三千歳
 道野邊清水
 通盛
 道行
 道行羽合炬燵
 同
 道行妹背の走書
 道行妹背の組糸
 道行浮埒島
 道行縁花房
 道行越後獅子
 道行念玉蔓

西上 六三一
 近上 四六六
 滑 四七三
 西下 四七三
 音 歌澤 九三四
 俳 三七五
 西上 三五
 俳 四七〇
 讀 九
 西下 四三五
 音 河東 二五九
 音 清元 六四八
 西下 四八
 論 一一四
 音 長唄 七六七
 音 蘭八 七三
 同 蘭八 七四
 淨下 二九
 淨下 七二
 音 清元 六〇二
 音 蘭八 七三七
 淨上 五四〇
 音 富本 五四三

道行君後紐
 道行詞の甘替
 道行故郷の順禮歌
 道行戀のおだまき
 道行戀の飛脚
 道行三度笠
 道行思案餘
 道行虱の妹背筋
 道行しのだの二人妻
 道行旅路の花簪
 道行旅路の嫁入り
 道行旅路の濡衣
 道行旅路の添乳歌
 道行千重の岩田帶
 道行街の手向草
 道行蝶吹雪
 道行對の花魚藏
 道行夏野のさらし井
 道行菜種の亂咲
 道行似合の女夫丸
 道行野邊書習
 道行花の追風

淨下 六四
 淨下 七三
 淨上 三六
 淨下 六六七
 音 富本 五〇九
 音 一中 三三五
 音 清元 五八〇
 狂 七六六
 淨上 四九〇
 音 清元 六二
 淨下 二二三
 音 清元 六一
 淨下 五三二
 淨上 四三七
 淨下 三九七
 淨上 六二七
 音 常磐 四六三
 淨上 五七八
 淨下 八七四
 淨下 二八七
 淨下 四五四
 音 富本 五二六
 淨下 三四三

道行初音の旅
 道行比翼の袖
 道行雙塗笠
 道行みなれぞな
 道行やつし比丘尼
 道行思ひの短夜
 道行闇路の町續
 水上蝶の羽香
 水浴は涙川
 湖水
 水かね掘
 自名づく話
 水口
 水筋のぬけ道
 水茶屋のうそ
 水茶屋のまこと
 瑞穂の國
 見立物は天狗の媒鳥
 見立て養子が利發
 見付
 蜜葬を詰て暴風妙眞を挑む
 美豆小鳥
 蜜の蜂になる

淨下 一六〇
 淨下 六〇五
 淨上 三三二
 近下 五〇八
 淨 一〇五
 近下 五七二
 淨下 五二
 音 河東 三三九
 西上 九四七
 西下 四五二
 俳 三四七
 俳 四五一
 西下 五〇七
 西上 三三六
 滑 三三三
 同 三三三
 浮 二二
 西下 一〇七
 西下 一七四
 西下 四七八
 八上 四六四
 西下 三九三
 怪 九五三

見て歸る地獄極樂
 見て氣遣は夢の契
 御堂の大鼓うつたり敵
 三山
 三刀屋武虎知勇を顯す話
 皆思謂の五百羅漢
 蛻川親當逢亡魂
 虛栗(解説)
 虛栗
 水無月祓
 水無瀬
 水無瀬宮
 六月人のもとより氷をおこせたるに
 源義教道行
 源頼光道行
 見ぬ人良に雲の無分別
 見ぬめの關
 見ぬ世の人にあいまして
 身の上の立聞
 身の惡を我口から白人となる浮氣娘
 身延
 蓑虫説
 蓑虫跋

西上 九七一
 西下 三四八
 西下 二三
 謠 二七一
 怪 七四一
 西上 六七五
 怪 三二六
 芭 五三三
 同 五五三
 謠 三〇〇
 謠 三三三
 西下 五一八
 和上 四〇一
 近上 二五〇
 近下 七九
 西上 一〇八
 浮 五三
 浮 七四
 西上 五三
 浮 八〇
 謠 一六二
 俳 二五六
 芭 二六四

身はひとつ
身は火にくばるとも

身ひとつを

身振好

同

三重霞嬉敷顔島

三重霞傀偏師

三保浦

二保仙境

三保松原

三保松富士晨朝

三棟明神

三圍明神之段

美面より

御裳濯

宮

宮城野

宮城野

都見物左衛門

都島

都島原扇屋の場

都島

都の良見せ芝居

音 歌澤 九三五

西上 九六

音 歌澤 九三一

滑 四八三

同 四八七

音 長唄 八三五

音 長唄 八三五

讀 八八〇

怪 二七九

西下 四六三

音 常磐 四九〇

西下 四三三

歌舞 六三八

音 長唄 八三一

讀 一八

西下 四九五

讀 六九

西下 三九

音 一中 三三四

西下 三九七

歌舞 二〇四五

音 長唄 九三

西下 六〇三

都のすがた人形

都のつれ夫婦

華洛の僑居

都のぼり

都も淋し朝腹の献立

都山科閑居の場

給事を薦て奈四郎四六城を撃つ

宮の長藏似せ荷を作る事

深山櫻及兼樹振

深山路の楠

宮島八景

妙國寺

妙眞哀て婦を返す

妙眞愁戀して軍役に入る

妙椿幻術親兵衛を遠ざく

御代榮益穂富種

御代のさかりは江戸櫻

御代松子日初戀

見れば正銘にあらず

三輪

むの部

題

目

西上 一三七

西上 四三七

讀 五九七

讀 九九三

西下 七二

歌舞 二〇五七

八中 八三

浮 四三

音 清元 五七九

讀 五五五

近上 五九〇

西下 四三六

八上 四一四

八下 三六三

八下 梗概 四四

音 富本 五六三

西上 九六六

音 長唄 七九

西下 二七〇

讀 二二

書名種類 頁

無益の事をあらそふ酒癖

夢應の鯉魚

昔話稻妻表紙(解説)

昔話稻妻表紙

昔自慢の虚

昔最良

むかしを今の序

昔たづねて小皿

昔は掛算今は當座銀

むかばき作り

前面岡に大刀自孝嗣を救ふ

向の岡

無我の旅僧心の通ひ舟

麦飯報條

むけん

夢幻の落葉

武庫山の女仙

謠武藏野

武藏野紀行

蟲撰の詞

虫賣

虫出しの神鳴もふんどしかきたる君さま

筵打

滑

怪

讀 解

讀

滑

滑

俳

西下

西下

俳

八中

西下

西上

狂

音 長唄

讀

怪

狂

俳

和上

音 富本

西上

俳

七三

六四六

二四

一四九

六二三

四九七

六八六

九六一

九五

三八九

五九一

四三六

四〇三

七六二

七四四

二二四

二九五

八二二

五三二

一九七

五四四

五四一

三四三

夢人記

娘盛の散櫻

娘の子ひいきんのかけ合

娘を樂む遊山親父

娘道成寺

無彈砂子(解説)

無彈砂子

六玉川賛

六玉川琴柱の雁(六玉川)

謝無馳走辭

睦月ばかり山里人のもとへ

六浦

むつとして

胸こそ踊れ此盆前

胸の火に伽羅の油解て來る心中娘

むねひやく太鼓食次

胸をすへし連判の座

宗清

無筆の禮帳

無分別は見越の木登

馬買う

梅

梅枝

俳 西上

滑

浮

音

滑

同

俳

音

俳

和上

謠

音

西上

浮

浮

西下

音

西下

俳

謠

謠

俳

謠

五三二

七三

四六五

八八七

七六〇

二三

一五九

七五

八七四

四一六

四〇〇

一八二

九三八

七四一

八二五

七四五

二二八

四二七

一〇二六

一〇五一

三三二

一五〇

三〇八

やの部

題

目

書名種類頁

近上

二四五

八重霞雙襷帶
八重九重花姿繪
八百屋お七江戸櫻
八百屋お七(解題)
八百屋お七
八尾甚三郎が妻殺されし事
八百坊記
族を認て忠與故を諱る
焼取にする鶉野の仕掛
燒畫記
薬師
薬師
役者きどり
役者きどり二人のかけ合
役者夏の富士
役所づくし
約束のそら鞘
約束は雪の朝食

音 長唄 八七一
音 長唄 八六六
浄上 三七
浄上 解 四三
同 二二
浮 三七九
俳 四七
八上 三三三
浮 三三九
和上 二五九
俳 三五六
西下 五〇〇
西下 五九
滑 四七八
滑 四八〇
風 四七
近上 三三
浮 七四
西下 三五

八雲狸々
矢藏
野傾の雨宗あづち論
焼づらが思ひは袖香爐に留る
矢細工
屋敷琢澁皮
八島
八島落官女の業
安田躬弦の家の文臺の記
保輔おとし穴をこしらゆる事
保名
悌順慈善生口を流す
八十八近在へ旅立之事
彌次郎口(解説)
彌次郎口
彌次郎兵衛北八小梅の別荘に滑稽な
つくす
谷山に道節定正を射る
奴
八橋の里
宿屋の段
谷中の三重切男小石川の楊枝賣
柳梅拾遺(解説)

近下 二四一
西下 五二〇
浮 四九
浮 七三
俳 三八九
西上 三七
諸 一〇一
音 長唄 八七七
和上 三五八
浮 三六四
音 清元 五七九
八下 四一
滑 六六
膝上 解 六六
膝下 二二七
膝下 二一七
八中 三三
音 長唄 八六六
西下 四九二
音 義太 一九一
西上 四三
川 解 三

柳樽拾遺

柳に雛諸鳥の囀

柳糸戀芋環

柳糸引御攝

柳ばしから

柳くで

矢の根

矢の根五郎

矢矧里

八橋集序

夜泊の孤舟暗に窮士を資く

八幡の親里に血筋の引窓

藪醫者解

野夫鑑序

藪夢庵鍼砭の妙遂に道を得たる事

夜發の付聲

山姥

山姥

山姥

山歸り

山川桃右衛門由緒之事

山口標照がはかのいしぶみ

山科中將入水の事

川

長唄

富本

長唄

歌澤

歌澤

長唄

長唄

西下

俳

八中

淨下

狂

怪

西上

諸

音

音

音

滑

和上

浮

三

七五三

七五三

五五五

九二〇

九四三

九四〇

七四三

七四三

四七一

四九七

二五三

二九

二五五

八〇三

八九九

六七〇

六二五

四八

五九六

五九四

八三

四六

三五

山崎與次兵衛壽の門松(解説)

山崎與次兵衛壽の門松

山里に花を見る記

山ざとの紅葉を見る記

田婢變じて令室となる

山路玉世の姫道行

山づと序

倭假名色七文字

大和い手向五字

大和耕作繪抄

山中

山名屋の段

山の井

山芋説

山人

仙翁夢に富山に葉す

山姫

山伏

山法師

山村が子孫九世同居忍の字を守る事

闇の夜のわる口

嬌女の吁詐

嬌女のまこと

近下解

同

和上

和上

滑

近上

和上

音

音

風

西下

西下

音

西下

俳

俳

八上

諸

俳

怪

西下

滑

滑

四二

一九七

三六一

三七三

四〇七

二八三

三八五

四四

五九〇

二二七

四五三

二二

四四

二六三

三六一

一五一

二二九

三〇〇

三五九

八九三

六二九

六二九

六三〇

野もりといふ虫

野遊集序

彌生の花浅草祭

槍踊

鎗踊

鎗を引く嵐のゆくゑ

鎗の權三重帷子(解題)

鎗の權三重帷子

鎗はさびても

やれ車

野郎山伏笈さがし

野郎を樂む男色親父

八幡山

ゆの部

題

目

書名種類頁

夕霞浅間嶽

幽鬼嬰兒に乳す

夕霧

夕霧

夕ざり

遊興に草臥て養生に引込隠者形氣

夕暮に

怪 九四

俳 五二

音 清元 六七

音 河東 三〇三

音 長唄 七六

西下 二六九

近下 解 二六

同 一七

音 歌澤 九四三

音 長唄 七九三

浮 二五

浮 八五八

西下 五七

與ニ有功子ニ書

幽魂家に歸る

遊女宮木野

勇次郎汐汲

夕立

夕立

夕立墳

夕立墳春電

夕立や

雄長老狂歌集(解説)

雄長老狂歌集

幽霊出て僧にまみゆ

幽霊書を父母につかはす

幽霊評ニ諸將一

幽霊説

ゆかりの月

由縁の月見

雪 雪女五枚羽子板(解題)

雪女五枚羽子板

雪を見る辭

同

雪をめぐる記

俳 四九五

八中 梗概 二四

怪 長唄 一七

音 清元 八四三

音 清元 六四六

音 清元 六四六

音 歌澤 九四二

狂 解 三

同 四三

怪 一六七

怪 八五

怪 二九

怪 九四

俳 四三七

音 長唄 八三

音 蘭八 七七

謠 六三

近上 解 六三

同 二九

同 二〇一

同上 二〇一

和上 二〇二

行かひぶりの序
 行包在村患奸諫を異にす
 遊行柳
 遊行寺
 雪白明神
 雪の下白蓮本宅の場
 行末の寶舟
 行過者
 雪の朝
 雪のあけぼの
 雪の夜の
 雪の夜の情宿
 雪請序
 雪はしんく
 雪は巴に
 雪見賦
 野坑を擡出されて親兵衛賜を受く
 湯島の社頭に才子藥を賣る
 指は切目に鹽よりもむごし
 夕顔
 夕霧阿波鳴渡(解題)
 夕霧阿波鳴渡
 弓作り

和上	三六	弓矢立合
八下	三一	弓取
謠	二〇一	弓八幡
西下	四四三	占夢南柯後記(解題)
怪	一四一	占夢南柯後記
歌舞	八九三	夢を占して重戸識を説く
西上	三五九	夢路の風車
滑	四八九	夢路の月代
音	九三三	夢のちぎり
浮	四九	夢に京より戻る
音	九六六	夢の權八
西上	五四四	夢の太刀風
俳	四三	夢の手枕
音	九三三	夢辨
音	九三四	夢説
俳	五七	湯本
八下	五五三	熊野
八中	二九〇	熊野
浮	七四七	由良物狂
謠	一六五	百合若大臣野守鏡(解題)
近下	二	百合若大臣野守鏡
同	四四	ゆわう籌賣
俳	三七一	由井ヶ濱の場

謠	六四八	
俳	三五七	
謠	二	
讀	六八五	
同	二六四	
八中	三四〇	
西上	七八九	
西上	七六	
怪	三七六	
西上	六三	
音	九三七	
西上	四一八	
音	六七	
俳	四五一	
西下	二二三	
音	二八八	
謠	六二九	
近上	一〇三	
同	五七九	
俳	三五三	
歌舞	八五	

よの部

題目

書名種類頁

よゐの法師

嘲三宵惑説

謡曲二番目物

同

謡曲二百十番謡目録

謡曲二百五十三番

謡曲三番目物

同

謡曲三百五十番集解説

謡曲四番目物

同

謡曲舞四十六番

謡曲五番目物

同

謡曲目の作者

謡曲の文章

妖邪を斬て禮儀父の怨を雪む

妖書の孽仁妙眞に辭別す

姚生

様子あつての俄坊主

醉たる上にて愚痴ばかりいふ酒癖

夜討曾我

夜討薔菱之報條

妖尼庭に衆兒を聚ふ

妖尼妙椿

妖婦玉梓の最後

妖婦船蟲

要文集序

幼戯の圖の序

楊枝隠の傳

楊貴妃

妖物論

用命天皇職人鑑 解題

用命天皇職人鑑

養老

醒さめの酒うらみ

宵にまち

夜轡の驟雨

夜川の野船

夜着頌

欲捨て高札

欲の世の中に是は又

欲ゆゑに禍は身に引掛る虎落形氣

滑 六九八

謡 四七七

滑 六八四

八中 五五一

八下 梗概 四

八上 梗概 七

八中 梗概 四二

俳 二七六

狂 八〇五

滑 七三〇

謡 一六八

俳 四二六

近上 解 六

同 二五七

謡 二七

西下 八八一

音 歌澤 九三八

讀 六〇四

讀 八四九

俳 四六〇

西上 一九八

西上 八〇

浮 七〇四

與九郎靈夢を蒙る事

横山

横山

與作踊

與作小まん夢路の駒

義經の邯鄲

吉野

芳野

吉野詣

吉野靜

吉野天人

吉野天人

吉野猩々人間に遊びて歌舞を傳ふる話

吉野都女楠(解題)

吉野都女楠

吉野賦

芳野行

與四郎の歸參と荒芽山立退

義任薙人三勇を先にす

與次兵衛吾妻道行

義經千本櫻(解題)

義經千本櫻

義經道行

滑

九七

義經含狀

諸

六八

義成仁を旨として刑を寛くす

諸

七九

義成兵を制めて家訓を聴く

近上

四七

吉原之段

近上

四三

吉原細見説

音

八六

吉原細見天の浮橋序

諸

六五

吉原雀

諸

六三

吉原雀

諸

七五

與作

諸

二五

夜ざくら

諸

三三

四個の保質反て兩個の保質を捉る

音

九〇

餘談を盡して親兵衛扁舟を促す

怪

八七

四日市

近下

九

四日市

同

七

世繼曾我(解題)

俳

三三

世繼曾我

俳

四二

四つ五器かされての御意

八中

二

四竹の隠者

八下

四〇

四つの袖

近下

二〇九

四つの詠

浄下

三

楚川堤楚天の場

同

二八

淀鯉出世瀧徳(解題)

近上

八〇

淀鯉出世瀧徳

近上

一七八

八中

五三三

八中

四三

歌舞

五九九

狂

八二八

狂

七八二

音

五九九

音

七九四

音

七六三

音

九六六

八下

六三三

八中

六三三

西下

四九八

諸

五

近上

三八

同

一五

西下

三六七

西上

四三

音

八三四

音

八七

歌舞

二〇一

近上

九六

同

四九八

淀の川瀬

夜泣松

世にはふしぎのなます釜

世に見をさめの櫻

世の中の

米谷の舒塚

世上洒落見繪圖(解説)

世上洒落見繪圖

世諺口紺屋雛形(解説)

世諺口紺屋雛形

世の中百首(解説)

世の中百首

夜這星

夜半の月魄

記二余白一俚歌

喚繼演

讀本集解説

嫁入小袖つまを重ねる山雀本

よめの君

媳に逼て一角胎を求む

新婦變じて姑婆となる

施にやかれて火にくばる大名形氣

蓬が杣の記

音 歌澤

西下

西下

西上

音 歌澤

讀

黃

同

黃

同

狂

同

音

讀

併

西下

讀

浮

八中

滑

浮

和上

四〇〇

四七五

八七五

五〇九

九三三

七五七

五〇

三九五

五五

五五

二

二

六三九

六四

五七

四四

一

八七

九八三

四三

四一

七〇九

三六

四方の留粕(解説)

四方の留粕

縁連牙二郎信道を逐ふ

頼政

夜弟を襲ひて勝岡義治を亡す

よるの雨

夜の雨

夜の契は何じややら

夜鶴綱手車

夜鶴雪鑒

夜の錦

鎧細工

萬の文反古(解説)

萬の文反古

萬屋助六道行

弱法師

虚弱變じて剛強となる

世渡りには淀鯉のはたらき

世はぬき取の觀音の眼

世は欲の入札に仕合

らの部

題目

狂 解

同

八中

讀

浮

音

西

音

音

音

併

西下

西下

音

諸

滑

西下

西下

西下

元

七九

三三

二三

七三

二六

九三

二四

六六

四〇

二五

三七

二四

九三

三五

三七〇

四一五

一五七

二一六

九七

頼光山入の段	來山追悼	頼省幹	來殿	雷電	雷電山から白井城下	雷電の社頭に四雫會話す	落柿舎記	落柿先生挽歌	羅生門	らく寢の車	樂老庵主像賛	樂老記	蠟狐島	蠟盃銘	亂菊枕慈童	蘭蝶	嵐蘭誅	り の 部			題	李珣	津家																																													
音 一中 三七	俳 怪 七九	謠 四三	謠 六四	謠 五七	八中 梗概 九	八上 五	俳 二六六	俳 二九二	謠 五七八	西上 一三三	俳 四四五	俳 四二〇	西下 三八四	俳 六八〇	音 長唄 七六九	音 新内 六九九	俳 二八八				書名種類	怪 三七	俳 三六一																																													
利發女の口まね			利非の命勝負			流義を立る色の諸末寺友吟味			龍宮の上棟			宴二柳後園一序			龍灯は夢のひかり			蓼花巷記			龍虎			兩郡を奪ふて賊臣朱門に倚			涼月遣草跋			兩侯衆議を聴て京信を寛す			兩國川催涼蓮池之會合			同			兩國河原に南客北人に逢ふ			兩國橋			良將征せずして地を二總に廣くす			良將策を退けて衆兵仁を知る			龍石			了仙貧窮付天狗道			蓼太句集(解説)			蓼太句集			同			同		
西下 三四五	西下 一九三	浮 四七六	怪 二二	俳 二七五	西上 九五〇	俳 四〇八	謠 五七三	八上 三八	和上 三九八	八下 二八六	滑 八〇九	同 八九	八中 六三九	西下 四三九	八中 三九二	八上 七六	怪 九三三	怪 三五	俳 六八九	俳 六九八	俳 七〇三	俳 七〇九	俳 七〇九																																													
解																																																																				

蓼太句集 秋之部

同 冬之部

兩敵に相遇て義奴怨を報ふ

兩方一度に神おろし

兩方よらねば格の明ぬ藏

兩滅を誣て辰巳誑簡を貽す

呂球

旅行の暮の僧にて候

旅泊の人詐

吝氣くだき

吝氣はするどい心の劔白齒の根

輪藏

るの部

題

目

書名種類 頁

蟻翁傳

れの部

題

目

書名種類 頁

靈狐政本

靈虫傳

靈場の熱鬧

怜野集のおくがき

和上 三九三

讀 三〇三

併 三〇三

八下 梗概 六九

連歌師

連歌詠むを聞きて狸の笑ひし

連獅子(勝三郎連獅子)

廉直頭人死司官職

聯句

るの部

題

目

書名種類 頁

龍祇王

老侯に謁して親兵衛神助を訟ふ

老女

老僧楸を案て冥罰を示す

籠太鼓

老尼計を薦て舊祠新に葺る

老女のかくれ家

廬生夢魂其前日(解説)

廬生夢魂其前日

呂川丸はだか

老實主家を續て舊憂を報

六歌仙容彩

六歌仙容彩

六郷里

六十餘州紙の來歴男

併 三九二

怪 九三六

音 九三二

怪 一三二

併 四六六

諸 二七七

八中 四八三

音 八三五

八下 三二

諸 二七四

八中 四三二

西上 五七五

黄 四六

同 三六一

浮 一四四

八上 六七二

音 六三三

音 八七八

西下 四三七

浮 五八一

六帖詠草

同 春歌

同 夏歌

同 秋歌

同 冬歌

同 戀歌

同 雜歌

同 長歌

同 施頭歌

同 物歌

同 俳諧歌

六帖詠草拾遺上

同 春歌

同 夏歌

同 秋歌

同 冬歌

同 戀歌

六十齡説

六林文集序

悼三六々庵一辭

ろくろ挽

蘆隱句選序

下

春歌 夏歌 秋歌 冬歌 戀歌 雜歌

和下

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

俳

俳

俳

俳

俳

俳

わの部

題

目

書名種類頁

猥瑣道人水品を辨じ五管の音を知る話

王忱

若桂の序

我子をうち替手

我戀は

若木仇名草

若狹の國の孝女

若衆盛は宮城野萩

我背子戀の合槌

若菜賣序

若菜摘

稚美鳥末廣

嫩案葉相生源氏後序

我かもの

我物ゆへに裸川

若宮紅梅の短冊

別路の文

別れにつらき沙室の鶏

別れは當座はらひ

和漢同詠衆序

怪

怪

和上

西下

音

音

怪

西上

音

俳

音

音

狂

音

西下

淨下

浮

西上

狂

八五

三五

三七

二九

九四

六九

二七

一〇七

八〇六

四八七

八七

九二

七七

七

二七

一六

八七

一六

八〇三

脇能物
 脇能物
 譯知
 和國
 同
 和國諸人繪つくし
 和國百女
 妖孽寛憫女
 鶯尾義治玉琴に感謝す
 鶯尾の家士故君の讐を復す
 わしがおもひ
 我が國さ
 わしがざい所
 和七賢の遊興
 綿うり
 渡し船の老人
 渡邊橋
 津を問て犬瀧風濤に惱む
 和銅錢
 藁塚に犬田危難を緩す
 童獅子
 童子戲面被
 わる口をはいてうれしがらす酒癖

滑	音	音	八上	怪	八中	西下	西上	俳	西下	音	音	音	讀	讀	西上	風	風	同	諸	滑	諸	諸
	長唄	長唄								歌澤	歌澤	歌澤										
六四	七九〇	七九三	四〇四	九一	六三三	五三三	四七三	三三八	九九八	九三九	九三三	九三五	一八	一九	六六	二七	一	七八	三九	四七	六五	八

索引大尾

我が命の早使
 賛補破茶碗一辭
 我と身をこがす釜が淵
 梶久末松山(解説)
 梶久末松山
 梶久道行

西上	俳	西上	浄上	同	音	浄上
			解		一中	
一〇三	四五四	六九九	一九	七五	三三	八四

小袖曾我薊色縫

(歌舞伎脚本集補遺)

十六夜清心の補遺配布にあたりて

守 隨 憲 治

昨年の夏、脚本集編輯の際、突然河竹繁俊氏から幾冊かの臺帳が示されて、都合で印刷に附したらどうかとの言傳があつた。見ると、從來の十六夜清心の補充に當る部分だ。驚きもし不審も打つた。段々尋ねてみると、默阿彌門弟の某氏の手から最近同家の書架に收められたものであつたさうな。

一體「小袖曾我薊色縫」は春狂言だから、まづ對面があつたが、どうせ對面だから無ければ無しでも済むものゝ、次に八重垣紋三が出て来ないと、小袖曾我を成さなくなり、木太刀の類は八重垣何某。云々の語りも意味をなさなくなる。それで始め、八方質してみたが、何家にも無いらしい。致し方なしとして、河竹氏の承諾の下に、默阿彌全集と同一の手法で、十六夜清心だけを抽出して、大正十三年上演の外題「花街模様薊色縫」を附しておく事に決定してしまつた。ホンノ一足違ひで今度の分が間に合はなかつたのである。早速次回配本の際に補遺として附足したかつたが、種々の事情から今日まで延び／＼になつてしまつたものゝ、何とかして配布しておきたく編輯部とも交渉中であつた。而して、今日讀者諸彦と共に、始めて世に出る「八重垣紋三」の面貌に接する悦びを分ち得る事になつた次第である。右様の譯で、此舉が本全集に於て、なされた動機は、一に河竹繁俊氏の御好意に據る所、厚く謝意を表する所以である。

小袖曾我薊色縫

第一番目三立目

鶴ヶ岡鳥居先の場

同 別當所の場

一 蔭山武太夫 三十郎

一 八重垣紋三 權十郎

一 蔭山繁之丞 訥 升

一 花賣り佐五兵衛 與 六

一 戀塚求女 羽左衛門

一 大江因幡之介 竹 松

一 塚本主水 橘之介

一 牛窪臺藏 い 太郎

一 醫者古池順齋 村右衛門

一 若徒宗助 國太郎

一 近習 松次郎

一 薪 作

一 麥 藏

一 長沼蓮藏

出來藏

一 鴉森九郎藏

米次郎

一 大引

大よし

一 石神道六

關十郎

一 妻木娘お雪

歌女之丞

一 下女お常

市之丞

一 腰 元

藤 松

一

辰三郎

一

扇之介

一

國 代

本舞台三間の間。上手へ寄せて石の鳥居。是

へ續いて石の玉垣、うしろ紅白の梅林。同じ

く釣枝、下手出茶屋、床几二脚並べあり。す

べて鶴ヶ岡八幡鳥居先の體。爰に若い衆の仕

丁四人、箒手桶を持ち掃除をしてゐる。此見え、大拍子にて幕あく。

○ 何と太郎又。いゝ日和ぢやアね

えか、何ぼ奉公とはいひ乍ら、人

は見物の遊山のといふ春先に、掃

除をしてゐるも智慧がねぢやねえ

か。

△ そりやア愚痴といふものだ。此

掃除をするも私ぢやアねえ。今日

は大江廣元様のお嫡子因幡之助様

が當社へ御參詣。

□ それに今日は、吉例の通り、弓

初の御嘉例なれば、別段掃除も念

を入れると方丈様の言附け。

× 時に、斯うしようぢやアねえか。

もうお入りに間もあるめえから、

部屋へ行つて一杯やらうか。

成程、夫がいゝゝゝ。それぢや

ア内田で五んつくはづまうか。

△ 待つものはお定りて鰯の足に人

夢の白和か。

□ さういふ中にも、もうお入りだらう。

× 早く部屋へ行かうぢやねえか。

四人 サア／＼行かう／＼。

(ト矢張り、大拍子にて、仕丁四人鳥居の中へ入る。三味線入り大拍子になり、向うより大江因幡の曲袴衣裳大小にて、若殿の袴へ、半寝盤纏主水、同じく袴大小にて附添ひ、附者願新坊主天恩の醫者の袴へ、中通りの近習四人弓と矢を持ち、體元四人苦い衆の侍二人手箱と床几を持ち出て来り、皆々宜しく花道に居並ぶ。)

因幡介 實に／＼も時めきて、春風誘

ふ梅ヶ香に千歳をのぶる鶴ヶ岡。

臺蓮 お供に列る某も斯く初春のお

目見えに、時を恵方の幸先よし。

主水 神の應護も著き鎌倉山の春

霞、ひくや嘉例の弓初め、

願新 當り外さぬ懸的も丸いは持

前、頭まで丸くをさまる御代長久。

體元○ 若殿様の神詣で、花の魁、咲

分けの、

體元△ 句も高き青雲に心も届く願龍

めも、

體元□ 私共の氣も晴れて、

體元× 萬歳うたふ星月夜、

侍○ のどけき春の睦し月、

侍□ 我々共に至る迄、

二人 お目度う存じまする。

臺蓮 何は然れ、若殿様には先づ、

皆々 お越し遊ばしませう。

(ト右の鳴物にて皆々本舞臺へ来り、因幡之介は床几にかける。臺蓮女形は上手、主水願新下手、中通り四人宜しく住ひ。)

因幡 今日當社へ参詣なすも武家の

家例。御境内にて掛鳥の射術、兼

兼其道に心を寄せる牛塞臺藏塚本

主水、疾く／＼用意致してよからう。

臺蓮 某が射術に心をゆだねる事、

御前にも聞こしめされ、今日の御

供、身に取りまして大慶に存じま

する。

主水 未熟なる拙者めに今日當社に

て掛鳥の御家例、若輩の身にとり

まして、冥加至極有りがたう存じ

まする。

因幡 それなる弓矢、是へもて。

中通り 四人 ハツ

(ト侍二人弓矢を臺蓮主水の前へ置く。兩人宜しく弓矢調べる事あつて、因幡之介、辭儀をなし、思入れあつて、立上り。)

臺蓮 然らば御免下さりませう。

(トかすめて風の音になり、兩人こなし有つて、弓矢を番ひ、揚幕へ向ひ、射て放す事あつて元の座へ直る。)

侍 御兩所の弓勢は某などの及ば

ぬ所。

侍へ 射たる矢先の獲物をば、

侍口 早く此場へ取寄せて、

侍× 其勝敗を見たいもので、

侍四人 御座るてな。

(ト此中バタ／＼になり、向うより若い衆
侍、鳥と雀を射抜きたる矢を持ち、直ぐ
に舞臺へ來り。)

侍丁 ハツ。二筋の矢に射抜いたる

獲物えものを持參仕つて御座りまする。

國藏 ヲ、それ待兼ねわ。是へも

て。

侍 ハツ。

(ト合方になり、國藏之介前へおき、下手
へ入る。臺藏思入れあつて、ツカ／＼と前
へ出て、雀を射たる矢を取上げ。)

臺藏 何と、何れも御覽みじたか。こ

こが日頃の手練てござる。武士た

る者の心掛は爰てござる。主水殿

の矢先にて射留めたるは大きな

鳥、拙者が射たるは雀。小鳥を射

るは寸的の眞只中を射ぬく程の術

がなければ及ばぬ事だ。此様な大

きな鳥を射ぬくのは犬打童が戯れ

に猿人形を射るも同然、お腹は立

たれた主水殿、さ様なものぢやご

ざらぬか。

主水 如何様。驚き入つたる臺藏殿

の御手練。中々もつて拙者等の及

ばぬ處、恐入つて御座りまする。

臺藏 下世話に申す如く水練。此上共

に武藝をばチト勵んだがよくござ

る。

(ト臺藏主水に憎態にいふ。主水こなし
まつて。)

訓、有りがたう存じまする。其寸

的の只中を射抜く程の術なければ

射留る事の叶はぬ小鳥。羽交を抜

いて其矢の印しるしは何と印しござりま

するな。

臺藏 ハテ、知れた事。拙者が射抜

く此雀。拙者が矢故牛窪と印して

ござる。

主水 しかとさ様でござるかな。(ト

矢を取り上げ。此矢をとくと御覽な

され。

(ト臺藏矢の振をつく／＼見て、惻りな

し。)

臺藏 ヤ、こりや塚本と印してある。

こりや違つた／＼。そんなら、お

れが矢ではなかつた。ホイ。

主水 イヤ何、牛窪氏。貴殿の矢に

て射留めたるは是なる鳥、然も矢

の根に牛窪と印した矢にて、此鳥の胸を射抜くは、天晴御手練。其

上ならず、八幡宮の此庭光、血汐を穢すのみならず、例へ鳥類なればとて、命をとるは無益の殺生。

臺藏殿、御鍛練の程驚入つてござりまする。

臺藏 黙り召され。主水殿。例へ射

たるは鳥にもせよ、拙者ばかりが殺生にて、貴殿には殺生でござらぬか。雀を射たも無益の殺生。

主水 拙者が射たるは殺生ではござらぬ。

臺藏 そりや又なせ。

主水 未熟乍らも某は今日御嘉例の

弓初め。獲物の小鳥は射て落とせど、ほんの羽交を縫うたる雀。疑

はしくば之を見られよ。

(ト主水雀の矢を抜くと、風の音になり、差金にて雀飛去る。皆々感心の思入れ。)

主水 何と牛窪氏。射たる雀はあの

如く遙かの梢へ飛去つても、矢張り無益の殺生と仰せらるゝか。

臺藏 ム、其儀は。

主水 よもや殺生とは申されまい。

臺藏 サアそれは。

主水 但し御批判ござりまするか。

臺藏 サアそれは。

主水 サア。

臺藏 サア。

主水 サア。

臺藏 サア。

主水 ム。

(ト臺藏くやしき思入れ。腰元四人思入れあつて。)

腰元〇 始めの程の廣言に打つて替つ

た鳥の間違ひ。

腰元△ いつに變らぬ牛窪様の出ぞこ
なひ。

腰元□ あたら始が強いゆゑ、今となつては御氣の毒。

腰元× 笑止な事でござりまするわいなア。

因幡 ホ、ウ。天晴。兼て射術に心を寄すると聞きつるが、聞きしに増さる主水が働き。感心の仕

つた。

侍。 夫に引替へ、牛窪氏が射留められたるあの鳥。

侍△ 咽を射抜いて即座の落命。

侍□ 今日御嘉例の御祝儀も、

侍× 是では何の役にも立たず、

侍。 誠に是が、

侍四人 無益の殺生。

(ト此時願齋前へ出て。)

願齋 いえく、申し何れも様。此

鳥は役に立たぬ事はござりませぬ。

。是は愚老がお貰ひ申しまする。

侍○ 願齋老。之をもらつて、

侍四人 何に致す。

願齋 四ツ谷の千葉様にならつて、

瘡の薬に致しまするテ。

四人 何を申す。

因幡 此上は近習の面々、嘉例にま

かせ主水にならつて小鳥の獲物を

射留めて見やれ。

侍四人 ハツ畏つてござりまする。

(ト立かゝる。願齋押へて、)

願齋 愚老も今日のお供なれば一ト

先射留めて高名を致しませう。何

れも其弓矢をお貸し下され。

(ト願齋弓矢を持ち、無器用に弓矢を番ひ

向うへ向つて、弦を放す。手が狂ひ外れ、

思入れにて、弦にて耳をすつて痛いといふ

思入れ、弓を舞臺へ放り出し、)

ア、痛いく。

(ト願齋耳を押へてしきりに痛む思入れ。

中通り皆々立かゝり、捨臺詞にて願齋を介

抱する。)

侍四人 コレ願齋老。如何致したく。

願齋 ア、コレ、何れもお聞き下さ

れ。愚老も小鳥を射留んと弓と矢

を番ひ、満月の如くきりくつと引

絞り、放つた矢先は誤たず、イヤ

誤たすではない誤つて、手先の狂

ひに弓は倒耳をすつて此通り。

ア、痛いく。是がほんの弓はさ

か弓と申すので御座る。ア、痛い

く。

(トしきりに痛む思入れ。中通り皆々介抱

する事。腰元四人もをかしいといふ思入れ。

大拍子になり、向うより戀塚求女若衆疊袴

一本差し、寺小姓の拵へ、頬へ矢のかすり

疵をつけ、若い衆二人仲間の形にて之を肩

にかけ出来り、捨臺詞にて直に舞臺へ来

り)

○ 只今の矢はどなた様かは存じま

せぬが、ねらひが外れて是なる若

衆に、

△ わづかなれども、かなり疵が附

きましたゆゑ、

二人 是迄召連れまして御座ります

る。

(ト求女を引出す。皆々思入れあつて、中

通りの諸士、主水に向ひ、)

侍○ 只今の矢は願齋老で、

四人 ござりまする。

(ト此中主水前へ出て思入れあつて、)

主水 コリヤく、シテ其方は何者

なるぞ。

(ト求女前へ出て合方になり、)

求女 ハイ私は金澤稱名寺の小姓戀

塚求女と申す者でござりまする。

願 阿、コレ／＼今の矢は愚老な

れ共、其矢の先へ通りかゝり、う
ろ／＼致してをる故に矢がそれて
のかすり疵。是は其方が不運、愚
老が粗相ではないぞ。其方が粗相
と申すものぢや。

求女 イヤ私はあれなる道の片ほと
りを、往來ゆゑに通りましたに、貴
方の矢が外れ^{あや}ましたので、此様な
疵をうけましたも、災難とも諦め
ませうが、夫を私が粗相と仰つし
やるは、それア貴方がチト御無理
かと存じまする。

(ト此時聲藏つか／＼と前へ出で、求女が
聲がみる無残にとり、)

聲藏 コリヤやい若衆め。無理とは
何が無理だ。まだ前髪の身を以て
無禮な奴。こりや何だな。些かな

疵を囨にして、われア言掛かりを
ひろぐのだな。顔に似合はぬ太い
奴、強つて申さば手は見せぬぞ。

(トきつとなり、刀へ手をかける。)

因幡

豪藏。控へい。

聲藏

ぢやと申して。

因幡

ヘテ控へいと申すに。

(ト是にて、聲藏不承／＼に後へ下る。合
方きつぱりとなり、)

例へ射たる矢は誰にもせよ、今日
は身が嘉例の弓初め、往來^{ゆきき}の者に
怪我あつては相濟まぬ。こりや主
水。其者に手當を致してやりやれ。

主水

ハツ畏つてござりまする。コ

リヤ求女とやら。計らず其^そ方が疵
を負ふも時の災難。必ず心にさへ
ぬがよい。其方も聞きやる通り、
若殿様より今の御詞。お手當を下

さる間、了見致してくりやれ、コ
リヤ其箱これへ。

侍

ハツ。

(ト若い衆の侍、手箱を持來り、主人の前
へおき、主水手箱の中より服紗包の金を
出し、)

主水

只今も申す通り、若殿のお情、
寸志の手當、有難う頂戴致せ。

求女

(ト求女の前へ置く。)

イエ／＼此お手當を受けずと
も、殿様の今のお詞、下を憐む御
仁心、お金はお貰ひ申さずとも、
身にとりまして何程か有難う存じ
まする。もう／＼痛みも致しませ
ず、もう宜しうござりまする。

主水

ではあらうが、是は若殿の思
召し、是非とも受けたるがよいぞ
や。

求女

イエ／＼お金をお貰ひ申しま

しては濟みませぬ。此儀は御免下

さりませ。

聲 彦 ヲ、さうだ。僅かばかり

のかすり疵、熊の油か天地膏で直

りさうなもの。

順齋 仰山さうにお手當には及びま

せぬ。私なぞは家内の者が嫉妬やきもちで、

此位な引搔き疵は絶えた事はござ

りませぬ。

聲 彦 お手當等は、

兩人 御無用になされませ。

(ト是にて因幡之介きつとなり。)

因幡 ヤア黙れ、兩人。身が情を以

て遣す金子。其身のしがを隠さん

爲め、要らぬ口出し、控へてをら

う。

兩人 それぢやと申して無駄でござ

る。

因幡 詞を返すか。控へてをらう。

兩人 ヘイ

(ト順齋聲彦、求女を尻目に掛けて、不承
く(に後へ下る。)

主水 若年者に似合はぬ利發。金子

を受けぬも正當しやうたうなる氣質、感心々

々。然らば此方より使者を以て稱

名寺へ粗相の段詫致さん。

求女 イエ、夫には及びませぬ。

其様に御心配被下ますと、却つて

お氣の毒でござります。師の坊へ

は私より、途中で石に躓つまずいて樹の

根で怪我せし態に申します。も

う宜しうござります。些細な事

で殿様へまで御苦勞をかけまして

ござります。恐れ乍ら御機嫌宜

しう。貴方様。いかにお世話様に

なりましてござります。 (ト順齋

聲彦に向ひ。) さ様なれば貴方様。 (ト

挨拶をすれど知らぬ顔をしてゐるゆゑ、求女

立上り思入れあつて。) 氣も晴渡る春の

日を思はず此身の災難に。

主水 靜かに行きやれ。

求女 ハイお暇申します。

(ト眼になり、求女思入れあつて、袴の芥

を拂ひ、下手へ入る。因幡之介主水、求女

の跡を見送り、女形も思入れにて見送る。)

因幡 イヤ主水。今の若衆は求女と

申したな。

主水 さやうでござります。

ア、末頼もしい者ぢやなア。

思はぬ事に暫時の暇どり、

若殿様には別當方にて、

御休足遊ばされませう。

何様。さ様致すであらう。

若殿様には先づ、

いらせられませう。

(ト唄になり、此人歌皆々鳥居の中へ入る。
通り神樂甚九の合方になり、上手より車田、
鶴ノ森、石神、蓮木着流した大小、鎌倉^{ちつさん}堀近、
各好みの持へ。鶴ノ森二升樽をさげ、車田
笹折をさげ、皆々生酔のこなし。揚枝をく
はへ捨臺詞にて出て来り。)

石神 何と、何れも。此天氣のよい

に一杯機嫌で、かうぶらついてゐる心持はたまらぬではござらぬか。

蓮木 そりやア、貴公の仰せらるゝ通り、拙者等はチト酒の上は悪うござるが、此梅花の盛りを見ては又格別でござる。何と車田氏、鶴ノ森氏。一句はんべつてはどうでござる。

車田 イエ、拙者は俳氣は更にござらぬが、狂氣の心がござるか、春先でチトのぼせて狂氣の方

なら持前でござるて。

鶴森 貴公はのぼせて狂氣でござるか。拙者は冷えるので疝氣でござる。ハ、ハ、ハ、時に、石神氏。此梅を見乍ら一盃とはどうでござるナ。

石神 夫は結構望む所。結構それへお渡しとはどうで有馬の水天宮かな。

(ト車田の提げたる二升樽を鶴ノ森に渡す。是にて皆々床几へかける。石神有合ふ節茶碗をとつて。)

蓮木 石神氏。此くい呑みて貴公からお初めなせえ。

石神 それは結構。

車田 ヲツト、それへお渡し申すはならぬぞ。

石神 ならぬなら、ならぬ旅籠屋三

輪の茶屋とはどうでござる。

蓮木 イヤ道六どの。仲々洒落が上達でござるな。

鶴森 上達二日の初暮にはどうでござる。(トうたうてゐる。)

皆々 ハ、ハ、ハ。

蓮木 時に、何れも。下らぬ事を申して野郎ばかりの酒盛もさえぬてはござらぬか。

石神 違へねえ。せめて茶屋の姐^{あね}でも居ればいいが、こいつも留守ぢやア仕方がねえ。どうか小脛^{また}の切上つた、水氣たつぷりといふ名婦人を生捕りてえものだ。

車田 何でも看^みは刺身^{さしみ}、酌^{しやく}は鬢^{かみ}に限るテ。かういふ中も乙^おりきな代物^{しろもの}が来さうなものだ。

鶴森 車田氏。かういふ事なら、貴

公の内儀を連れて来て、三味でも

弾かせればよかつたになア。

石神

兎も角も嗤しよりア、酒を流

行らせよう。

皆々

其事／＼。

(ト此様な事を云乍ら、捨臺詞にて皆々酒を呑み居る。靜かなる唄、通り神樂になり、向うより娘お雪、振袖肩敷娘好みの拵らへ、後より下女お常、家中腰元の拵へ、若徒親仁宗助、白髪髻茶木綿の無地の羽織、古びたる木綿袴、大小の拵らへにて附添ひ出て来り、花道にて舞臺を見て思入れあつて)

お常

モシ、お嬢様、御覽じませ。

ようマア咲いたではござりませぬ

か。

娘 ほんに美しう咲いたわいなう。

(ト是にて、舞臺の四人を見てお常の袖を引

く。)コレノ、常や。あそこにお侍

様の生酔がゐるわいの。氣味が惡

いではないかいなう。

お常

ほんにさ様でござります。ひ

よつと又、悪い戯談でもされると

惡うござりますから、こりや後へ

歸りまして裏道を參りませう。な

ア宗助どの。

宗助

何といはつしやる。お嬢様は

何が怖いと仰つしやるのだ。

(ト大きな聲をするゆゑ、お常押へて、)

お常

コレサ、靜かにいひなさんせ。

(トお常、宗助に舞臺へ思入れをして囁く。)

おやによつて、裏道を廻つた方が

よからうわいなア。

宗助

ナニ生酔だといつて怖い事が

あるものか。向うも武士ならこち

らも武家のお娘御様。滅多な事を

致す事はござりませぬ。モシお嬢

様。何も氣味の悪い事はござりま

せぬ。見ぬ振してお通りなされま

せ。

お常

宗助どの。よいかいなア。

宗助

ナニ遠慮なしに行かつしやり

ませ。

娘

そんなら、よいかや。

宗助

ハテ、宜しうござります。サ

ア／＼おいでなされませ。

(ト右の唄になり、本舞臺へ来る。此中四人は酒を呑み乍ら、娘を見て、いゝ娘だといふ思入れにて、囁いてる。娘腰元宗助は是に聞はず、四人の前を行過る。石神聲をかけ。)

石神

ヲイ、父さん／＼。待つて呉

んなく。

蓮下

姐さんも待つておくれ。ヲイ

父さん。待ちなといふに。

(トいへども、宗助聞えぬ振にて、兩人へ聞はず行けといふこなし。娘腰元は氣味の惡き思入れにて行きにかゝる。)

石神 ライ父さん。お前は耳が聞え

ねえのか。マア待つて呉んねえなア。丁度いゝ所だ。今おいら達が酒を呑むに酌がなくなつて困つてゐた所だ。

車田 待てば甘露の日和とは此事

だ。長くは置かねえ、少しの内だ。

鶴森 ライ。そつちの姐えもいゝぢ

やアねえか。そんなにびく／＼しなさんな。

蓮木 サア／＼二人乍ら、此處へ掛

けなよ。コレサマア掛けなといふに。

(ト蓮木車田鶴ノ森三人にて、娘腰元を無理に引寄せたるを宗助隔てゝ、)

宗助 ア、コレ貴様達はとんだ人

だ。往來の者を無理無態、手籠めに致すは慮外千萬。品によつたら

其分には致さぬぞ。(トきつといふ。)

サア／＼お嬢様。怖い事はござりませぬ。お常どの。そんな者に関ふ事はない。サア／＼おいでなさい／＼。

(ト四人の者を掻分け、無理に連れて行かうとするを、石神、宗助を足にて蹴飛ばし、娘を引寄せたる蓮木はお常を、無理に突退け逃げようとするを又抱寄つて口を吸はうとする。宗助いら立ち、中へ割つて入るを、車田鶴ノ森突退ける。宗助あくせくと氣をもち共、年寄にて心には思入れようしく。)

石神 コレサお娘。そんなに跪くに

やア及ばねえ。じつとしてゐなといふに。

娘 アレモウ堪忍して下さりませ。

お常 どうせう／＼ぞいなア。

蓮木 コレサお前迄が同じ様に、初心らしいぢやアねえか。

お常 宗助殿。どうぞして下さんせ。

(ト跪く。石神蓮木之を聞はず、兩人の前へ手を入れようとする。)

娘 お常 アレエ／＼

(ト泣く。宗助も堪へ兼ねたる思入れる。)

宗助 年寄と侮り、餘りの法外。老

朽ちても身共も武士ぢや。覺悟しをれ。

(ト大拍子になり、宗助刀に手をかけ、抜きにかゝるを車田鶴ノ森、宗助を蹴倒し。)

車田 鶴森 エ、老耄め。何をしやアがる。

(ト宗助よろ／＼し乍ら、又立掛るを、車田合口の木刀にて宗助の頭を慘く喰らはす。宗助アツト倒る。娘腰元これを見て種々あせるを聞はず、石神蓮木女形兩人を無理に引寄せ、一散に上手へ入る。宗助起上り、のり紅になり、遣らぬと立上るを車田鶴ノ森にて慘く蹴倒し、兩人は矢張り上手へ逃げて入る。宗助無念の思入れ。ようぼひ／＼跡を追願けて、矢張り上手へ入る。早めたる大拍子にて此道具廻る。)

ハテ騒がしきアノ人聲。定めて喧嘩口論ならん。

やアがつて、見りやア大小手挟んで深編笠の浪人者。

本舞臺、高二重の土手、廊中石段、此上へ寄せて石の井筒、御神水と印したる高札立てあり、後に松の立樹、日蔭より同じく釣り枝、向う八幡本社廻り廊の遠見、上下植込の藍物。すべて八幡段櫓の體。矢張り大拍子にて道具留る。

(ト大拍子打上る。時の鐘、説への合方になり、向うより八重垣紋三、深編笠着流し大小、浪人の拵へにて出て来り。)

石神 エ、邪魔な野郎め。どきやアがれ。

蓮木 手の内でも欲しいのか。我々共が帯したる此大小が目にはやア入らねえか。

車田 悪く邪魔立てひろぐが最後、笠の臺の生別れ。

扇で高砂や、此裏道を門附けて、貰つて歩くが、上分別。

(ト皆々紋三の聲口する。娘並にお常宗助は紋三の袖にすがり。)

紋三 誠や人の盛衰程、世に味氣なきものあらうや。来る春の日は變らねど、變り果てたる浪々の埋もれし身の憂き事を、立願籠める神詣で、ア、まかせねばこそ浮世ぢやなア。

紋三 こりや理不盡な。何とめさる。武士たる者の刀の柄へ手をかけて、無禮至極。アノ爰な、狼藉者めが。

(ト石神を笑致す。娘とお常宗助はうろ／＼として紋三の傍へ寄つてゐる。)

娘 御覽の通り手籠めにあひ、行きも行かれぬ此場の仕儀、お常 お武家様とお見受け申しましてのお願ひ、私は兎も角も、お嬢様のお身の上、

石神 ヤイ／＼／＼要らざる所へ出

宗助 此親仁めをお助け下さると思

召し、どうぞ此場を逃れ^{のが}ますやう、

娘 お慈悲にどうぞ、

お常 われ／＼を、

三人 お助けなされて下さりませ。

(ト紋三にすがり頼む。紋三迷惑なる思入
れ。)

四人 ヤイ／＼／＼何をぐす／＼ぬ
かすのだ。

石神 うぬ。邪魔でもすると、

四人 叩き挫くぞ。

(ト口々にいふ。此時紋三笠を取り、)

紋三 イ、ヤお邪魔は仕らぬ。此者

になり代り、お詫びを仕る。

四人 何と。

紋三 サア何の仔細か存ぜね共、あ
れは女子と老人ばかり、余り彼等
が不便さゆゑ拙者が代つてお詫び
を申す。武士は相身互ひとやら、

御了簡下さらば彼等が仕合はせ、

此身の大慶、何卒御用捨下されい。

(ト紋三、兩手をつき詫びる。)

石神 成程、こりやア貴様の言ふの

も尤だ。先が女や年寄だから相手

にならぬと申すか。

運不 こりや面白い。そんなら貴様、

あの者になり代り相手になつて立

會はつせえ。

車田 ヲ、さうだ／＼。娘や親仁に

代るとあらば、

鶴森 キリ／＼相手に、

四人 ならつせえ。

紋三 是は思ひもよらぬ其仰せ。柔^{じやくひりき}

弱非力の拙者めに、何れも方のお

相手等とは、中々以て。此儀は御

免下されい。

石神 イ、ヤそりやならぬ。此方共

が相手をば、中へ入^{はひ}つて扱ふから

は、相手になるは覺悟であらう。

運不 但しは此方共が怖いのか。貴

様も兩刀手挾めば武士ぢやアねえ

か。

車田 是非共相手に、

四人 致さにやアならぬ。

紋三 ひたすら其儀は御了簡。

四人 イ、ヤならねえ。相手になり

やれ。

紋三 スリヤどうあつても。

四人 くだいわえ。

紋三 ア是非に及ばぬ。此場に於い

て貴殿方の一刀の下に命を捨つる

も前世の約束。仰せに任せ、お相

手になるでござりませう。

石神 そんならいよく、

車田 相手になるか。

敘三 お望みに任せ。

四人 面白い。サア支度をさつせえ。

(ト合方になり、石神蓮木軍田鶴ノ森上下へ別れ、皆々下緒にて等を掛け、支度をする。紋三も立上る。此前方より娘お常宗助氣をもみ居る。此時前へ出て、)

娘 私共が難儀をばお願い申した此

場の仕儀。ひよんな事になりましたたわいなア。

お常 何を申すも女子の事。頼みに

思ふ男と申すは御覽の通り年寄なれば、お願い申した浪人様。

宗助 老朽ちました此親仁の命を捨

つるは厭ひませねど、お連れ申した此女中は主人の娘御、弱味をつけ込む無法者。此納りが何共以て。

娘 コレお常宗助。

お常 お嬢様。

三人 どうしたら宜からうぞいな

ア。

(ト三人思入れあつて泣伏す。)

紋三 アイヤ其心配には及び申さ

ぬ。かくなり行くも約束事。刀の

手前武士の意地。イヤ何、御老人。

女中方を怪我せぬやう、氣を付け

て下され。

宗助 ハイ、有りがたうござりま

す。

(ト宗助、紋三の姿を見て。立派な侍ぢや

といふこなし。紋三も身拵へをする。娘も

紋三に見とれてゐるを、お常種々氣をも

み、娘に指圖をして扱帯をといへ襷に貸し

てやれといふこなし。娘心得、群鹿の子扱帯

をといへ紋三に駈づかしさうに渡す。お常

種々介錯をし乍ら、敵役の方を見て、今に

見ろといふ思入れ。此中皆々宜しく思入れ

あつて、紋三扱帯を襷にかけ身拵へして前

に出て、)

紋三 お支度よくば。

四人 心得た。

(ト三味線入り、誂への鳴物になり、軍田

鶴ノ森双方より切つてかゝる。紋三心得切

結ぶ。よき程に石神蓮木真中へ打つて出る。

四人宜しく段々だんまの土手を小盾に立廻り、此

中娘並にお常は危いと氣をあせる思入れ。

宗助も袴股立をとりよろ／＼し乍ら、前へ

出ては女形二人を構ひ、井筒の圓を三人に

て廻り乍ら氣をもむ。此中種々好みの立廻

り、四人は上下へ別れ、紋三を真中にてキ

ツト見え。是にて鳴物變り、激しき早切り

の立廻り、ト、四人を切倒し、紋三刀の血

を拭ひ、ほつと思入れ。娘並にお常宗助も

前へ出て、思入れあつて、)

お常 是は、何れのお方様が存じ

ませぬが、私共主従の者、恥かし

めをうけるところ。

娘 危い難儀をお助け下されまし

て、何と御禮を申上げませうやら。

宗助 下郎もお蔭様で命拾ひを致し

まして、此様な悦びはござりませ

ぬ。(ト紋三の態を見て)然し乍ら御侍

様には何處も御怪我はござりませぬか。

(ト氣遣ふ思入。紋三宗助を見て、)

紋三 イヤ手前よりは其許、見れば數ヶ處の其手疵、随分共に御養生なさるが宜しうござる。

宗助 イエ、ほんの鵝の毛で突いた程、些細な事でござります。此位な事ですみましたも皆貴方様のお蔭でござります。

お常 重ねの御親切。

三人 お有難うござります。

(ト三人手あ合はせ紋三へ禮をいふ。紋三となしあつて、)

紋三 改まりし其お詞。各々方の御難儀の場處、拙者折よく通り合せ、見るに忍びず此仕合せ。お救ひ申すは武士の本意。何のお禮に及び

ませう。

宗助 どう仕りまして。お嬢様始め私共迄、お助け下さりました貴方様、仲々口でお禮は申し盡されませぬ。

お常 ホンニさうでござんす。どうか御禮の致し様もござりませうに、何を申すも此處は途中、せめて、お屋敷迄御同道申したうござりますなア。(ト思入れ。)

娘 ヲ、それがよい。さうして父様から御禮を言つてお貰ひ申さうわいの。

宗助 成程。それが宜しうござりまする。

娘 そんな、常。早うお連れ申したも。

お常 ハイ、畏りました。(トお

常紋三に向ひ、) 申し。貴方様、今日

は段々々のお情け。何と御禮の致しやうもござりませぬ。それにつきまして、貴方様を手前主人の屋敷まで、お伴ひ申せとある、主人娘の申付け、何卒御同道なされて下さりませ。

(ト此中、紋三始終思案の思入れ。)

紋三 お志は忝うはござれども、御覽の通り四人の者手にかけしは拙者が科。此儘に打捨ておけば、後のとがめ、却つて情が仇となり、各々方の難儀となれば勞して功なく、手前が寸志も水の泡、拙者はこれより、當處の代官へ名乗り出で、仕置を受ける覺悟でござれば、各々方にはお構ひなく早く此場をお歸りなされ。

ト立上る。お常頼左右にうがり、

姐 ア、モシ、其難儀も我々ゆゑ、

どうまア見捨てゝ歸られませう。

お常

一先づ手前が主人の屋敷迄御同道下さりませ。又致しやうもござりませう。

紋三

イ、ヤ、時刻移れば此身の遅れ。是より直に代官所へ。

ト紋三兩人を振致し、ツカノと行きにかゝる、此時上手にて、

武太夫 アイヤ、其御届には及び申さぬ。

紋三 何と。

ト紋三キツト思入れ、合方になり、上手より薩山武太夫、袴衣裳大小にて少しふける格へ、若い衆の中圓舞き出て来り、

武太夫 最前よりの一部始終、篤と見

聞仕つた。扱、驚人つた。貴殿の

御手練の義を見てせざるは勇なし。

武士はかくこそありたき事。拙者は大江の藩中、薩山武太夫と申すもの、事の仔細は此方より貴殿の難儀にならざるやう、代官所へ届け申さん。

(ト之を聞き、紋三下に居て、)

紋三 是は、御懇志の其御詞、忝う存じます。拙者事は下總結城

の浪人、生兵法も身のたづき、不鍛練なるにはござれども、八重垣流の奥儀を極はめ、即ち流儀を苗字に呼び、八重垣紋三と申します

る者、御覽の如く唯今の仕合はせ。悪者とは申せ共、帯剣なれば武士の端くれ、此儘にも捨置かれず、名乗り出でんと存ぜし所、情ある

貴殿の御詞。

武太夫 往來を惱ますあはれ者、切つ

て捨てしは貴殿の働き、及ばず乍ら此場の一埒、拙者證人に罷立ち代官所へ届け申さん。

紋三

何卒、貴殿の御取計らひ、萬事宜しく願ひ申す。

武太夫

必ず共に御心配なく、武士の情は相身互ひと申すもの。

紋三

袖振合はすも他生の御縁。

武太夫

以後は別戀。

兩人

申し談ずるでござらう。

(ト兩人宜しくあつて、武太夫三人に向ひ、)

武太夫

御身達も災難とは申し乍ら、

よいお人がござつた故、恥かしめを受けぬは此方衆の仕合せと申すもの。此場は拙者が引受ければ安堵して歸らるゝが宜しうござる。

お常

有りがたう存じます。どう

なる事と存じましたに、よい所へ

お侍様がおいでなされまして、此様なお嬉しい事はござりませぬ。

宗助 下郎も安堵致しましてござります。

綱 此上ともに貴方様。宜しくお頼み申します。

(ト武太夫へ一禮をなす。武太夫承知ちやと頷き。)

武太夫 イヤ何、紋三殿、其許には御浪人と承り、チトお願ひの儀がござるが、何とお聞濟み下されまするかな。

紋三 コハ改めし貴殿の御詞。何が扱、今の大恩、某身に叶ひし儀なれば。

武太夫 御得心下さるか。

紋三 如何にも承知致してござる。

(ト合方替つて、武太夫思入れあつて。)

武太夫 其お頼みとは餘の儀にござらぬ。

拙者が主人大江因幡之介へ御推舉申したいが御仕官は下さるまいか。

(ト是を聞き紋三も思入れあつて。)

紋三 ハ、御親切なる其御詞。御恩の上に重なる御恩。數ならぬ身を左程迄有りがたき貴殿の御推舉。拙者身にとり何程か大慶至極に存じまする。

武太夫 スリヤ御得心下さるとな。

紋三 寄るべ頼りもござらぬ拙者、偏にお世話頼み存ずる。

武太夫 早速の御得心。拙者に於いても祝着至極、幸ひ今日若殿當社入

幡宮へ御參詣。唯今別當所にて御休息なれば、善は急げ、是より直

に御同道仕らん。御目見え致され

よ。

紋三 御前宜しうお取做し。然し御覽の如く、亂髪らんぴんゆゑ上への恐れ。

武太夫 其儀は心配召さるゝな。髪取上る者もござれば、別當方にて何かの支度を。

紋三 何から何迄、貴殿の御厚志。萬事宜しう頼み存ずる。

(ト武太夫紋三立上り、紋三身纏ひしてゐる。娘並にお常宗助思入れ。)

娘 此處に父様ととがおいでなされたら、今日のお世話を御縁としてこちらのお屋敷へ御取持ち致さうもの。

お常 ホンニお残り多い事でござりまする。

(ト兩人本意ほんいなき思入れ。宗助思入れあつて。)

宗助 ア、是が。所謂縁無き衆生。

紋三 武太夫殿。

お常

サア／＼お嬢様。日のたけぬ

扱、お侍様。今日は段々とお世話

武太夫 イザ御同道仕らう。

中、お早うお歸り遊ばされませ。

様に預りました。これより屋敷へ

(ト唄になり、武太夫先に紋三中間附き、上手へ入る。後、合方、時の鐘。嬢うつとり

(ト嬢矢張り見送り居るゆゑ、お常宗助氣遣ひの思入れにて、嬢の手をとり、)

歸りまして、仔細を主人へ物語り、

と紋三を見送りゐる。宗助は腕を手拭にて結びゐる。お常は嬢へ思入れ。)

何れお禮に參上致すでござりませ

是はしたり、早うお歸りなさりませぬかいなア。

う。

紋三 イヤ／＼決して夫には及び申

お常 ホンニもう、御心立なら、殿

嬢 エ、モ、忙^せしない。今行くわいなう。

さぬ。日暮れぬ中に少しも早う歸

お常 振りまで。

なう。

らるゝがようござる。

嬢 よい殿御ではないかいなう。

(ト早い合方になり、お常嬢をせり立て乍ら、宗助附き向うへ入る。矢張り早く右の合方にて、向うより親仁佐五兵衛、世話形股引草履。無器用に頬被りをして、直に舞臺へ来る。上手より以前の求女出て來り、双方行當り、悔りなし。)

宗助 ヘイ／＼御詞に随ひまして、

此時、宗助真中へ出て、)

此儘お別れ申しませう。

何と御意遊ばします。

親仁 是は／＼、御免下さりませ。

(ト三人宜しく一禮なし立上る。嬢は紋三へ思入れあつて、)

お常 イ、エイナ。殿様がお案じて

チト考へ事を致し乍ら歩きましたゆゑ、不調法致しました。眞平御免なされませ。

(トお常心附き、)

(ト兩人顔見合せ、)

嬢 とはいへ、彼方^{あな}へま一度御禮を。

お常

チト考へ事を致し乍ら歩きましたゆゑ、不調法致しました。眞平御免なされませ。

(ト嬢は紋三の方へ行くを、)

あらうと申しますすいなア。

宗助

お常 ア、モシ。

宗助 ホンにさうでござります。殿

様も奥様もさぞお待兼ねでござりませう。

(ト歸てゐる。武太夫こなしあつて、)

武太夫

様も奥様もさぞお待兼ねでござりませう。

武太夫 さ様でござらば、紋三殿。

ませう。

(ト兩人顔見合せ、)

求女 ヤ、お前は父様ではござりま

せぬか。

親仁 ヲ、そちは稱名寺にお預け申

した忤喜之介。やれ／＼久しう逢

はぬが、變る事はなくてめでたい

／＼

求女 お前も何時も御達者でお目出

度うござりまする。それはさう

と、父さん、今承れば考へ事をし

てお歩きなさるとの事。何を苦勞

な事ではござりませんか。

親仁 イヤ何も案じる程の事ではな

い。何はともあれ、こゝへ掛けや

れ。(ト兩人有合ふ物へ腰を掛ける。合方に

なり。) 扱、われも知つての通り、

そちが母が長の煩ひ、貧乏暮しに

仕方無く、其方を不斷花の御得意

稱名寺様へお願ひ申し、又娘のお

小夜は大磯の廊へ質にやり、一月

たつて請戻さう二月たつてと朝夕

に、身貧な中でも夫ばかり、苦勞

にしてゐる其中に、ツイ婆が往生

して、請ける事もならぬ仕儀。ツ

イ夫なりにて今では女郎。而も扇

屋の内十六夜とかいうて随分相

應に客もあるさうなわい。

求女 夫は宜しうござりまする。私

も姉さんにお別れ申し、其後は、

互ひに奉公の身の上ゆゑ、問音信

も致しませぬが、變る事もござり

ませぬか。

親仁 別に變る事もないが、姉の客

に極樂寺の僧侶清心殿といふが深

いなじふ。阿古義が浦に引續て、

度重つて、何時か顯はれ、ツイ女

犯の其科で入牢さつしやつて永の

糺明、聞けば明日は赦免との事。

是まで姉を始め繋がる縁とてわし

に迄、心附けして下された清心殿

ゆゑ、せめてもの御恩返し、金拵

へて御追放の身の置處をと思へど

も、身貧な中で出来ぬは金、どうし

たものと昨日からふつら／＼と歩

いてるれど、扱借りる富もなし眞

に當惑してゐるわい。

(ト求女これをきき、さつきの金があつた

なら、よかつたといふ思入れ。)

求女 シテ其お金はどの位あればよ

いのでござりまする。

親仁 そりや、先から呉れといふの

ではなし、こちらの志で上げるのだ

から、例へば五十兩でも、又五兩

でも志は同じ事ぢや。

求女 どうか都合してあげたいけれ

ど、我身^{わみみ}通^とも才覺^{さいかく}の當^{あた}りなし。ア
ア斯^あういふ事と知るならば、最前
のあのお金^{かね}戻^{もど}さずに置いたなら、
今の役に立たうもの。今更^{いま}呉^{くれ}れと
行^いかれもせず。ア、困^こつたものぢ
やなア。

（ト獨^{ひとり}ごとの様にいふ。兩人^{ふたり}富^ふ惑^{わく}の思入^{しりぞ}
れ。）

親仁^{おんな} 何を云うてももう明日^{あす}の事。

おれも詮^{しる}方^{かた}盡^{つく}きた故^{ゆゑ}、姉^{あね}の所へ相
談^{だん}に往^いたれ共、是^{こゝ}通^とも勤^{しん}の身、今
が今に都合も出來^きず。然^{しか}し、穢^けれ
た著^{ちやく}物をば、お着^{ちやく}替^かへさせ申^{まう}さん
と、着^きる物だけは姉^{あね}の方^{かた}から寄^よし
ました。是^{こゝ}が一つ、安堵^{あんど}ぢやわい
の。

求女^{もとめ} 何に致^{いた}せ、清心^{しやうしん}様、御尊^{ごそん}には聞
いてゐれど、未^いだ御目^{ごめ}にも懸^からず、

御氣^{ごき}の毒^{どく}なる御身^{ごみ}の上、姉^{あね}様ゆゑ
の御難^{ごなん}澁^{しぶ}、係^{けい}りや繫^けがる弟^{てい}の私^{わたし}、
どうかして明日^{あす}迄^{まで}に、金^{かね}拵^ぢらへて
進^{しん}ぜたいものぢやなア。（ト思案^{しあん}のこ
なし。）

親仁^{おんな} 思^{おも}ひ餘^{あま}つて金^{かね}の才覺^{さいかく}、われ迄
に苦勞^{くろう}をかけ年^{とし}效^{こう}もない親^{おんな}ぢやと
必^{かならず}ず恨^{にく}んでくれるなよ。

（ト涙^{なみだ}乍^{はな}らにいふ。求女^{もとめ}も落涙^{らくなみだ}の思入^{しりぞ}れ。）
求女^{もとめ} 勿^な體^{たい}ない事^{こと}仰^{おほ}つしやりませ。

たつた一人の親仁^{おんな}様、貴^{あなた}方^{かた}ばかり
に御苦勞^{ごくろう}させ、御病氣^{ごびやうき}でも出^でまし
てはなりませぬ。どうか明日^{あす}迄^{まで}都
合^{ごう}が出來^きましたら内^{うち}へ持^もつて參^{まゐ}じ
ませう。

親仁^{おんな} 何の出來^きずとも大^{だい}事^じない。此
様^{やう}な苦勞^{くろう}をして、われこそ煩^{わづ}うて
はならぬぞよ。

求女^{もとめ} イエ、煩^{わづ}ふ事^{こと}ではござりま
せぬ。（ト求女^{もとめ}立^た上^あり。）さやうなれば
父^{ちち}様、明日^{あす}迄^{まで}には何^{なん}れ御返^{ごへん}事^じ致^{いた}
ませう。

親仁^{おんな} ヲ、われももう行くか。

求女^{もとめ} ハイ、是^{こゝ}てお別^{わか}れ申^{まう}しまする。

親仁^{おんな} 隨^{したが}つ御奉^{ごほう}公^{こう}大^{だい}事^じにせいよ。

求女^{もとめ} 有^ありがたうござりまする。

（ト求女^{もとめ}向^{むか}うへ入^いる。親仁^{おんな}は跡^{あと}見^み送り思入^{しりぞ}
れあつて。）

親仁^{おんな} ア、苦^{くる}の娑婆^{さば}とはよういうた
ものぢや。娘^{むすめ}が縁^{ゆかり}で清心^{しやうしん}様の難儀^{なんぎ}
をお助^{たす}け申^{まう}さうと、才覺^{さいかく}の話をば
ふつと話せば、弟^{てい}めが年端^{ねは}も行^いか
ぬに苦勞^{くろう}をして、出來^きぬ乍^{はな}ら案^{あん}じ
をるとは、親^{おんな}は泣^なき寄^より、ア、つま
らぬ事をいふ中に、もう日暮^{ひぐし}も近
し。又^{また}日が暮^くれると物騒^{ものさわ}な。（ト思

入れあつて立上り、)アどうか金か。

(ト時の鐘、風呂敷包を背負ひ乍らよろよろとなる。)

もう入相ぢやさうな。

(ト親に宜しく思入れあつて時の鐘の送りにて、此道具廻る。)

本舞臺三間、常足の二重。後合簾、前側簾、
脇間、上下杉戸。二重真中に幕明の因幡之介、番を數き脇息に掛り、左右幕明の盛藏主水中通近習二人竝上下に別れ、後に腰元四人控へ、平舞臺上の方に願齋、下手に以前の武太夫、此次に紋三控へ居る。すべて鎌倉八幡別當所上段の間の模様。誂への合方にて此道具留る。

主水 ハツ唯今申上げまする通り、

武太夫が推舉召されし八重垣流の

遣ひ手、御指南番にはよき御家來。

御引合せの仕りまする。

(ト平伏する。因幡之助紋三を見て、)

因幡 萬卒は得安く一將は得難し。

武太夫が推舉の浪士八重垣紋三と

やら、不足にも思はんが三百石に

て予が家來に召抱へん。

紋三 ハ、不肖なる拙者め、冥加至

極、有難く頂戴仕りまする。(ト平伏

する。)

因幡 早速乍ら過分く。予も満足

に思ふぞ。

主水 ハ、ハツ、幸ひ君の御慰み。紋

三殿。此場に於いて一試合、手練

の程を御覽に入れられよ。

紋三 ハツ。拙き武術に候へども御

奉公の手始め、未熟の一ト手御覽

に入れるでござりませう。

主水 誰かある。奉納の竹刀を是へ。

近習 ハツ。(ト竹刀を持來り、よき所へ置

き、控へる。)

因幡 こりや一興ぢや。然し紋三が

相手には誰が宜しからうな。(ト邊

りを見廻り、盛藏を見て、)それに居る牛

窪臺藏。是なる紋三と立合ひ致

せ。

(ト盛藏迷惑なるこなしにて、)

盛藏 仰せ畏つてはござれども、此

程よりの雪より、疝癪に腰が引つ

り、チト試合は致し難うござれど

も、若殿の御意故相手には罷りな

るが、もし負けても何れも方、必

ず共にお笑ひあるな。身共が負け

るのではござらぬ。疝氣めが負け

るのでござるぞ。

(トいひ乍ら前へ出る。腰元盛藏を見て、)

腰元〇 日頃からの高慢にお似合ひに

ならぬ臺藏様。

腰元△ 強さうなお顔をしてお卑怯な

其お詞。

一禮なし、

腰元□ 御自分のお弱いのをとり置い

紋三 イザ、

て、

腰元× 御病氣のせいになさるゝと

兩人 イザくくく

は、

四人 笑止な事でござんすわいな

ア。

臺藏 イヤく拙者が弱いのではござらぬ。全く病の業でござる。其

臺三 ア、参つたく。何れも是は

證據には腰が震へてなりませぬ。

何ぞ薬はないかく。

(トふるく震ふ。順齋見て)

順齋 臺藏殿。貴殿のは疝氣ではござらぬ。そりや持前の中氣でござる。

順齋 承知仕つた。愚老採んで進ぜませう。(ト順齋、臺藏の腰をもみく)

こゝでござるか。

る。

臺藏 そこでござるく。其疝氣め

何を馬鹿な。(ト順齋をにらむ。)

が負けたのでござる。

主水 双方共に仕度を召され。

(ト兩人をかしま宜しくあつて控へる。)

紋三 畏つてござりまする。

因幡 天晴なる紋三が手の内、此上

(ト白嚙子になり、兩人身拵へなし、互に

は誰を相手にしたものぢやな。

近習 ハツ。

(ト主水へ思入れ。主水こなしあつて、)

主水 紋三と立會ひ致す者、御家來

多き其中に蔭山氏の御子息繁之丞

殿、武術の名譽と家來の取沙汰。

侍) いか様、御若年にはござれど

も、先生のお仕込み。

侍△ 仲々もつて吾々共の及ばぬ

事。

侍□ 紋三殿と繁之丞殿の御手合せ

は、

侍× 若殿様にも一段のお慰みにござりますせう。

因幡

主水 今日御祈念の終る迄御名代として神前にて奉幣の御役目。

因幡 誰かある。繁之丞を是へと申

せ。

因幡

(ト立ちかゝる。此時向うにて。)

繁之丞 アイヤお召しに及ばぬ。蔭山
繁之丞、只今それへ。

(ト談へる鳴物になり、向うより繁之丞袖
衣裳大小にて出て、花道に平伏なし。)

我君の御召しに應じ、何れも方の
其中へ未熟な身をも願ふす、斯く
有難き御目見え。猶此末共に親共
同様。何れも様の御引立、偏に願
上げ奉りまする。

(ト始終本舞臺と見物へ思入れあつて。)

因幡 苦しい。近うノ。

近習 四人 若殿のお召し、急いで是へ。

繁之丞 眞平、御免下さりませ。

(ト右鳴物にて繁之丞本舞臺へ来り、宜し
くすまふ。鳴物打上げ合方になり。)

因幡 只今其方を呼出せしは餘の儀
でない。是なる紋三と其方とはよ
き手合せと存ずる故、予が所望致

す。此處にて立會つて見せやれ。

繁之丞 ハツ。御意に忤るは恐入れど、
未だ若年の某、歴々の御相手等と
は思ひもよらず。此儀只管御高免
なし下されませう。

紋三 御辭退召さるは繁之丞殿にも

御疵續でござるか。兎角疵續がは
やりまする。御大事になさるがよ
くござる。

因幡 疵續なれば愚老が得手物。搦

んではつて卽座に癒す長崎一流桂
庵散膏藥。(ト大きくいふ。)

因幡 兩人控へい。

因幡 齋藏 ハツ

(ト兩人控へる。武太夫思入れあつて。)

主水 イヤ何、繁之丞殿。辭退は却
つて不忠の本、勝つも負くるも時
の運、若殿の御意でござれば立會

ひ召されい。

繁之丞 強ての御所望背くは御不興。
御免を蒙り御相手仕るでござりま
せう。

主水 それ。双方共に支度召され。

紋三 繁之丞 ハツ。

(ト平伏する。白簾子になり、兩人身控へ
して、紋三繁之丞前へ出て、兩人思入れあ
つて。)

繁之丞 是は紋三殿とやら、始め
て御意得申す。某事は蔭山武太夫
が忤、同苗繁之丞と申す未熟者。
御禮古願ひ奉る。

紋三 拙者事は御親父蔭山氏の御推
舉にてお抱へに相なりし八重垣紋
三と申す者、御見知りおかれ下さ
れませう。

(ト兩人、一體宜しくあつて。)

然し是は私の御撈撈。其許様にも

御猶豫なく、

繁之丞 いふにや及ぶ。

紋三 イザ。

繁之丞 イザ。

兩人 イザくく。

(ト兩人竹刀を取上げ、双方へ別れてキツト見え。三味線入り白襦子になり、兩人宜しく立廻りあつて紋三わざと竹刀を打落され、たじろぐ所を繁之丞紋三を打つ。皆々見て。)

因幡 繁之丞出かすく。

皆々 イヤお手柄く。

繁之丞 時の拍子に、思はずも拙者が勝を得ましたは面目もござりませぬ。

(ト平伏する。此時武太夫、ツカくーと立つて繁之丞を引附け、扇にて散々に打ち、突放す。繁之丞キツト居直り。)

こりや父上には何故の御折檻。

武太夫 何故とは狼狽者。唯今の勝利、

誠の勝と思ひをるか。紋三殿には

我忤と聞き、勝を譲りし太刀筋に

心も附かず、打つといふは、言ふ

やうなきうつけもの。さやうな狼

狽へた根性にて、君のお役に立た

うと思ふか。アノ爰な大たわけめ

が。(トキツといふ。)

繁之丞 重々の不調法、恐入りまして

ござりまする。

武太夫 以後をきつと寤みをらうぞ。

(ト此中、紋三思入れあつて。)

紋三 アイヤ武太夫殿。さに非ず。

中々以て御子息の武術我々如き

及ばぬ所。流石は蔭山氏の御仕込

み。御若年の御手の内には恐入つ

てござる。

(ト之をきき、因幡之介感心のこなし。)

因幡 ホ、フ、互に誇らぬ兩人が心

底。末頼もしきよき家來。こりや

主水。差占したれど予が差替。兩

人へ褒美に取らせい。

近習 ハツ

(ト大小を持来る。因幡之介取つて。)

因幡 刀は紋三、差添は繁之丞へ、

當座の褒美。

(ト主水取次ぎ。)

主水 我君よりの御賜物、有難く頂

戴召され。(ト兩人へ渡す。)

武太夫 是はく存じよらざる君の御

褒美。

紋三 仰せは重き賜物。

繁之丞 冥加に餘る身の仕合せ。

武太夫 推舉致せし拙者迄、

紋三 有難く頂戴、

三人 仕りまする。

(ト三人宜しくあつて控へる。因幡之介思入れあつて)

因幡

聞けば、武太夫には娘ある由。

未だ目通りは致さね共、似合相應のよき縁談。是なる紋三の妻となし、永く一家の因みを結んでよからう。

武太夫

こは有難き御意。拙者めも先刻より斯くと存じをつたる所、お許し蒙り大慶至極に存じ奉る。

臺藏

家中一同噂の高きお柳殿、女房とはハテ羨ましい儀でござる。

(ト少し腹の立つ思入れ。)

順齋

ヤレ／＼牛窪殿が誕をたら

し、見込んでござるお柳殿、今日から紋三殿の御内儀とは。アよい男には生れたいなア。(ト順齋眞面目にいふ。)

因幡

主水は我に替り媒介の致し遣

はせ。

主水

畏りてござりまする。

紋三

重々のお恵み、有難う存じま

する。

近習
四人

紋三殿。御意でござる。

因幡

ホ、ヲ美事。

紋三

ハツ。

(ト平伏する。武太夫扇を開く。双方一時に木の頭。)

武太夫 イヤお手柄／＼。

(ト武太夫扇にてあふぐ。臺藏落ちたる竹刀を取上げ、紋三へ打つて行くを、繁之丞

臺藏を手早く突廻しキツト留める。因幡之介は喘息にもたれ、皆々紋三の體を見て感心のこなし。此見え談への喝物にて、)

よろしく幕

第一番目四立目

由井ヶ濱の場
稻瀬川の場

(花街模様薙色縫の序幕なり。略す。)

小袖曾我薊色縫

第一番目五立目

八重垣新宅の場

大江家馬場の場

同堀外の場

一妻木逸之進

小園次

一鬼坊主清吉

一蔭山武太夫

三十郎

一八重垣紋三

權十郎

一蔭山繁之丞

訥升

一夜蕎麥賣仁八

又太郎

一醫者古池順齋

村右衛門

一妻木の若徒宗助

國太郎

一塚本主水

橘之助

一蔭山の若徒國平

國之助

一

一武太夫娘お柳

桑三郎

一妻木腰元お常

市之丞

一逸之進娘お雪

歌女之丞

一家中娘おせき

三之助

一同 おなか

武次郎

一

本舞臺三間、常足の二重。向う中形の襖、上手一間障子屋敷。下手建仁寺垣、いつもの門口八重垣紋三と云ふ表札。纏べて大江家中の體、爰に醫者の順齋、家中の娘おさんおたけ兩人、鏡子へ女戲男聲を附けて居る。若徒の三平控へ居る。移唄、通り神樂にて参明く。

順齋 これは大關氏岩島氏の御息女達。今日は當家御婚姻の御手傳ひ御苦勞でござる。

おさん 何の御役にも立ませぬけれど、日頃からお仲のよいお柳様の御婚禮、私共もあやかりますやうお酌を致しますのでござります。

おたけ 昨日俄に殿様へ御仕官なされた八重垣紋三様、御上より御指圖にての御縁組。

三平 イヤもう御新宅開きやら、御婚禮やら、私獨りで打つたり舞つたり、御二人様で御手傳ひ下されますのでやう／＼仕度が出来ましてござります。

順齋 是が即ち町家で申す引越女房。壁に馬を乗かへた婚姻、花婿の紋三殿は當時御家中で並ぶ者なき男振といひ、殊に八重垣流の達人、よい聲をまうけられ、武太夫殿はお仕合せ、お柳殿は尙仕合せ。定めし朝も晩もひとつにひつ付き、ちん／＼かもの入れ首出し首、紋三殿の顔の細るが見える様でござる。

おんなの様な美しい殿御のお嫁に
おなりなさるお柳さんは、ほんに
御運のよいお方。

おたけ 御祝言をなされましたら、嗚
やお仲もよろしからうと、誠に
羨しう存じます。

三平 皆様仰つしやう通り、其當
座敷も簾筋の鏡がなる、と申す古
い川柳點にある通り、思ひやられ
た事でござります。

蘭麝 イヤ、愚老も若い時、妻を呼
びました節は、此肥りました顔か
ほつそりとなり、顎で蠅を追ひま
したが、齡をとるにしたがひ、肥
え肥りまして、腹がかやうにふく
れて居るから、自分の前のものは
遂に見た事がござらぬ。ハ、ハ、ハ、。

おさん 順齋様の御戯談ばかり。

おたけ ほんにをかしいお方でござり
ますな。

蘭麝 シテ、武太夫殿は最早お出で
なされたかな。

三平 藤山様は御子息繁之丞様塚本
主水様御同道で、押附けお出で
ござります。

目 下眼になり、通り曲衆にて向うより三立
目 一般藤山御主人御様太夫、繁之丞様主
水同様に御様太夫、中間附き来り、直に舞
臺へ上り、

武太夫 頼まう。藤山武太夫でござる。

(ト三平、門口をあけ、)

三平 これは藤山様。先刻より主人

の御待兼ね。まあ、御通りなさ
れませ。

武太夫 サ、塚本どの。

主水 まづ、其許から。

武太夫 然らば御免下され。

(ト台方にて、武太夫に兩人付き上手へ通
る。中間は下手へはひる。衆より主人女中
お源補檔にて出で、よき所にすまふ。)

お源 これは、武太夫様。只今お
出でござりまするか、今日はお
日柄も宜しく御目出度く存じま
す。

武太夫 これは塚本氏の御内室、此度
は娘事を御親切に御世話下され、
御蔭にて今日の婚姻、大慶に存じ
ます。扱、順齋老にも何かと御世
話下され、忝う存ずる。俾、よう
御禮を申しやれ。

繁之丞 古池様。此度姉の婚姻に付き
色々御世話下され千萬有難う存じ
ます。

蘭麝 これは、痛み入る御挨拶。

サお手上のれい。扱、萬端滞

りなく今日の婚姻、貴殿にも無満足にござりませう。また塚本殿には御役目御苦勞に存じまする。

主水 是は御挨拶、身不肖なる某、

有難い主君の嚴命、殿の御名代として媒介なかつだの役目仰付けられ、冥加

至極もない仕合せ。

お源 不調法がちな私共、殿様の

御指圖にて身に餘りましたる今日の役目、御免なされて下さりませ。

おたけ 數ならぬ私共が、待女郎やら

介添やら。

おさん 俄の事故不束があら、藤山様、

お柳さまの御婚禮さぞお嬉しうござりませう。

武太夫 イヤモ、御察し下され。昨

日今日迄乳母に抱かれ居つた娘が嫁入り、塚本氏の御内室の御世話

にて鐵漿かたをつけました上は、見運ひる様になりませう、畢竟娘がござればこそ八重垣紋三といふよい件を設け、我片腕に、(ト云わく、思入れ。)イヤ持つべき者は子でござるて。

順齋 武太夫殿の仰せられる通り子

供の成人は早いもの、お柳殿の小

さい時愚老がだつこ致し、度々膝

の上へしいをなされたて、其上ア

ノ可愛らしい頬べたを愚老がペチ

ヤ／＼となめれば、又愚老がふく

れた所をお柳殿がなめられ、あち

らでもこちらでもペチヤ／＼とな

め合つた事がござつた。ハ、ハ、ハ。

お源 順齋様。其様な事を仰しやり

ますな。お柳さんがお聞きなされ

たら咄お恥かしうござりませう。

おさん 左様でござります。誰しも小さい時の事を申される程、恥かしい事はござりませぬわいなア。

繁之丞 それは格別、親人奥へお出で

なされ、御用意なされませぬか。

武太夫 いかさま、紋三殿に面談致さ

う。然らば塚本殿御夫婦。

主水 御同道致すでござりませう。

お源 左様なれば何れもさま。

武太夫 然らば順齋老。

順齋 ドレ御案内致さう。

(ト唄になり、此人歌奥へはひる。三平、

そこら片付けて居る。番唄通り神樂にて、

向うより妻木過之進、ふけたる袴へ、羽折袴大小同じく短お雪下女お常若徒宗助、何

れも三立目の形、進物の風呂敷包を持ち、

出て来り。)

過之進 只今宗助に門番で聞かせたれ

ば、八重垣の宅は新しい長屋の

門ぢやと申したから、大方向うで

あらう。

お常 左様でござります。モシお雪

さま。噺お嬉しうござりませうな

ア。

お雪 是が嬉しうなうて。早う御目

に掛りたいわいなう。

宗助 紋三様にお會ひなされました

上は、たと御禮を仰しやりま

せ。

過之進 サア／＼來やれ／＼。

(ト右鳴物にて四人舞臺へ入り)

宗助。案内いたせ。

宗助 ハイ／＼、畏りました。(ト宗助

門口へ来て) お願ひ申します／＼。

三平 どうれ。どちらからござりま

した。

(ト三平門口を明ける。)

宗助 八重垣紋三様は御在宿でござ

りますか。

三平 在宿でござりますが、取込ん

で居るが何御用でござります。

(ト過之進門口へ来て)

過之進 イヤ苦しくない者、手前は稻

毛の藩中でござるが、一昨日鶴ケ

岡にて是なる娘が難儀致すを、八

重垣氏に助けられたる其御禮に參

つたと取次いで下され。

三平 畏りました。左様なら先づこ

ちらへ御通りなされまし。

過之進 然らば許さつしやれ。

(ト右合万過之進お雪お常付きよき所へ通

る。宗助下手へすまふ。三平煙草盆を出し、)

三平 只今御取次致します。然らば

おまちなされまし。

(ト三平奥へはひる。皆々捨臺詞、矢張合

方にて、奥より八重垣紋三様着流し大小を持ち、三平茶臺に茶碗をのせて、銘々へ出す。紋三様々を見て)

紋三 家來に様子承りましてござる

が、稻毛公の御藩中の御方とのよ

し。見苦しき宅へようこそ御出來

にござります。

過之進 左様なら其許様が八重垣紋三

殿でござるか。拙者儀は妻木逸之

進と申すもの始めて御意得申すで

ござる。

紋三 某事は八重垣紋三と申す。俄

に大江家へ召出されましたる未熟

者、御見しり置かれ下されませ

う。

過之進 以後は入魂に頼み存る。扱、

一昨日鶴ケ岡にて娘雪女が難儀の

場所へ御出て下され、娘が災難を

御救ひ下されしよし、宅へ歸り委

細の吹聴。娘が爲に命の親の入重

垣氏、ア、忝う存る。コリヤ、

娘、どう致した物だ。身共にばか

り禮をいはず、紋三殿の顔を見て

居らずと、ちやつと御禮申さぬか。

コリヤ常。そちも御禮を申せ。エ

エ宗助。氣の附かぬ。其方も御禮

を云はぬか。ハテ扱世話のやける

事ぢや、ア、口がすくなる。コレ

お家來衆。どうぞ茶をモウ一ツ下

され。

三平 かしこまりました。(ト三平茶を

くんで出る。)

お雪 父様とて、おやが其様に仰しやらずと、

御禮申さいでなりませうか。私が

恥かしめを受けます難儀をお助け

下されました、何と御禮を申さう

やら、有難う存じます。

お常 お雪様が仰しやります通り、

一昨日の御恩の程、中々口先で御

禮は申し盡されませぬ。

宗助 危うい所へあなたがおいで下

されまして、惡者めらを投げたり

擲はなつたり、ひどい目に合せて下さ

れまして、お嬢様の爲には命の親

のあなたさま。

三人 エ、有難う存じます。

紋三 是は、逸之進殿を始め、

御息女御家來迄其様に仰せられて

は、拙者甚だ迷惑仕る。御手をお

上げ下され。

逸之進 聞きしに増る紋三殿の人品骨

柄、其上御手練の様子承り、誠に感

心致してござる。コリヤ宗助。其

品を是へ出しやれ。

宗助 ハイ、申し御家來衆。ど

うぞ廣蓋をお貸し下されい。

三平 畏りました。

(ト三平廣蓋を出す。宗助風行駄より反物

の進物を出し、廣蓋へのせ、逸之進の前へ

出す。)

逸之進 紋三殿。何か生魚と存じたれ

ど、折惡しく有合はさず、此品は

餘り些少にはござれ共、ほんの御

禮の印、御受納下されば有難う存

ずる。(ト紋三の前へ出す。)

紋三 是は又、恐入りましたお詞。

畢意通り掛かりにて、御息女の御

難儀見るに忍はず、狼籍者を支さへ

ましたばかり。かやうにお禮を受

けましては、甚だ痛み入ります。

受けましたも同前にござりますれ

ば、此儘お納め下され。

逸之進 イヤ／＼、さ様仰せられた通り、

は下さるまいか。

拙者と様かと持つて立たれもされぬ。ほんの拙者が心ばかり。平にお請け下され。

お常 只今主人が申します通り、誠

逸之進 開届け下さるか。

にお粗末にはござりますれど、折

紋三 シテその御頼みと申すは。

角の志、どうぞお受け遊ばして下さりませうならば、

逸之進 頼みと申すは外でもござらぬ。

宗助 わたくし共迄、へい／＼、

ぬ。コリヤ娘。是へ來やれ。

兩人 有難うぞんじます。

お雪 ハイ。(ト恥かしきうに傍へ来る。)

紋三 それ程迄に仰せられる事、強つてと申すも却つて失禮、然らば

逸之進 紋三殿。頼みと申すは是なる娘が事でござる。

受納致すてござりませう。千萬忝う存じます。(ト廣鑒を片寄せる。)

紋三 何。御息女の事と仰せらるゝは。

逸之進 然らばお受け下さるか。忝い

逸之進 サア、恥を申さねば相分らぬ。

／＼。扱、紋三殿。か様にお禮を申した上、チトそこ許にお頼み申上ぐる儀が、ござるか何と聞届けて

一ト通り御聞き下され。手前事は稲毛殿より五百石頂戴致し相勤め居りまするが、此雪女が上に兄も

姉もござつたなれ共、幼少にて相

果てそれより年たちまして、是な

る娘が出生致し、下世話に申すお

薬湯子とやら。年寄りましての血

の餘り、此雪女が可愛うて／＼相

成りませぬ。承ればそこ許には未

だ御獨り身との事、差附けがまし

き事乍ら、氣儘育ちの不束者。定

めし御氣には叶ふまいが、娘雪女

を貴殿の妻女に遺し度うござる

が、どうぞ末々迄不便をかけて下

さらば、老の喜び、頼みと申すは

此通り、何と聞届けては下さるまいか。

(ト思入れにて言ふ。お雪恥かしき思入れ。お常宗助も傍らから頼む思入れ。紋三迷惑なる思入れ。)

紋三

逸之進殿の御頼みの仔細、身

宗助 アノ紋三様と、

過之進 祝言を、

四人 なさるとな。

敏三 甚だ以て各々方には氣の毒千

萬な儀でござります。

(ト過之進投首して思入れ。)

過之進 娘、聞いたか。紋三殿は主人

の上意にて、當家へ推擧の蔭山氏

の息女と縁組のきまりし上は、是

非もなしと思ひ、諦い。

(トお雪泣く。過之進目をしばたき。)

返答せぬは諦められぬか。ヲ、尤

ぢや。そちより此親が残念な

はいか斗り。そちが不慮の災難が

想ひとなり、器量發明武術の達人

の紋三殿、よい聲を取りましたと

自慢せうと思ひの外、誰しも替ら

ぬ親心、武太夫殿の娘御と縁組有

不肖なる某をさ程に思召し下さる

段、いかばかり忝う存じますれど、

餘の事ならばともかくも此儀ばか

りは。

過之進 スリヤ不束な娘ゆゑ、妻女に

持つては下さらぬか。

敏三 中々以て、さ様な儀ではござ

らぬが、御息女を婦妻に申受けら

れぬと申すには、據所無き仔細が

ござる。

過之進 シテ餘儀ない仔細と仰せられ

るは。

敏三 承引ならざる事の次第、御親

子共にお聞き下され。

(ト替つた合方。)

一昨日鶴ヶ岡にて御息女の難儀を

救ひし所、鎌倉眠近の侍共、某へ

狼籍なすゆゑ是非に及ばず、其場

にて四人の侍を仕止めし折から、

大江因幡之介殿は入幡宮へ社參に

て、御供に附添ふ普代の家老蔭山

武太夫殿の御目に留り、直様某を

大江家へ推擧下され、三百石に取

立てられ、其上殿の御差圖にて蔭

山氏の一人の娘を拙者の婦妻に致

せよとの上意を蒙り、即ち今日吉

と有つて、只今婚姻致す所、夫ゆ

ゑ其許の御息女を申受けざる仔細

と申すは、斯くの通りでござりま

す。

(ト思入れにて替ふ。過之進替々定を聞き
本意なく思入れ。過之進ホット溜息つき。)

過之進 スリヤ何と申さるゝ。當家の

家老蔭山氏の娘御を、

お雪 殿さまよりの御媒にて、

お常 もはや今日此處で、

りしは天晴手柄、親でさへ羨ましいもの。そちが心を思ひやる。無い縁と諦めて、ふつつりと思ひ切れ。よよ。

(ト思入れにて。お雪思入れ。)

お雪 不束なる私ゆゑ御氣に入るまいと思ひ乍ら、父様の御情で添はせてやらうとの御詞に、押附け業の嫁入を楽しみに來た甲斐も無く、蔭山様の御娘ご様と御祝言なさるゝと聞いて、どうして思切られませう。内へ戻つて此儘にこがれ死にをするわいなア。(トはつと泣く。)

お常 御尤でござります。御道理でござります。御心立なら御器量なら、優しい紋三様。御獨り身ぢやと聞いたゆゑ、旦那様へお勧め申

し、お雪様の聲君と思ひの外、餘儀なき譯で御縁組が叶はぬとは、あなたの御心の内がおいたわしう存じます。

宗助 さうぢや。此親爺めでさ

へがつかりと力が抜け、くやしくつてくになりませぬ。大事のお嬢様の先を越しをつた蔭山の助平娘。此齒が達者で有つたならば喰附いてやりていなア。

お雪 二人乍ら、もう何にもいつてくやんな。聞けば聞く程此胸がさけるやうぢやわいなア。

(トはつと泣く。お常背中をさする。)

お常 是はしたり、娘を始めそち達迄、めろく何事ぢや。此方とはあれ、當家は目出たい祝儀の場處に泪は不吉ぢやぞ。サア

目出度う笑うて立ちやれ。

お雪 そんならモウ戻らねばならぬかいなア。

お常 ハテ、しれた事。長居した迎

せんない事ぢや。サア立て。

お雪 夫ぢやというてお名残り惜しうて。

(トハアと泣く。紋三氣の毒なる思入れ、邊之進見て。)

邊之進 ヲ、尤ぢや。(ト立たうとし

て。)何の名残り惜しい事があるものか。紋三殿斗りが男ではない、鎌倉中によい男はいくらもある。

サア泣かずと立ちやれ。

お常 お雪様。旦那さまがあのように御氣をもんでお出でなされますれば、なア宗助どの。

宗助 それ。此處の内へ面當に

立派な聲様を親爺めが探して上げ

ます。サアちやつとお歸りなされ

／＼。

過之進 コレ宗助。いかなる事し歸る

と申すは祝言の忌詞ぢや。

お常 旦那さまとなされた事が。よ

そ外の祝言に何のかまふ事がござ

りませう。

宗助 さうぢや／＼。あはれ散らし

て歸るぞ／＼。(ト宗助足音させて門口

へ出る。)

三平 是はどなたも御苦勞でござり

ました。

(ト三平はき駄を直さうとするを、宗助ひ

つたり)

宗助 何のおのれらの世話になるも

のかへ。

三平 是は又きつい腹の立てやう

だ。

(ト此内お常、捨疊詞にて無理にお雪の手
を取り外へ出る。過之進思入れ。)

過之進 イヤ何、紋三殿、取込の中へ参

り、此方の勝手斗り、必ず御氣に

さへて下さるな。然らば身共はの

だつてござらう。

(ト過之進門口へ出る。紋三思入れ。)

紋三 是は／＼、何の御風情もなく、

今しばらく共申されぬ今日の仕

儀。

過之進 浮世の中は有爲轉變、悦びあ

れば悲しみあり。

お雪 思ひ廻せば御羨ましい、

お常 あた、御日出度い、

宗助 今夜の祝言。

お雪 夢見たやうな本意ないお別

れ。

過之進 アコレ、目出度く悦びして、

(ト紋三と顔見合せ思入れ。)開き申さう。

(ト唄、時の鐘。お雪心を疑すを過之進せ
り立て、兩人附いてしほ／＼向うへはひる。
紋三後見送り、思入れ有つて。)

紋三 身不肖なる此紋三を執心下さ

る老人の親切、またお雪殿の志、

蔭山親子の悦びに引かへ、妻木殿

親子の心の内、察しやる程。

(トほろりと思入れ、六ツの時計鳴る。)

三平 あれば六ツの御時計。御祝儀

御支度なされませぬか。

紋三 さやう致さう。思へば不便

な。

三平 エ。

(ト紋三向うへ思入れ有りて、氣をかへ。)

紋三 サ参らう。

(ト兩人思入れ。唄、時の鐘になり、道具

踊る。

本舞臺三間、半舞臺。向う床の間、風雅なる銀燈上下所廻し、同じく燈、奥座敷の體。臺中に島臺のし昆布三組の盃に鍔子並べ、燭臺を照らし、お柳丸綿を冠り、武太夫繁之丞お源おさんおたけ願齋、並よく居並び、琴唄の合方、道具留る。

願齋 扱、今晚は日柄もよく御祝言。

殊に御家中に並ぶ者なき花婿の紋三殿。モシお柳殿、嘸御嬉しうござらうなア。嬉しさうなお顔でござる。

お柳 願齋様のなぶつて斗り、覺えておいで遊ばせえ。

願齋 又程なく繁之丞殿もよい御縁女を御呼びなさるがよい。

繁之丞 願齋様。私は女子は嫌ひでござる。

ざります。

武太夫 忤もかやうに成長致しながら、いつ迄も子供の様な事ばかり申して困ります。

願齋 イヤ、御年の参らぬ内は皆さやうでござるが、今に女が好物におなりなさう。ハ、ハ、ハ、ハ。

お源 御支度が宜しうござりますれば、紋三様を御連れ申さう。

主水 (ト立ち上とする。奥にて) 只今夫へ御同道申すでござらう。

(ト右合方、奥より紋三麻袴に着替へ、主水と出で、よき所へすまひ。)

武太夫 塚本氏御夫婦には何かと御心配忝う存ずる。

主水 殿の御名代として媒の役目、今日最上吉日とあつて今日の祝

言。

お源 幾久しく御祝儀、皆々申上げまする。

主水 イザ、お盃。

(ト主水お源、盃をお柳の前へ直す。お柳盃を取る。女形鍔子の口を合はせ、酌をして又紋三へ盃をさす。)

願齋 相に相老の松こそ目出たかりける。

(ト盃をうたふ。宜しく正事有りて) 武太夫 目出たいく。繁之丞祝うて一トさし。

繁之丞 畏りました。(ト繁之丞盃をうたふ。)

ひ乍ら、扇を開き舞ふ事。扇の親骨放れる。

繁之丞見て、祝儀の舞に扇の親骨。(ト心にかゝる思入れ。)

武太夫 忤。何とか致したか。

繁之丞 イヤ目出度く祝してござります。

す。(ト扇を隠して腰へさす。)

主水 此上は服を改め、色直し。

お源 サア、御君嫁御、早う。

紋三 さやうござらば舅殿。

武太夫 聲殿。

紋三 後刻、御日に懸りませう。

(ト唄になり、お源お柳の手を取り、紋三

主水娘二人附き、奥へはひる。)

順齋 扱、滞りなく御祝言相濟み、

嚙御満足でござらう。

武太夫 順齋老にも打寛ろぎ、一献お

過し下され。

順齋 何か斯う、お二人の祝言を見

て、味な心持になりました。

繁之丞 順齋様の戯言口。さやうな儀

は御無用になされまし。

武太夫 こりや忤。勝手へ申付け、燭

の用意致しやれ。

繁之丞 畏りました。

(ト合方にて、繁之丞奥へはひる。)

武太夫 今宵は順齋老の例の踊りが拜

見致したい。

順齋 お好みとあれば、御覽に入れ

よう。踊は何かや、ヤアトナ

ア。

(ト踊り地になり、順齋無性に踊る。武太

夫笑ふ。右鳴物にて道具廻る。)

本舞臺三間平舞臺。正面基壇、三尺の床違

ひ欄、上下折廻し、陣子出入り。真中に屏

風を立て、床を取り枕二つ並べ、朱塗の行

燈を灯し、すべて寢間の體、右鳴物にて道

具留る。

(トなまめいたる合方にて、お柳模様の振

袖抱帯、おげん手を引き、紋三着流し、主

水袴の形、娘二人鏡子盃持ち出て、お柳紋

三を床の上にすまはせ。)

主水 色直しの床盃。サア、早

う。

お源 イザお二人様。

(ト家中娘、酌をして盃事有て。)

お柳さん。嚙御嬉しうござりませ

う。

お柳 ハイ。(ト顔を隠す。)

おさん お柳さんのお嬉しさうな、ア

ノ顔付。

おたけ 傍で見ると羨う存じます。

主水 ヤ、紋三殿。お柳殿は初もの

なれば随分大事に。

紋三 主水殿の重い口から戯言はか

り。

お源 戯言所か、夫が肝腎。ナアお

柳さん。

お柳 アレ、又やつぱり。(ト恥かしき

思入れ。)

主水 仲人は宵の程。

お源 ゆるりとおしげり、

女三人 なされませいなア。

(ト眼になり、銀二人お梅をなぶる。主水夫婦行かうとしてお源帯の間より鼻紙を出し、床の上へなげる。お梅は恥かしき思入れ。紋三主水顔見合せ笑ひ、四人奥に入る。後なまめきたる合方、兩人思入れ。)

紋三 コレ、お糊殿、祝言するから

は何も恥かしい事はない。もそつ

ところらへ寄らつしやれ。

お梅 不束な私、御見捨てなきよう

願ひます。

紋三 どうして見捨てゝよいもの

か。行末かけて變らぬ女夫。

お梅 スリヤ御眞實でござります

か。

紋三 何偽りを申しませう。(ト手をと

り引寄せる。)

お梅 エ、お嬉しう存じます。

(ト兩人抱付き、しんみりとした合方にて、下手障子をあげ、以前のお雪ころ／＼出て、行燈の上より堀風の内を覗めしき。に親く。兩人少々ぞつとしたる思入れ、還りを見て、お梅お雪を見て、)

アレエ、

(ト紋三にすがる。紋三雪きお雪をすかしみて)

紋三 ヤ、そなたは最後の妻木殿の

娘御。どうして此處へ。

お雪 わたくしはどうも内へ戻られ

ませぬ。

(トしほれてよき所へすまふ。)

紋三 そりや何ゆゑ、

お雪 何ゆゑとは、お情ない。あな

たを思ひ切る事になりませぬ。お

嫌ではござりませうが、下女端た

共思召し、お傍に置いて下さりま

せ。

(トお梅是を聞き腹の立つ思入れにて、紋

三を見てそつとつめる。)

紋三 アイタ、ゝゝゝ。

お梅 あなた、アノ娘御さんに會ひ

たいと仰しやりますか。

紋三 どうしてそんな。コレお雪

殿、傍に居度くば置いても進ぜう

が夫ではどうも。

お梅 イエ、あなたが置かうと

仰しやつても、私が、ハイなりま

せぬわいなア。(ト情氣の思入れ。)

お雪 すりや、お恨でござります。

女子は誰しも同じ思ひ、せめて朝

夕お傍に居て、お床の上げ下ろし

や、御膳の御給仕位は。

お梅 イエ、なりませぬ。

紋三様の御傍へ片時も置く事はな

りませぬ。これ、何方ぞ此娘御さ

んを早う連れて往て下さんせいな

ア。

(ト之を聞き上手より願齋出て、)

願齋 お柳殿。何を申されるのぢや。

や。

お柳 イ、エなア、其娘御を早う連れて往て下さりませ。

願齋 何、娘とは。(ト願齋お雪を見て、)

こなたは、最前一寸様子を聞いた妻木殿の娘御、あれ程思切つて歸り乍ら、未練らしい。サア、愚

老と一緒に奥へござれ。

お雪 イエ、わたしや紋三様に。ハテ紋三殿の替りに愚老では

どうでござる。男振りに替りはあれど、下のものの替りはない。お

ひもじくばお振舞申さう。

お雪 何、お前様に。わたしや嫌ぢやわいな。

(ト右の合方にて、願齋無理にお雪を引張り、上手へはひる。お柳邸見送り、)

お柳 申し紋三様。アノ娘御に、あなたのお心がござりますか。

紋三 コレハ如何な事。そなたを退けて外の女子に。

お柳 イエ、そりや嘘でござります。あなたの目附きて知れま

す。あなたのお目附きて知れま

すわいなア。

お柳 ほんまの事なら、嬉しうぞんじます。

(ト兩人じつと密そふ。屏風の蔭よりお雪出て之を聞き、)

お雪 エ、お羨しい。ハア、。

(ト泣伏す。兩人見て悔り、)

お柳 コレ又娘御さんが。

(ト腹の立つ思入れ、上手より願齋出て、)

願齋 ハテ、今の娘は何處へ往つたか。(トお雪を見て、)ヲ、此處にござ

つたか。扱も聞分けの悪い。サこ

つちへござれ。

(トお雪の手を取り、悔りして、)エ、冷たい手だ。サ

ア、

(ト嫌がるお雪を願齋無理に連れて、上手へ入る。始終合方、下手より若徒出て、)

紋三 可愛らしい。

お柳 斗り、エ、憎らしい。

お柳 そりや誰がへ。

紋三 そなたが。

三千 最前の逸之進様が御直談なさ

れ度いと、又お出てでござります。

紋三 何、逸之進様が御出てとは。

(ト若徒下手を見て、)

三平 是へ御出てなされまする。

(ト言捨て、若徒横手へはひる。下手障子
を明け、)

逸之進 紋三殿、御目に掛り度い。許

さつしやれく。

(ト言ひ乍ら出る。後より下女お常にて水
引したる簾飾を壁に乗せ持ちて出る。紋三
床より下りて、)

紋三 是は逸之進殿。何用有つて、

また此席まで。

逸之進 押して是へ参りしは、改めて

祝言の悦びを申しに参つた。

お常 明朝の事になされませとお留

め申ししましても年寄の一轍、折角

お静まりなされた所へ、御氣の毒

でござります。

(ト逸之進、簾飾の壁を前へ出し、)

逸之進 紋三殿。是は餘り些少にござ

れど、今宵祝儀に態と進上致す。

どうぞ御受け下され。

紋三 是は重ねくの下されもの、

眞に痛み入りまして面目なう存じ
まする。

(ト此内、お柳床より出て、)

お柳 申し、そんな逸之進さまとや

ら、折角今宵祝言して人が寝よう

と思ふ所へ、あたどんな祝ひもの、

早う持つてお歸りなさんせいな

ア。

(ト壁をつきもどす。紋三氣の毒なる思入
れ。)

紋三 是はしたり、折角の下され物、

コレそなたも御禮申したがい。

(ト壁を引寄せる。)

お柳 イエく御禮所かいナ。こん

な物はいりませぬ。(ト又壁を笑戻す。)

紋三 コリヤく、どうしたもののち

や、チトたしなんだがよい。(ト壁

を引寄せる。)

お柳 イエくたしなみますまいわ

いナ。

(ト笑戻す。是にて白簾打返し、中より白
木の位牌出る。紋三見て、)

紋三 ヤ、逸之進どのが婚姻を祝

されし、白臺中より出し此位牌。

逸之進 即ち娘雪でござる。

紋三 何と仰しやる。

逸之進 最前屋敷へ歸ると其まゝ、娘

雪めは井の内へ入水いたしてござ

る。

お柳 エ、ゝゝゝ。

(ト恠り。逸之進鼻紙を顔に當てハツト
泣く。)

紋三 スリヤお雪どのには入水いた

されしとか。ヤ、ゝ、ゝ。

お常 おいとしい事でござります。

(トハツト泣く。上手障子の内より、)

順齋 ヤア幽霊だく。

(ト前へ出る。皆々惻り思入れ。)

今の娘御を愚老が一ト針參らうと冷たい手を握る内、この様子を聞いて煙の様に消えました。

お柳 アレエ。(ト紋三にすがる。)

逸之進 スリヤ娘。

お常 お雪さまが。

紋三 扱は一念幻に迷ひ來りしものなるか。ハテ不便な事を。

(ト思入れ。逸之進泪を拭ひ、)

逸之進 叶はぬ戀を思ひ詰め、可愛や

薔の娘一人、あたし命を捨てさせ

ました。

(トまたハツト泣き、思入れあつて合方。)

年寄の愚痴がましく申すではござ

らぬが、子に迷ふ親ころ、夫婦の

中には子無きを愁ひ、何卒一子を

もうけ度く、神に祈り佛に頼み、

よう／＼産せた一人の娘、母は産

後にむなしうなり、乳母の乳房で

よう／＼と、男の手で育て上げ、

成人するに随ひ、年寄子是不便が

一倍、我儘育ちの氣情者と、他人

はそしり笑ふとも、親の目には見

えぬが因果、よい聲とつて初孫の

顔を見ようと、朝夕に楽しんだ甲

斐もなく、せめて病死でもする事

か、入水して死するとは、前世の

惡業が報いきて、親子と生れ、浮

目を見せるかコレ娘、不便な最後

を遂げたなア。

(ト位牌抱きしめ、大泣になく。お柳紋三じゆつなき思入れ。お常逸之進の背中をさすり。)

お常 其お嘆きは御道理ではござり

ますが、泪がお雪さまの御追善に

はなりますまい。お二人さま。嘸未

練な人とお笑ひもござりませう

が、杖柱とも思召すお一人のお雪

さま、嘸お別れなされ、後先の分

前なく、自分の仰しやる事はかり。

どうぞ御免下さりませ。

紋三 某故に逸之進殿、御息女を先

立てられ、嘸や便り無く思召され

んが、定り事と諦めて、追善供養

が未來の爲。

お常 其御詞に甘へましての一つの

お願い、どうぞあなたの御手にふ

れました品を頂戴いたし、お雪さ

まの御死骸の手に持たせたく存じます。

(ト是にてお梅思入れ。)

お梅 聞けば聞くほどおいとしいお心ね。はしたない格氣したのが恥かしい。假の此世は私が殿御。紋三さま、未來はどうぞお雪さまに添うてあげて下さりませ。

紋三 言ふにや及ぶ。未來永く紋三が妻のお雪どの。

お梅 其お詞が追善供養、わしが酌でお雪さまの御位牌と盃なされて下さりませ。

紋三 如何にも此場で盃を。

お常 ヤレ。旦那さま。紋三様がお雪さまの御位牌と御盃をなされま

す。
過之進 スリヤ娘が位牌と祝言して下

さるか。エ、忝ひ。

お梅 幸ひ爰に錢子盃。サア／＼早う。

(トお梅、以前の錢子盃出す。過之進位牌を白髪へ載せて。)

過之進 サア／＼娘、祝言じや／＼。

(ト盃を位牌の前へ直し、お梅酌をして紋三へさす。盃を紋三取り、お常酌をする。)

順齋 イヤ又今夜の様に祝言の度々

ある事もねえ。今度は四海波でもあるまい。三途川浪靜かにて弘誓の舟へ帆をあげる。(ト謠の様に唄ふ。)

お梅 百歳の御壽命過ぎ蓮の臺で女

夫の結び。

お常 思へば悲しい。イエ御目出たう存じます。

過之進 是て娘が未來の迷ひ晴れて成佛致すてござらう。

お常 此盃を申し受け、御棺へ入れ

て納めまするでござりませう。

(ト常、盃をとり鼻紙一巴へ包み懐中する。お梅位牌を片付ける。)

由ない事にてお二人さまにも嘆氣鬱。サ夜更けぬうちに旦那様。

順齋 愚老も御一所開きませう。酒

の酔は覺めてしまふ。何だかぞく／＼と、まだ幽靈が取付いてゐるかしらぬ。

(ト身震ひをする。下手より若黨出て。)

三平 順齋様、わたしが道迄送つて

上げませう。

順齋 夫は／＼忝い。サアお開き

／＼。

(ト過之進ひよろ／＼とお常のかたへ取付き立つ。)

紋三 さ様なれば過之進様。

お柳 隨分道を氣を付けて。

お常 畏まりました。今宵は目出度

い御祝言。

逸之進 翌日は無常の野邊送り、

紋三 此世の名残惜しまれて、

お柳 未來の便を松風の、

逸之進 苦は色かゆる、

紋三 エ。(ト顔見合せ、思入れ。)

逸之進 世の中ぢやなア。

(ト唄になり、逸之進とぼくと、お常の

肩に取付き、順齋若徒付いて下手へはひる。
お柳紋三後見送り、)

お柳 思ひまはせばわたし故お雪さ

まの非業の御最後。

紋三 是も定まる前世からの約束

事。

お柳 おいとしい事でござりますわ

いせ。

(ト合方にて奥より武太夫出て来り、)

武太夫 掣殿、娘もまだ寝やらぬか。

紋三 舅殿、先刻より御構ひ申さず

無かし御退屈。

武太夫 紋三殿。チト其許に折入つて

頼み入れたき仔細がござる。コリ

ヤ娘、紋三殿と新枕の邪魔致す不

粹な親と思はうが、隙をとらぬ。

暫時の間、其方は奥へ参れ。

お柳 どの様な御用か存じませぬ

が、翌日の事になされても。

武太夫 ハテ扱、念な事じや。奥へ参
れく。

お柳 そんならどうでも。

武太夫 ハテ参れと申すに。

お柳 つつとモウ只今参りますわい

なア。

(ト合方になり、お柳思入れあつて奥へは

ひる。武太夫あと見送り、)

武太夫 イヤ何、掣殿。改め申すには及

ばねども、先達て鶴ヶ岡にて狼籍

者を殺害なし、其折から、某其場

へ通り懸り、お手前の難儀をお救

ひ申せし事、よもやお忘れは召さ

るまいなア。

紋三 如何にも其節の御高恩、まつ

た其上當家へ御推舉下され、若殿

の御意に叶ひ、御高録を賜はり、其

上に御佩せまで頂戴致し候段、重

々の御高恩、心魂に徹し忘れがた
く、すは事ある時には君へ一命捧

げる所存も、ひとへに貴殿の御厚

情なれば、誠の親とも心得ますれ

ば何御用の御頼みにても必ず意變

は仕りませぬ。

武太夫 然らば申し聞さうが。誓言が

見たい。

紋三 エ。

武太夫 せ、誠の親とも思はば、善惡と

もに背かぬといふ金打おしやれ。

紋三 何かは様子存せねども、親に

も等しき貴殿の仰せ拙者が心底。

(ト刀を抜き、小柄にて金打する。武太夫
思入れ有つて)

武太夫 天晴く。然らば申すが御身

當家へ仕官召されしは何か心に望

みがござらう。

紋三 拙者望みはかく高録を頂戴致

せば、若殿へ忠義を盡し立身致さ

んわが所存。

武太夫 イヤ其一言吞込まぬ。立身出

世斗りじやあるまい。若年なれ共

一ト器量ある身の形相、若殿へ取

入つて家國押領なし、八重垣の家

名を立てん下心と、此武太夫が眼
力、よもや違ひはあるまいがナ。

紋三 スリヤアノ某が。

武太夫 思ひ内にあれば色外に顯はる

るとやら、かねて此武太夫大望の

儀一ト通り申し聞かさん。

(ト誤への相方になり。)

某兼て當主因幡之介を無き者とな

し、大江の家を押領なさん我大望、

家中の諸武士も大半味方につくと

雖も、まさかの時片腕となるべき

者一人もなし。汝が手練大丈夫な

る魂を見極めし故、大江殿へ推舉

なせしは、味方に招かん我計略、

折よく殿の差圖にて、娘の掣とな

りたる其方、親子縁を結びし上、

味方に付けたば龍に翼を得たる心

地、大望成就の時疑ひなし。さり

ながら、こゝに一つの難儀あり。

俄に明後日國家老到着の由、さあ

らばわが望叶はず。其方明日途中

に待受け、飛道具を以つて國家老

を打つて捨てれば愁ひなし。事急

に及びたれば捨て置かれず。聞届

けて味方に付きやれ。得心なけれ

ば我大望も最早是迄。我を打つて

其方が手柄となし。行未頼む娘が

身の上、但し速かに承引なし、味

方に付くか。我を打か。二ツに一

ツの生死の境。八重垣紋三返答は

ナ、何と。

(ト武太夫思入れにて急度言ふ。紋三、是

を聞き、いろいろ悔り、當惑の思入れ有つ

て。)

紋三 スリヤ舅殿には家國を押領な

さん思召しなるか。

武太夫 それ故あかす我大望。聞かれ

し上は味方に付くか。

紋三 ぢやと申して。

武太夫 金打致したは偽りか。

紋三 サアそれは。

武太夫 舅を打捨て手柄にするか。

紋三 サアそれは。

武太夫 味方に付くか。

紋三 サア。

武太夫 サア。

紋三 サアくくく。

武太夫 聲どの返答はナ、なんと。

紋三 ハア。

(ト當惑の思入れ。是非に及ばぬといふ思入れにて。)

武士の誓ひの金打なし、親に見歸

る謂れなし。八重垣紋三、如何に

も味方仕るでござります。

(ト是非なき思入れ。武太夫聞いて。)

武太夫 ホウ早速の承引、満足く。

得心の上は此場にて一味連判へ血

判おしやれ。

(ト武太夫邊りを見て懐中より連判を出し開き、矢立を出し名前を書き紋三の前へ出す。)

紋三 畏つてござります。

(ト紋三小柄を出し、指を切り血判する。武太夫見て巻納め。)

武太夫 是にて身ども安堵いたした。

今宵は夜も更けたれば何かの密事

は明朝宅にて申合さん。

(ト武太夫連判を懐中して立つ。)

紋三 スリヤ舅殿には最早御歸宅で

ござりますか。

武太夫 今宵は枕も高砂に。

紋三 大望成就の其上は。

武太夫 聲と舅の運開き。

紋三 まづそれ迄は何事も。

武太夫 云はぬが花聲。

紋三 舅御様。

武太夫 ドリヤ參らう。

(ト唄、時の鐘にて武太夫いそ／＼思入れ有つて下手障子へはひる。紋三後見送り、じつと思入れ。書つた相方。)

紋三 思ひかけ無き武太夫の惡事。

恩人といひ義理ある親。是非なく

味方に付いたれども、目前主君の

御身の大事と有つて、承引なさ

れば舅の惡事を訴人も同前、ハテ

何としたもので有らうナ。(ト思入れ有つて。)

武太夫殿の歸り道、大手の

馬場へ驅行き、とつくりと異見の

加へ、若し聞入れなき時は絶對絶

命、是より直ぐにそれ。

(ト早き合方になり、紋三手早く袴をはく。時の鐘、右道共刺る。)

只今歸宅致すと申せ。

中間　がしこまりました。

(ト若衆、提灯を置き、土手へはひる。)

武太夫　髯殿、家來をよけしは最前の
密事なるか。

紋三　如何にも髯殿の何卒思ひ止つ

て下されました。

(ト紋三兩字をついて急度言ふ。誤への合
方、武太夫捨石へ腰をかけ、)

武太夫　ム、後先申さず止れとは、扱

は我大望を。

(ト思入れ、紋三摺寄り乍ら、)

紋三　サ、昔が今に至る迄、叛逆謀

叛の榮えたる例し無き事御存じあ
らん。大江家數代の家老職、何不

足なき身を持ち乍ら主君の打つて

家國を押領なさん邪非道、天道な
くばいさ知らず。何とて成就なす

べきぞ。叛逆露見なす時は、親子諸

共、木の空へ懸る浮目に逢はうよ

り、御身を大事に主君へ忠義、誠の

道に叶ひなば、蔭山の家名恙なし、

繁之丞殿にもお柳どの、纏がる縁

の紋三めを、不便と思召さるゝな

らば、何卒御改められ、本心にな

りて下されませ。モシ舅御様、遍

へに願ひ上げまする。

(ト思入れにて言ふ。武太夫思入れ。)

武太夫　ヤア表裏の二タ股武士、金打

の上大事を明させ、味方に付いて

血判なし、今に及びて變心なすは

命惜しさの心替り、見さげ果てた

る腰抜け侍、娘をくれたが残念ナ。

エ、おのれどうしてくれう。ト紋

三を引付け、扇にて打すへ舞臺へ捻じ付け

て言はうやう無き大待、憶病未練

本舞臺三間、向う黒幕に高き草土手、上下
横込のもの、所々振能き丸もの、白梅、柳
の立木、日獲より同じく二段につり枝、總
て馬場體、時の鐘にて道具留る。

(ト時の鐘合方にて、向うより若衆の中間
箱提灯を持ち、以前の武太夫出て舞臺へ
來り。)

武太夫　存の外深更に及んで其方も無
待遠で有つたらう。サ參らう。

(ト向うバタ／＼にて紋三走り出て、舞臺
へ來り、武太夫を見て、)

紋三　舅殿、まだ是にござりました

か。エ、嬉しや／＼。

武太夫　誰かと思へば髯殿。あわた

しき様子、如何致した。

紋三　サ其仔細と申すは、舅殿、家來

を遠ざけ下されい。

武太夫　コリヤ八助。其方先へ參り、

の不所存と知らず、一大事を明したは、思へばく口惜しい。(ト紋三を突放し、無念の思入れ。)

紋三 其御怒りは尤も至極、卑怯未

練の心にあらず、紋三命はさらく惜しみ申さぬ、切るとも突くとも心の儘、あなたの御自由に成つた上、思ひの儘になるさ。

武太夫 ヤア一旦思立つたる大望、今更變心なすべきぞ。幸先くじく不吉の異見、大望露見も覺束なし。生けては置かれぬ觀念なせ。

(ト武太夫手早く抜打に切付ける。紋三立廻つてきつと押へ。)

紋三 左様に魂据はりし上は、主君の大事にや代へられぬ。是非に及ばぬ御手向ひ。

武太夫 こま事ぬかさず、覺悟ひろげ。

(ト早めたる合方、紋三抜合せ立廻つて、武太夫土手の上にて、紋三梅の木を小桶に取り兩人急度見得。是より鳴物になり、草土手梅樹の立木を楯に、兩人宜しく立廻つて、其内武太夫連判を落す。紋三取つて、ト武太夫拵石に爪突くを、紋三肩先を切り、武太夫苦しき思入れ。)

ヤア不覺を取りしか口惜しい。

(ト紋三疊みかけて武太夫を切倒し、留めを刺す。時の鐘、紋三ホツト思入れ。)

紋三 許して下され舅殿、主家の大事に替へ難き故、親を打ちたる上からは此場を去らず、切腹なし、死出三途を伴はん。それ。

(ト紋三肌を調げ、腹を切らうとして思入れあり。以前の連判を出し。)

イヤく今此場にて切腹なしては、此連判にて舅殿、悪事の露見は目前。死ぬる命を止りて連判状を所持いたし、當所を立退き折を

見合ひ、繁之丞に手渡しなし、敵と名乗り潔く討るゝが武士の道、さうぢやない。

(ト身繕ひ、連判状を懷中にして立上る。

向うにて人音する故、紋三拔身を取り、上手へはひる。時の鐘、合方にて向うより若黨箱提灯を持ち、繁之丞出て来り。)

繁之丞 心ならざる胸騒ぎ、紋三様の御出てなされぬが心懸り。

三平 蔭山様の御宅へ御出て下されましたら、御様子が知れませう。

(ト兩人舞臺へ来り、繁之丞思はず武太夫の死骸に蹲き、思入れ。)

繁之丞 コレ三平明し。

(ト三平提灯を出す。繁之丞よく見。)

ヤ、コリヤ親人様が數ヶ所の手疵。

三平 旦那様いなう。

(ト兩人呼び、繁之丞よく見。)

繁之丞 此通り留^{とど}まて刺した上は呼生

けたとて何返答があらう。

三平 御尤でござります。何者の仕

業か、下郎めさへ口惜しうござり

ます。

繁之丞 最前祝儀の舞の時、扇の骨の

放れしは、此御最後の知らせであ

つたか。

(ト當年ら傍に落ちたる小柄を取り、提灯

に通し見て。)

小柄の模様は八重垣に撫子の高

彫、最前紋三殿が所持せし小柄、

死骸の傍に落散つたるは。ハテナ

ア。

(ト合點のゆかぬ思入れ。ハタノゝにて上

手より侍麻袴、若衆の中間供にて提灯前を

持たせ、出て、繁之丞を見て。)

侍 繁之丞様。是にお出てなされま

したか。只今御寶藏へ盜賊の忍入

り、貴殿お預りのみどり丸の短刀
紛失致してござります。

繁之丞 スリヤ御預りの短刀紛失と

や。

侍 御役人中殘す御立合ひ少しも早

く御詰所へ御出てなされとの儀で

ござります。

(ト侍雪捨て、若衆の中間付き、上手へは

ひる。後兩人驚き。)

繁之丞 短刀の紛失といひ、かてゝ加

へて父の御最後

三平 繁之丞様。

繁之丞 三平。

兩人 何としたものであらう。

(ト兩人思入れ。時の鐘、合方にて。)

の鐘にて道具留る。

(ト時の鐘すぎ合方に、堀の内より松を
傳ひ、清吉にて好みの髪同じ拵へ、短刀を

腰に差し、頼冠にて忍出て、用水桶を足盛
にして舞臺へ下り、邊りへ思入れ。)

清吉 大江家の大部屋にごろ付て居

たが、此頃のまんの悪さ。負けて

／＼負け盡し、ふつと浮んだ出來

心で、寶藏へはひつた所が間の悪

い時はいかねへもので、金といつ

たら目に掛らず、大事相に二重箱

に入れて有つた。(ト腰に差したる短刀

を取り、此刀、どこか金に成りさう

な代物。コリヤ短かくつて用心に

懷ろへ入れて居るに飛んだいゝわ

い。(ト短刀を懷ろへ入れて。)

こいつア

べら坊に腹がへつてきた。蕎麥屋

でも來ればいゝ。

(ト時の鐘、騒ぎ唄の合方、上手より夜鶯

蕎麥賣り荷を擔ぎ、呼びながら出る。清吉見
てい。

清吉

今の侍はまだ年も若い男だ

小袖曾我薊色縫

第壹番目大結

そばや ハイ蕎麥は何を上げませう。

清吉 鹿介こしかへの入つたのは嫌だ。唯の

ぶつかけを熱くして下ツし。

そばや ハイ／＼只今上げます。

(ト捨聲詞にて蕎麥を盛つて出す。清吉喰
はうとする。驛の内バタ／＼と音して上手

千秋萬歳

拍子幕

(ト清吉蕎麥をかつこむ。蕎麥屋やはり震
へる。此見得よろしく。派出なる唄にて。)

一近江小藤太成家
二ヤク 小團次

一鬼坊主満吉
二ヤク 三十郎

一八幡三郎行氏
二ヤク 權十郎

一地獄婆アお谷
二ヤク 納升

一曾我箱王丸
二ヤク 村右衛門

一八重垣紋三
二ヤク 小半次

一曾我十郎
二ヤク 米五郎

一蔭山繁之丞
二ヤク 羽左衛門

一工藤犬坊丸祐友
二ヤク 村右衛門

一古池順齋
二ヤク 小半次

一因果者一寸法師のちよこ平
二ヤク 米五郎

違つて悠々と落付いたものだ。若
いにしちやアいゝ度胸だ。

(ト清吉井の蓋を叩くを木の頭。)

エ、延びてしまつた。

(ト清吉蕎麥をかつこむ。蕎麥屋やはり震
へる。此見得よろしく。派出なる唄にて。)

第一番目五立日返し

初瀬小路妾宅の場

(ト荷姿薊色縫の二幕目なり。略す。)

日笠より火入の月出る。是を見て紋三懐中
より以前の連判状を出し見乍ら、ゆる／＼
と空へかざす。是を眺への端唄になし、紋
三連判を見乍ら悠々と向うへはひる。此内
荷の蔭より清吉出て、紋三の後見送り。)

一寸法師のおちよぼ

吉六

をつとめるが役、晝と違つて夜祭

え。

一 鶴娘のおけつ子

権内

り故、皆の衆も御苦勞でござる。

神主

イヤあたるといへば今日は又

一 神主祇念左司馬

しぎ藏

狩人一 何、これが毎晩するといふで

神主

鎌倉から埴現様へ、當時一藤別當

一 狩人一

竹介

はなし、年に一度の山神祭り、何

神主

の工藤左衛門祐經が御參詣だとい

一同二

麥藏

んの苦勞な事があります。

神主

ふ事だが、定めて社内の掃除番に

一同三

玉藏

狩人二 山神様の御機嫌が悪いと、何

神主

村の衆が當つたらうな。

一同四

出來藏

時も山が荒れ狩人仲間は太難義

神主

隣の甚太に向うの傳次が掃除

一 鬼坊主女房十六夜おさよ

衆三郎

だ。

番に當つて行つた。

一 捕人六人

相中立衆

狩人四 何んでも機嫌が悪いよりいゝ

神主

それがいゝゝ。

様に、今夜は是からおくびに出る

樂で大當りだ。

本舞臺三間の間、一面の山幕、杉の立樹同じ

程夜通しお祭をするがいゝ。

神主

何にしろ、もうそろ／＼山も

く釣枝。爰に烏帽子差被ゆだすきを懸け、

狩人三 ア、コレ／＼假にもそんな事

神主

櫻の咲く時分だが、峠に雪がある

神主の形にて松明を持ち、外に四人山たつ

云はつしやるな。山神様のお氣に

神主

せいか減法に寒いではないか。

つけつゝ、ぼ狩人形の上へ白張を引つけ、

障ると直きに罰が當たるぞ。

神主

それがいゝゝ。野簍へ行つ

烏帽子を冠り、注連を張りし神事装束入と

狩人一 罰でも何んでも初春早／＼當

神主

て大當りにあた라우ぢやアねへ

印せし長持に立懸り居る。此見得、山麓に

神主

か。

神主 時に狩人衆、昔から年々歳々

神主

それがいゝゝ。

地獄谷の山神祭りは此箱根の山中

狩人二 さうだ／＼。何んでも狩人と

神主

サア／＼いづれもござれ／＼

に住む氏子の者が各番に岩戸神樂

神主

芝居者は、當りにヤア錢にならね

(ト山嵐にて神主先に皆々上手へはひる。これにて知らせに付き、山嵐にて山幕明ける。)

本舞臺裏中に二間程の石地蔵、後に小高き

岩山杉の樫を見せ、上下出つぱり岩の張物、日覆より杉の釣枝、雨落一面に響き、岩山杉の樫よろしく山嵐にて道具納る。

(トやはり山嵐にて上下より三人づゝ六人黒ぬめの四天簪鉢巻捕人の拵へ、上へ赤合羽を引つかけて出て来り、)

五人 軍八殿。

軍八 コリヤ。

(ト静かな禪の勤になり、)

此程お家の重寶たるみどり丸の短刀を奪ひ、舅蔭山武太夫を討ち、

逐雷なせし八重垣紋三。

捕手二 召捕る役を蒙りしは則ち短刀

預りの武太夫が忤繁之丞。

捕手二 なれども未だ若年故、見え隠

れに附添ひ、搦め捕れよと上より言付け。

捕手三 最前麓で見かけたる深編笠の

浪人こそ正しく尋ねる八重垣紋

三。

捕手四 賽の川原の石地蔵を小立に取

つて搦め捕らん。

捕手五 然しきやつは八重垣流の一流

を極めし者なれば、

軍八 いづれも油斷さつしやるな。

五人 心得た。

軍八 忍ばつしやい。

(トやはり禪の勤にて上下地蔵の影へ別れて忍ぶ。禪の勤打上げ、本釣鐘誂への相方、これへ篠笛の聲をあしらひ、謡へ陽月を

あらし、花道より紋三、深編笠着流し大小、浪人の拵へにて出て来る。東の歩より繁之丞の役、同じく深編笠着流し大小、浪人の拵へにて出て来り、一時に花道へ止り、)

紋三 春宵價千金と實にや箱根の春

景色、雪解に笑ふ山々の、流の水の底倉に、鳴くや蛙の歌袋。

繁之丞 谷の戸出し鶯も、まだ笹鳴の

片言に、ほうほけきやうの時を得

て、はる／＼爰へ如月に、梅が

しきの猿すべり。

紋三 月影のぼる山の中に、人目の關

を憚りて、忍ぶ此身の臑影。

繁之丞 野邊には萌ゆる若竹の、縁色

そふ深編笠、深き惠の宮の下。

紋三 よし足物の道さへも、白水坂

の九十九折。

繁之丞 旅路に憂を双六の、吉目を祈

るさいかち坂。

紋三 東に見ゆる塔の澤、

繁之丞 西には賽の川原あり。

紋三 千鳥音を鳴く湖に、

繁之丞 二ツ巴の双子山。

紋三 思ひ大澤、

繁之丞 木質の里。

紋三 ハテ風情ある、

繁之丞 詠めじやアなア。

（ト兩人思入れ有つて右の鳴物にて本舞臺へ來り行合ひ、笠の内見ようとする。思入れ有つて、紋三上の方へ行くを繁之丞腰を捕へ引戻すを振拂ふ。急となつて、）

紋三 見れば笠にて面を隠す我に等

しき御浪人。何故有つて身共を支

へ召さるのだ。

繁之丞 木の間隠れの月影に朧ながら

も親の仇、八重垣紋三と見た故に。

紋三 ア、扱は一旦兄弟の因を結び

し繁之丞よな。

繁之丞 俱に天の載かざる親の敵を討

たんずと、汝が行方を尋ねし某。

紋三 我も何時ぞや廻り合ひ、勝負

なさんと思ひしに、

繁之丞 折よく今宵出合ひしは、場所

も名におふ箱根山、

紋三 賽の川原の石地藏。

繁之丞 常念佛の極樂も、

紋三 落れば下は地獄谷、

繁之丞 娑婆と冥途の別れ道、

紋三 いでや此場で、

（ト兩人一時に笠を脱ぎ捨て、）

兩人 勝負をなさん。

（トきつと見待あつて紋三繁之丞の傍へ寄り、）

紋三 仔細有つて汝が父蔭山武太夫

を討ちし某、名乗合うて勝負なし、

見事討つて手柄にせよ。

繁之丞 いかにも親の敵故、討ちて手

柄に致したけれど上の疑ひかゝり

し紋三、盜賊故に今は討たれぬ。

紋三 何この紋三を盜賊とな。

繁之丞 何時ぞや父を討ちし夜に、寶

藏に秘め置きし我が預りのみどり

丸、紛失なして行方知れず。正し

く汝が奪ひしと上の仰せに打手の

某、誠侍の魂あらば、その夜汝が

奪ひ取りしみどり丸を我に渡し、

名乗合ひして勝負なせ。

（トこれに聞き、紋三憮りなし、口惜しき

思入れ有つて、）

紋三 コハ覺えなき盜賊の惡名、み

どり丸を奪ひしなぞとは、此身に

とつて覺えなし。言ひかけせずと

繁之丞、我を討つて父の手向にな

せよ。

繁之丞 たとへ何程諫（ちん）ずるとも、短刀

戻さぬ其内は、いつかな討たぬ八

重垣紋三。

紋三 デモ覺えなき短刀を、何とて

汝に渡さうや。

繁之丞 ヤア渡さぬ上は上の囚人、繩

うつて引く覺悟なせ。

紋三 しやらくさい覺悟呼ばはり。

よしや殿の上意にもせよ、覺えな

ければ繩目は受けぬ。

繁之丞 異儀に及ばば手込になし、繁

之丞が繩かくるぞ。

紋三 ム、汝が父は討つたる故、武

士の情に討れてやらんが、身に覺

えなき疑ひ受け、繩目の恥辱受け

うならば手柄に揃めて見よ。

繁之丞 云ふにや及ぶ。いづれもそり

や。

(ト繁之丞小石をとつて石地蔵へ打付る。

上下より以前の捕人ばら／＼と出て紋三を

とり巻く。)

繁之丞 八重垣紋三。

六人 覺悟なせ。

紋三 扱は後より某を揃めとらん手

立よな。斯く多勢にて取巻く上

は、繼がる義理ももうこれまで。

八重垣流の覺えの太刀先、ならば

手柄に請けて見よ。

繁之丞 三枚橋より後を付け、爰にて

捕らん兼ての手筈。サア尋常に繩

に掛れ。

紋三 何を小續な。

(ト繩の勤になり六人十手にて打つてかゝ

き。紋三これを相手に立廻り、繁之丞下手

岩壁へ腰を掛けて見て居る。紋三石地蔵へ

上り、六人を相手に一寸立廻り、紋三肌脱ぎ

になり、又々六人と立廻り、此内繁之丞肌

脱ぎ、下箱をたすきにつけ、十手を持ち、

身揃へなし、よき程に繁之丞、紋三へ十手

にて打つてかゝる。是より兩人面白き地蔵

誂への鳴物になり、三尺程引上げ又兩人立

廻り、繁之丞過つて谷間へ落つる。)

ヤ、繁之丞には過つて谷間へ落ち

しか。我も續いてヲ、さうだ。

(ト同じく後口の谷へ落込む。舞臺はやは

り右の鳴物にて石地蔵を段々とせり上げ

る。地蔵の臺石より下一面の山幕付いて上

る。よき所にて幕切つて落さる。)

本舞臺向う小道具の二重岩組の隠込み、後

奥深に杉林、潮水の遠見、上手に一間の手

水鉢、庵に木瓜の紋付、雨除の家垣、新口

に鎌倉大名紋證しの納手拭、平舞臺上下に

切破りの蓑疊、總て箱根屋現入口の隅、山

嵐にて讀具納る。

(ト向う揚幕にて、)

大勢 ハイホフ。

(ト行列、三重大拍子の入りし誂への鳴物

になり、向うより三階の端扇板中間二人、庵

立二人これを擔ぎ、此後より絹羽織袴股立の侍四人二行に並び、同じ形の長刀持、長褌本袴袴裾板六尺四人擔ぎ、始めに中間二人箱提灯を持ち、此後より小藤太鉢かづら柿の上下、股立大小吉例の袴へ、同八幡三郎付き出て来る。此後より十徳形の番者やうぶ皮形の茶蕪つぎ箱扇板の中間大勢羽織袴股立の御二人、總て此行列三階の人數總出、皆々本舞臺へ來り、乗物を二重へあげ、

近江 お乗物立てませい。

六人 ハ、ア、。

(ト二重臺中へ乗物を直し、上手に近江下手に八幡、行列の人數後ろに並び、平舞臺上下には箱提灯、三階の中仲四人控へ、よくろしく夜神樂の入りし詠への鳴物にて。)

近江 いかに方々。今我君の御威勢

は鎌倉山の星月夜、伊豆相模にひかり顯れ、誰一人祐經様に肩を並ぶる者無く、すてに一臈別當の職に登りし大々名。

八幡 それ故、此度皐月下旬の富士

の御狩の惣奉行、頼朝公より命せられ、役目首尾よく勤める様にと、則ち箱根壇現へ奉幣祈念の御參詣。

近江 誠や御先祖祐經様より一度御家衰微なせしも、

八幡 再び返る三ヶの所領、館も花

咲く梅ヶ谷。

近江 時めく春に相生の近江八幡兩

人も、

八幡 君の恵みを身にうけて、枝葉榮うる松ヶ岡、

近江 千歳祝うて鶴ヶ岡、

八幡 萬歳壽く龜ヶ谷、

近江 礎かたき、

八幡 御家の繁榮、

近江 只々御目出たう、

皆々 存じまする。

(ト皆々舞臺へ辭儀をなす。此時風の音になり、上下の臺臺の影へ美奈の雀大ぶる舞ふ。兩人これへ目を付け、きつとなつて。)

近江 ハテ心得ぬ。野に伏勢ある時

は歸雁連を亂すとかや

八幡 夜隠に是なる藪蔭より峙放れて飛かふ小鳥。

近江 今太平と云ひながら、頼朝公

のお覺え目出度き主人左衛門祐經様。

八幡 大小名の其内に恨む輩のあらんも知れず。

近江 聞けば河津の三郎が忘れ形見

の二人の忤、父の敵と狙ふ由。

八幡 例へ何程狙ふとも蟻螂が斧、及ばぬ事。

近江 何にしもせよ怪しき藪影。

八幡 人こそあらん詮義致せ。

中間
二人 心得ました。

(ト兩人ツ、ト左右の敷の内へはひる。直にはたゞになり、左右より一人づゝ見事に返り出る。直に鼓臺を押分け上手より祐成の役、着流し大小、上手より兄鬘、振袖指貫小サ刀にて兩人共ツカ／＼と前へ出る。中間四人掛るを立廻つて左右へ投退け、きつと見得。)

中間
皆々 どつこい。

箱王 親の敵祐經觀念。(ト立騒る。)

祐成 コリヤ急ぐ所でない。早まるな。

(ト對面三重になり、祐成箱王をじつと留る。近江八幡兩人見て思入れ。)

近江 ヤア我君の乗物目がけ、敵と

呼ははる無禮者。

八幡 正しく二人は河津が忤、忘れ

形見の兄弟なるか。

祐成 如何にも我は兄の一満。祐信

殿の養子となり、十郎祐成。

箱王 まつた我は菩提のため箱根山

へ登つたる腕白者の弟箱王。

近江 扱こそ主人を敵呼ばはり、年

端もいかねへ身の上で、

八幡 當時一藤別當たる我君左衛門

祐經様へ、

近江 又向ひ立ては及ばぬ事だ。か

くいふ近江の小藤太成家。

八幡 八幡三郎行氏がお傍になくば

いざ知らず。

近江 どつこい。

八幡 そつけへ。

兩人 ヤリヤアしよねえか。

(ト兩人きつといふ。箱王何をと立ちてかかるを祐成留むる。此時乗物の内にて。)

犬坊丸 兩人控へい。

近江 ハツ。(ト兩人控へる。)

祐成 アノ聲は。

近江 工藤の嫡子。

八幡 犬坊丸。

兩人 祐友様。

(ト小鼓の合方になり、乗物の戸を明ける。内より犬坊丸若衆、棒笠笠長袴に小サ刀にて、結羽織の侍床几を直す。犬坊丸是へかける。)

箱王 扱は祐經と思ひの外。

祐成 犬坊丸にて、

兩人 ありしよなう。

犬坊 父祐經所勞に付き、名代とし

て某が則ち箱根權現へ奉幣祈念の

此參詣。

箱王 エ、けふ箱根への參詣を待ち

もうけたる甲斐もなく思へば。(ト

箱王立ちかゝるを。)

祐成 コレ立騒いで尾籠な弟。急い

ては殊に神の前、只何事も兄にま

かせて。

宿王 デモ。

祐成 じつと心抱しやいなう。(ト近

江思入れ有つて)

近江 行氏お見やれ。見れば見る程

二人が面差し、なんとよく似たて

はないか。

八幡 成家がいふ如く、親子とて争

はれぬ。ア、似たは／＼。

犬坊 何似たとは誰に。

八幡 犬坊さまには御存じなけれ

ど、川津の三郎祐康に。

犬坊 スリヤ兄弟は一家たる川津殿

に似たるとか。

八幡 生寫しなる二人が面差し。ア

ア親はなくとも子は育つとは、ハ

テよく言つた事だなア。

近江 いか様二人の兄弟も、まだ其

時五つか三つ。

祐成 十八年の其間父が最後のその

無念。

宿王 忘れもやらぬ此年月。

近江 親を討たれて無念なか。

宿王 さん候ふ。

近江 口惜しいか。

宿王 さん候ふ。

近江 さもさうず、さもあらん。然

し河津を討ちたるは主人祐經様で

はない。股野の五郎景久なるは。

祐成 なんと。

(ト大小入り、合方になり)

近江 思ひぞ出づる其時は安元二年

神無月十日あまりの事なりしが、

伊豆相模の若殿ばら、赤澤山の晴

れの角力、股野は聞えし力强、二

十一番勝になり。

八幡 廣言吐きしを憎くしと、祐康

土俵へ飛入つて、股野を投げし河

津懸け、已に角力も夫迄と天晴力

者の祐康殿と勝誇つたる歸り足。

犬坊 ヲ、聞及ぶ其時こそ、河津殿

の出立は、秋野の摺つたる狩衣に、

千段藤の弓携へ。

祐成 竹笠さつと木枯に吹きそら

し、村月毛に股がつて。

宿王 絶所惡所の嫌ひなく、しんづ

／＼と歩ませたり。

近江 スハ祐康よござんなれと柏ヶ

峠の南尾崎、椎の木三本小立にと

り、一のまぶし二のまぶし。

八幡 きつと放せば過またず、河津

が乗りたる駿足の鞍の山形討ちけ

づつて。

犬坊 むかはぎの着際より前へすつ

ばと射通したり。

祐成 萬夫不當の父上も大事の痛手

犬坊 何はともあれ一家の某、けふ

る。

にたまり得ず。

祐王 馬よりどうと落^{おち}こちの露を消

初めて參會故、父にかはつて些少の家づと。

近江 ハテ珍らしい。

(ト乗物を上るを木の頭。)

したる無念の最期。

(ト兩人口惜しき思入れ。)

近江 サ、河津を討つたは股野の景

祐成 ヤ、コリヤコレ狩場の、

久、祐經様には御存じない。疑ひ

祐王 二枚の切手。

晴して早く歸れ。

近江 何ゆへそれを。(ト立ちあがる。)

祐王 イ、ヤ討ちしは左衛門祐經

犬坊 めぐり逢ひなば渡せよと則ち

殿、包み隠すは卑怯未練。

父の兼で言付け。

祐成 なぞ名乗つては討れぬぞ。

八幡 流石は我が君。

八幡 例へ主人が敵にもせよ、皇月

祐成 敵ながらも。

下旬頼朝公が富士の御狩の惣奉

祐王 情の賜物。

行、役目からむる上からは討つ事

犬坊 只何事も。

ならぬ祐經様。

祐成 皇月下旬。

祐成 スリヤ皇月下旬の狩くら迄。

近江 まづそれ迄は。

祐王 討つ事ならぬか忌々ましい。

祐成 工藤祐友。

(トきつと思入れ、犬坊九こなしあつて)

犬坊 祐成祐王。(ト犬坊九乗物へはひ

皆々 對面ぢやなア。

(ト六尺乗物さし物げ、左右に近江八幡中

間騒らき、鼓提灯の箱提灯を差上げ、祐王
きつとなる。祐成支へ、此見得引張よろし
く山嵐カケリにて。)

拍子幕

(ト此幕以前の山嵐を引き、山嵐好みの合
方になり、向うより五立目の醫者順齋白張
の提灯を下げ出て來り。)

順齋 ア、遠い。里と違つて山

中は二月になつても此寒さ。早く

宿屋へ泊りたいものだ。(ト云ひ乍ら

本舞臺へ來り。) 扱々人の身の上は浮

き沈みのあるものだ。愚老も元は

按摩鍼だが、大江の家を押領なさ

んと兼て無叛の氣ざしのある武太夫殿に取上げられ一味合體成したる所、武太夫殿が紋三に討れ、立身出世の綱も切れ詰らぬ上に連判狀

が殿様の手へはひる時は、一味の者は首道具、聖人危きに近寄らずと、衣類家財を祕かに賣り、まとめて金が五十兩。(ト懷より財布を出

し見て)是を路金に都大阪、大和巡りをした所が、梅川といふ色もなければ、まさか二分に成りもしまい。何んにしろ更けぬうち早く何處ぞへ泊りたいものだ。勝手を知らぬ山道に、折悪しく眞暗ゆゑ、此後の庵室で貸してくれたこの提灯、白張といふ物はなんだか不氣味な嫌なものぢや。(ト願齋氣味の惡き思入れにて)ア、よく人が野暮と

化物は箱根から先きといふが、爰はもう中程だから化物があるかも知れぬ。どうぞ出合ひたくないものだが。

(ト時の鐘、どろ／＼の様な山風、向うより因果者の一寸法師の夫婦、はけの長い奴、あたま同じ赤い布を懸けし仰山な島田璧、兩人手を引合ひて出て來り、)

一寸法師 コレおちよばや。きのふ買

ひに來たのは大阪か。

ちよば 何、江戸の兩國サ。

一寸法師 江戸ならどうぞ行きたいもの

のだなう。

ちよば 行きたいと云つたつて、外聞

の悪い。お前^めとわたしと角力をと

つて投られる度に岩戸を見せろと

わたしや恥かしくつて嫌だよ。

一寸法師 そいつアいゝぢやアねえ

か。見物よりおれがたのしみだ。

ちよば 助平な事を云ひなさんな。毎晩見てゐる癖に。

一寸法師 何んにしろ、いゝ加減に出かけようぜ。

ちよば ほんに難用斗り溜つていかにいよ。

一寸法師 サア早くお祭りへ參つて來よう。

(ト本舞臺へ來り、此内願齋提灯あかりにて煙草を呑み乍ら二人を見て、)

願齋 しめた／＼。やう／＼人に出

合つた。モシ／＼此近所に旅籠屋

はござらぬかナ。

ちよば 此近所には一軒もない。山中

迄行かない。

願齋 山中迄はどの位あるな。

ちよば 一里半もありませう。

願齋 それは夜道に困つた事だ。

ちよぼ モシお困りならわたし共の居る所へ御出でなさいな。

順齋 スリヤ泊めて下さるか。それは御深切に忝い。(トいひ乍ら兩人の姿をとつくり見て悔りなして引つくり返り)いや化物だ／＼(トふるへる。)

一寸法師 これさ／＼。旅人、化物ぢやアねへ。見せ物だよ。

ちよぼ 何がそんなこわいのだよ。
(ト一寸法師順齋の傍へ来てはつと口を明く。警者ふるへ乍ら逃げようとして逃られぬ思入れ。)

順齋 これが怖くなくつてどうするものだ。頭が大人おとなな體が子供こども箱根も半分來ぬにもう化物に出られては、これから先へ行かれぬ／＼。

一寸法師 エ、此人は何をいふのだ。狐にでも化されたのか。

ちよぼ こんな分らない人にかまはず

と、早く行かうぢやないか。

順齋 どうぞ行つてくれ／＼。(ト順齋はふるへる。)

一寸法師 そりやアさうとおけつぽはどしたらうな。

ちよぼ 大方先へ行つたらうよ。

一寸法師 ハア歸られねじやねえか。

警者 ハア歸られてはたまらぬ／＼。

(ト花道の方へ逃げようとして腰の立たぬ思入れにて順齋もかく)

一寸法師 イヤ飛んだ化物だ。

(ト右の鳴物にて兩人は上手へはひる。順齋振返りほつと息をして、)

順齋 ナレ嬉しや／＼化物が行つてしまつた。扱々箱根といふ所はこわい所だわへ。

(ト又向うより芥子坊子の島田蟹、赤い布をかけ、持へもの、鶏の足にて出て來り、)

ヤア／＼又ちいさい娘が出て來た。これは誠の人間だ。コレ／＼お

むす、旅籠屋はどこであるか。よい子だ致へて呉りやれ。(ト鶏の足、大きな聲をして、)

鶏の足 とつけつこう。

順齋 ア、大きな聲だ。悔りしたの

で何だか分らぬ。旅籠屋はどつちの方だよ。

鶏の足 とつけつこう。

順齋 何んだと。

鶏の足 とつけつこう。

順齋 エ、此娘は何をいつても。

鶏の足 とつけつこう。

(ト順齋鶏の足を見て悔りして引つくり返り、)

順齋 ハア、此マア是は化物だ／＼。

鶏の足 とつけつこう／＼。(ト鶏の足よ

たノと上手へはひろ。）

順彌 ヤレ来るものもノ、誠の人に

合ひたいものだナ。（ト懐ろから金を

出し）何んにしろ物騒なのは五十

兩、どうか猪も居さうだから定九

郎でも出にやアよいが。

（ト此時後へ、山九郎鼠の頭を頭中にな

し、同じく皮の袖なし遠付、山刀狩人の袴

へにて後ろへ出で、）

山九郎 物騒なその金、おれが預から

う。

順彌 ヤこなたは。そりやこそ猪の

代りに狼だ。

山九郎 風祭から足を付け、爰迄汝を

送り狼、四の五の云はずと渡しや

アがれ。

（ト財布へ手をかけ取らうとする。順彌す

がりに付き、）

順彌 是は命と釣替へだ。狼でも化

物でもこの金斗りは渡さぬノ。

山九郎 エ、やかましい。放しやアが

れ、

（ト禪の動になり、狩人ひつたくる。順彌

渡すまいとすがりつき、これをかぜに立廻

りあつて、トマ狩人財布をくわへ、舞臺前

のきり穴へ飛込む、順彌うらあしきうに下

順彌 ア、悪い事はしねえものだ。

とう／＼金を取られて仕舞つた。

然しまだ化物めらに命を取られぬ

が仕合せだ。

（ト上手より以前の一寸法師おちよば鰯の

足三人出て来り、）

一寸法師 まだおめへまごついてゐる

か。

おちよば 道が知れざア一所にお出で。

（ト順彌見て憐れなし）

順彌 ハア、又化物が。

鰯の足 とつけつこう。

順彌 こいつはたまらぬ。（ト花道へ逃

出し足立ぬ思入れ。）

一寸法師 これさ待ちねへと云つたら

ヲ、イ／＼親仁どの。

（ト大津繪ぶしの合方に鳴物入れて一寸法

師歌ふ。おちよば鰯の足踏る。）

その金こつちへかしておくれ。

順彌 金はどうにとられて仕舞つ

た。

一寸法師 與一兵衛憐り仰天しイエイ

エ金ではござりませぬ。

（ト一寸法師手拍子にて歌ひ、おちよば鰯

の足踏り乍ら、花道へ行き、順彌後をつき

喰ひ乍ら振りに成る。）

順彌 娘がしてくれた用意の握り

飯、お光へ參じませう。（ト先へ行き

かける。）

おちよば これさ待ちなせへ。一緒に行

かうよ。

順齋 一緒に行きやれてたまるもの

か。

(ト右の鳴物に早めて順齋向うへ逃げてはひる。三人後を追ひかけてはひる。鳴物打あげ、知らせにつき、山幕を切つて落す。)

本舞臺真中に大尉の杉大洞、是に山神祠といふ白の段懸。杉の根高二重程の高き三方へはびこり、足懸りになりて上り下りをする事。上下杉の林、日蔭より同じく釣り枝、向う奥深く宿根山夜つ漣見、下の方に簪を焚き、凡て地獄谷山神祠の體、山嵐にて道具納る。

(ト山嵐打上げ、奥にて。)

呼び

神事始まり。

(ト呼ぶ。これをきつかけに岩戸神樂の入しせりあげの鳴物になり、舞臺真中上手に三十郎金襴の袂への頭巾、天狗の面を冠り、紺地錦の狩衣、白地錦の大口、高足駄しでの付し纏へ八疋形の名鏡を結び付け、

是にて以前の狩人を引付け居る。下手に天冠縁たれ細女尊の面をかむり、紫錦の舞衣、紺の小袴、白の幣束を肩にかけ、狩人を目を付けある。此見得にてよろしくせり上げ、鳴物打上げ、山嵐になり、狩人撥返し行かうとするを、細女の形支へる。たぢ／＼として猿田彦に行當る。猿田彦突廻して狩人を投退け、その儘岩臺へ腰をかけ櫛を突立て持ち、猿田彦の見得、此折狩人財布を落すを、細女の形給ひ懷へ入れる。狩人それをとかゝる。細女の役狩人を幣束にて留め、急度見得、是へ岩戸神樂を打込み、細女の役狩人を相手に立廻り乍ら舞に成り、よき程に細女の役狩人を笑く、此はづみに天冠縁たれ面落て、いがくり頭、好みの髪になり、是と一時に猿田彦の役、頭巾をとつて捨白、髪髷老婆になる。狩人を引つけ左右急度見得、袂への鳴物に成り、狩人老婆に組付くを振拂ひ、これにてうへたけて下は世話形、荒麗の袴をかけたる袴へ、散切の役、片肌脱ぐと下は廣袖惡婆の袴へにて、兩人急度見得、これにて籌消す。鳴物變つて老婆、惡婆の懷より財布を引出し、これをかせに立廻り、狩人此内へ割つていり、財布を引つたり、ツカ／＼と木の根をあがり、

祠へはひらうとする。内より段懸を引切り

月代のびしひとつ寢、好みの世話形、寢てゐたる心にて狩人を引付け、片手で伸び

を仕乍ら、寒いといふ思入れにて身震ひをなし、すう／＼しく狩人を握り見て手にきはる財布を引つたり、見事に下へ投

のけ、杉の根の祠にて急度見得、此内惡婆老婆もさぐり合ひて狩人が返りし音にて左右へ分れ、と一緒三方へ一時に見

得、是にて又時代と世話の袂への鳴物に成り三人だんまりの立廻り。能き程に老婆後

ろへ身を引き腰より手拭に包みし出刃庖丁を出し、手拭をとる。此内の胸倉をと

り、ぐつと引つける。風の音になり消えたる舞はつと燃え、兩人顔見合せ胸りなし。

清心 十六夜か。

十六夜 清心さんか。

清心 コレ。

(ト手を放す。老婆割つて出て庖丁にて突いて懸る。一寸立廻つて此中へ狩人かゝり、清心の懷より金を引出す、清心引つたり口にくはへ下手へ投退ける。老婆土手にて庖丁を振上る。清心真中にて尻をはしよる。

十六夜は狩人を押へ付ける。これにて三方見合せて木の頭、老婆横向にてきつと見附、清心は空を手に持ち老婆へ詰寄る。十六夜は起上らうとする狩人をじつと押へ、上手を伺ふ。此見得山嵐、カケリ早き大拍子に冠せ。よろしく。

拍子幕

第二番目二立目

雪の下白蓮本宅の場

(花街模様刺色縫の三幕目なり。略す。)

第二番目三立目

名越無縁寺の場

同裏門捕物の場

(花街模様刺色縫の四幕目なり。略す。)

川柳雜俳集(柳多留)正誤表

頁	段	行	誤	正	頁	段	行	誤	正
二九七	上	二	。ゝかれず	たゝかれず	三〇〇	下	六	親達	親類
二九八	下	二五	田舎芋	安く	三〇一	上	七	安く	安い
三〇〇	上	二五	四十過ぎ	四十三	〃	下	四	ゆいとばし	やいとばし
三〇一	上	九	歌になり	歌(敵)になり	〃	下	二〇	ばり合	はり合
〃	下	四	鬼で目を	鬼で目を	三〇三	中	三	ばんござへ	ばんござへ
三〇二	中	四	その手代。の下女	その手代その下女	三〇五	上	元	米あけざる	米あけざる
三〇四	中	五	みそげて	みそけて	三〇六	中	一	小半町	小半時
三〇四	下	六	外科醫者を	外科を	三八	下	一	さして	さして
三〇五	下	四	初見世	切見世	〃	下	七	小歌の	小言の
三〇六	上	一	車座に	車座へ	三三三	下	二	そゝり貝	そゝり唄
三〇七	上	二	病犬を	病犬	三三五	下	三	しら使	しら使
〃	中	七	樋合	樋合	三三六	下	二	糞巾に	糞巾に
〃	下	三	いじかられ	いじめられ	三七	下	一	かきを	かきを下げ
三一〇	下	七	山伏が	山伏は	三三	下	二〇	じれつかず	びれつかず
					三四	下	二	二足	二タ足

四二	上	一	「上臈」の次へ 太々ていゝおりになる恥をかき 外聞のするさ女房と下女が論 先度のをまだ縫つてゐる茶屋女 「ほし顔」の次へ 抜きどころがわるいさかいと公家衆いひ 「百日那」の次へ とう丸へのるべいわさと物師いひ
四一	下	三	「六俵」の次へ 吉原の外聞になる意地を張り お前方本降だよとじやまがられ
四〇	下	九	「うくじんと」の次へ ふみやんなと紅葉の下で一歩かし 座敷牢初手は遊里にとらはれる 人口なころもでふさぐ憎い事 十ヲざしを禿起きると出して見る
三九	下	二	「むしあふ」の次へ 叱られて今朝出たと母苦勞がり
三八	上	二	「えゝかはん」の次へ ぼんごさへ風のする西の町
三七	上	五	「手ぶら」の次へ こはさうに聞わりをふせる松の内
三六	中	一	このくくが
三五	中	五	初めさと 太刀に氣が
三四	上	四	初さと 太刀に熊坂氣が
四〇	中	二〇	「は入るまい」の次へ 勝つた時仕舞ふとこだと愚痴をいひ 鉢巻と櫛巻の中不動尊 「かくべつな」の次へ さかい町おとなしぶつて残される 「年輪張」の次へ 死なば死にやなどゝこはゝ母はいひ 「前だれを」の次へ はんでんはよせとたびゝ供へいひ 「いさゝかな」の次へ 江戸人だなどゝ野掛は火をはたき してとつた顔で鳥さし吹きやめる 旅戻り乳母はから手でかけて来る 「母の来る」の次へ 事ぶれを夫との留守にもてあまし その時は業のはかりの思なり おきく顔へむしんをさしひかへ 竹馬と下女わけのあるていたらく 「初經」の次へ 引つばいで起す娘はきさう也 「なげ入れ」の次へ 裸身へ守をかけてうつてゐる 「かねつける」の次へ 不動まで女房を連れる通り者 「それをもさうだ」の次へ 樽拾からおなじみと毒をいひ ふんどしの綻までもお針也 「けいせいに」の次へ 色々にからだのかわるべくちうち

四三五	〃	〃	〃	四三三	四三一	四三〇	四二九	〃	四二八	四二七	四二六	四二四
上	中	下	中	上	中	中	中	下	下	上	下	中
四	三	七	六	一〇	七	三	五	一六	七	三	八	一三
「嫁の着かへる」を取りこぼすの二句を入れる あつかいで村間男は五俵出し	見えせんものと	夜着一つ	はつとした	「時鳥」の次へ はらんだを承知でよんでぐちをいひ	有るでは三まい	きりかへる	どうして	呉服店	みゝず	入れなと	十かへりの と	ささらつて
	見えせんものと	夜着二つ	ばつとした		有るで三まい	きりかへる	じうして	呉服屋	めゝす	入るなと	十かへりの	

上下の音ばかり聞く年始帳
ありきりのおとぼねを出す野掛道
じやうだんに談義など聞く花屋
基會所と醫者とへ迎二人り出る
すがゞきを律義にひくは出た當座
地廻りの向うへきれる惣仕舞

四五一	〃	四五〇	四四九	〃	〃	四四八	〃	四四六	四四九	〃	四三七	四三五
上	下	下	下	下	上	上	下	上	上	下	中	中
九	二三	三	二〇	一	九	三	一七	三	一	四	二三	六
一尻まくりの次へ 四位の少將へ諸太夫疵をつけ	お祥月忌	「師匠さま」の次へ 間男の切られた所に瓜の皮	「備前もの」の次へ とりはものかはとやめない負けた奴	安名	あてごととも	乳のらひ	「つげ口を」の次へ 大鎌のおもてゝ小鎌しやこをうり 前表はうすきちきりにぶら下り 比類なき雑言を聞くお歸	及び中段二行と三行の三句を割る	ゆるしやと	先づ歸る	すわる	内へわて
	お初月ツ忌				あてことも	乳もらひへ			ゆるしやよと	先づ歸へし	すばる	内福で
					保名							

四五一	下	一	松の木を先へ	松の木をへ先へ
四五三	中	六	「川留に」の次へ きんちやくを切る事色にひしかくし	
四五五	中	五	ゆびさして	ゆびさして
四五六	上	五	ぜばんいひ	ぜばんいひ
四五七	上	二	「かんばんに」の次へ われ鍋をはじめてなめるはづかしさ	
四六〇	下	八	大づめに	大づめに
四六一	下	一〇	鳥がくれ	鳥かくれ
四六二	中	二	人	客
四六三	中	三	あばた賣れ残り	あばたが賣れ残り
四六四	中	八	邪道	邪法
四六五	下	一	かくれる	かくれる
四六六	下	二	夫婦づれ	夫婦づれ
四六七	上	二	錢	金
四六八	中	元	蚊帳	蚊帳
四六九	下	七	大屋	大や
四七〇	中	五	しやくせん	しやくせん
四七四	上	八	嫁土藏	娘藏から
四七五	下	三	ゆびさす	ゆびぎす
四七六	中	五	ゆめに	ゆめを
四七七	中	六	大三十	大三十日
四七八	下	八	醬者	醬者
四八三	上	七	塚先に美人が二十人	塚の先に美人二十人
四八四	下	一	傘張るがよし	傘張る方がよし
四八五	上	一	はしりをおろす	はしよりをおろす
四八六	上	一	とツかまり	とつかまり
四八七	下	七	洛中の	洛中に
四八八	上	三	羽織を	羽織は
四八九	上	四	賽日	賽日
四九〇	下	二	太いは	大は
四九一	上	一	繩	繩
四九二	中	八	「天蓋屋」の次へ 身代がなをとと嫁が目立つ也	
四九三	上	三	引もくで	引もくで
四九四	下	七	女街一つ	女街は一つ

[illegible]

五三	中	七傾成	傾	五九	下	八ぬけたり	ぬけ参
〃	下	八女すり	おんなすり	五四	上	四糸の琴	琴の糸
五三	中	五無い迄	無いと迄	〃	下	元馬おひ	馬おひ
〃	中	元ごたゝ	ござゝ	〃	下	二えりへ手を	しりへ手を
〃	中	元はかをなげ	ばかをなげ	五四	下	七ひツひいひい	びツびいびい
五四	中	一こすり付け	こすり付	五四	上	六切つたりと	切つたりは
〃	下	元また	まだ	〃	下	三いとまをくれ	いとまくれ
五五	下	四甚三郎	勘三郎	〃	下	六道鬼は仕廻ひ	道鬼仕廻ひ
五八	上	一八雨がぶり	雨がぶり	五四	上	五すそつゞきにも	すそつゞきにも
五二	下	一七法事をする	法事する	〃	中	九巖	巖
五四	上	八はぎへそ	はぎ人そ 「日? 願文不明」	〃	下	二ひいれ	へいれ
〃	中	三目なし也	目なし也	〃	下	二高い	高いもの
〃	下	一〇「太夫様敷た」との次へ ひたにかゝる馬にばくちを見せておき		五〇	下	三醫者となつて	醫者と隣つて
五七	下	六申留	車留	五一	中	四遣る	出る
五九	上	一〇見たて	見たで	〃	中	四「黒助の」の次へ 迷ふまいものか持参と裸也	
〃	上	六よふうつくしき	よふうつくしき	五二	下	三「あのやせた」の次へ 道問へばくちに付いて行つしやい	
〃	下	二六十日	六十目	〃	下	八姑婆	姑婆々

五五七	五五七	五五七	五五七	五五七	五五六	五五五	五五五	五五五	五五五	五五四	五五三	五五三
中	中	下	下	下	下	上	上	上	下	中	上	中
一四 切れく	五 きせるなり	二〇 見	二〇 鳥追ひに	四 ゆき	一 樽酒	二 牛戸	六 置く	八 白を上げ	一 賣り	五 「湯もどりの一の次へ しやか十が出たですゝはきげびる也	一六 ほれられぬ氣で	一六 ほれられぬ氣で
切り／＼	きせるとり	み	鳥追に	ゆく	酒樽	牛房	置き	田を上り	賣	ほれられぬ氣で	息子	大通ウ。
五五七	五五七	五五七	五五七	五五七	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五四	五五三	五五三
下	上	下	中	中	中	中	中	上	上	下	中	下
二 おからが	二 女郎見せて	七 今日庚申	二 小べりさすと	六 ことわりて	四 それ善兵衛	二 つまされ	四 折れるやわいと	六 喰らひこむ	五 お袋を	八 鳥追ひの	六 みらいなり	七 坊主持ち
あからが	女郎を見せて	今日は庚申	小べりさすと	ことわりで	それぜん兵衛	つまされて	折れるわやいと	食ひこむ	お袋と	鳥追の	みらいなり	坊主持
五五七	五五七	五五七	五五七	五五七	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六
下	上	下	中	中	中	中	中	上	上	下	上	下
二 おからが	二 女郎見せて	七 今日庚申	二 小べりさすと	六 ことわりて	四 それ善兵衛	二 つまされ	四 折れるやわいと	六 喰らひこむ	五 お袋を	八 鳥追ひの	六 みらいなり	七 坊主持ち
あからが	女郎を見せて	今日は庚申	小べりさすと	ことわりで	それぜん兵衛	つまされて	折れるわやいと	食ひこむ	お袋と	鳥追の	みらいなり	坊主持
五五七	五五七	五五七	五五七	五五七	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六	五五六
下	上	下	中	中	中	中	中	上	上	下	上	下
二 おからが	二 女郎見せて	七 今日庚申	二 小べりさすと	六 ことわりて	四 それ善兵衛	二 つまされ	四 折れるやわいと	六 喰らひこむ	五 お袋を	八 鳥追ひの	六 みらいなり	七 坊主持ち
あからが	女郎を見せて	今日は庚申	小べりさすと	ことわりで	それぜん兵衛	つまされて	折れるわやいと	食ひこむ	お袋と	鳥追の	みらいなり	坊主持

五七二	上	六	門でいひ	門(川?)でいひ
〃	上	八	さごさいは	さごさいは
〃	下	八	口へ寄り	口に寄り
〃	下	二〇	ちる櫻	ちる 櫻木連かたる
〃	下	二	出し 同	出し 同 同
五七三	上	八	飛ぶ鳥が落つる也	も飛ぶ鳥が落る也
〃	下	五	「どこへもつてゐるか」の次へ 問男とべつこんにする氣の毒さ 雄蓮 兎町	
五七三	上	四	合ひにて	合にて
〃	上	二	しやり	くやくり
〃	上	一五	あつたとさ伊勢じ	あつたとさと伊勢し
〃	上	一	後家の迄	後家の色
〃	下	一	「關寺の」一句は二四行「三步だけ」の次へ	
五七四	下	二六	縁遠き	縁遠さ
五七五	上	三	「おきやがれ」の次へ まけるやつよりかゝるのをききにする 飛鳥川連 五 鳥	
〃	上	一四	「かけ取の」一句をとり左の一句を加ふ 改まりました大名女郎也	
五七八	中	二	「新造を」の次へ やかましい答問男に女房なし	
〃	下	一	みせなと	みせなに
〃	下	七	母ぶしゆび	母ふしゆび
五七九	上	二	手どり	手とり
〃	上	七	神ばつて	神ばつて
〃	中	一	二日	三日
五八二	上	二	「むごい賢」の次へ わらちくひ迄は能因氣がつかず	
〃	中	三	こづき	こつき
五八三	上	七	過ぎ	過
〃	上	二	「備より」の次へ 手をくんでゐるが問男氣にかゝり	
〃	下	六	「後家のいろ」の次へ てうのはんの銘に曰く日々に負け	
五八四	中	九	船	船
〃	下	二	魯	鱸
〃	下	一八	「庚申の」の次へ とめないと所拂に常世なる	
〃	中	五	質店	しち? しら?

五九六	//	//	五九五	//	五九四	//	五九三	//	五九二	五九一	//	五八九	五八八	//	五八六	五八五
上	下	下	中	中	上	下	上	下	下	下	下	上	上	下	上	中
九	四	三	三	二	九	七	三	二	一	六	八	五	四	二	七	六
大國	岡場町	枕言葉	初會なり	「あのちい様」の次へ たかしいと御幣ではらひ神子は舞ひ	長吉	いるんな	よつかゝり	二または	一かたまり	中山の	出がはり	内になおとり	吃る	いつて来る	おぼゞへこゝの氣あるでむづかし	丸い
大黒	岡場所	枕言葉も	初會きり		長谷	いろいんな	とつかゝり	二タまたは	一トかたまり	中山は	出がはり	内にゐなおとり	呵られる	ついて来る		まるめ
//	//	六〇二	六〇〇	//	//	//	//	五九九	//	//	五九八	五九七	//	//	//	五九六
中	上	上	下	下	下	中	上	上	下	中	上	下	下	下	中	上
二	五	三	九	四	一	五	二	七	七	二	五	九	三	四	一	六
出がはりに	蛾眉がそめる	いつそ	見ないと	菰かはせて	しらぬ	中は	寺で	足ぶみせぬ	引汐でない	引ッ叱り	通ひ	すつるやう	だアレか	二階を指さし	長さ	とつた
出がはりに	蛾眉をひそめる	いつそ逃げ	見なよと	菰をはせて	しれぬ	中に	寺に	足ぶみもせぬ	引汐でないと	しッ叱り	通ヒ	すてるやう	たアレか	二階へ指をさし	長さ	とつたる

六〇二	下	二	切つて。	六〇九	下	三	南。と	南蠻と
六〇三	上	六	大氣。	〃	下	二	損じた	損じた
六〇四	上	八	ぬいで。	〃	上	二	喰ひ	かみ
〃	下	五	めしかはり	六〇〇	上	七	黒い猫	からす猫
六〇五	上	六	文使ひ	〃	上	二	伯父	伯母
〃	上	七	多き	〃	中	六	よけると	よけてる
〃	上	二〇	本にて	〃	下	三	いたゞけのとて	いたゞけのとて
〃	下	六	伊勢屋むだな事	六〇二	上	三	立て	たて
六〇六	上	三	たでてかけ	〃	中	三	十日	十日
六〇七	中	七	歩だが	〃	下	一	最愛の	さいわいの
〃	下	二	今はのみ	〃	下	七	「かつたやつから」の次へ	
〃	下	三	「いんのこ」の次へ	〃	下	八	「能書の一」の次へ	
六〇八	上	一	出る	枕草子もならぬぞと始皇いひ				
〃	中	三	うりもの	六〇三	上	八	王子	おふじ
〃	下	元	おや孝行	〃	上	八	だらく	だうらく
〃	下	二〇	小舟	〃	下	九	突出し	突出シ
六〇九	上	八	しみに来る	六〇三	中	三	畑蕨草	畑に蕨草
〃	中	二	うつくしき	〃	中	三	棒組に	棒組や

六五	上	一五	こびりついて	こびりついてゝ
六六	上	二〇	厄年 <small>「一徳」の次へ</small> の胴取四の二でつぶされ	和笛
六七	上	四	瑠璃殿に	瑠璃殿の
六八	上	七	かうへは	かうべは
六九	下	六	よき星の	よい星の
七〇	下	九	三分なは	三分はな
七一	上	四	針卷	鉢卷
七二	上	一	打つて行く	打で行く
七三	上	五	かまばらひ	かまはらひ
七四	中	一八	御短氣	御短氣を
七五	中	二	世をばせめられ	世をせめられ
七六	下	三	さもあらんのが	さもあらんのは
七七	下	三	「さもさうす」の次へ 大さわき見附の渦をひつこはし	
七八	上	二七	二歳	二才
七九	上	一八	骨斗り	骨斗カ
八〇	上	二	はひやツて	ばひやツて
八一	上	二	付いて	付くて

六三	中	二	一 <small>「一徳」の次へ</small> 六十萬石傾城おふぜう	
六四	上	一	目つぶしに	目つぶしを
六五	上	一	百八を	百八ツ
六六	上	七	小間遣ひ	小間遣
六七	中	三	うけ出すが	うけ出すと
六八	中	九	ならぬを	ならぬのを
六九	中	九	賣るは小間物屋	賣る小間物屋
七〇	中	三	手ばなしが	手ばなしで
七一	下	二	一 <small>「一徳」の次へ</small> 土用干みすばらしいが嫁のよそ	
七二	下	九	娘ひなを出し	娘はひなを出し
七三	上	二	出ばを	出はを
七四	上	二	様御出だといこ	様が御出だといこ
七五	中	二	刀	力
七六	中	二七	成り	盛り
七七	中	一八	高尾は古風	高尾古風
七八	上	二三	する	すゑに
七九	中	九	一 <small>「一徳」の次へ</small> 女の道のくたびれは尻に出る	

中	上	下	上	中	中	上	下	下	上	上	下	下	中
四	八	四	四	七	七	三	五	四	九	一	三	三	二
さかもり	團扇は買ひ	おどる也	雛が	庭さん	村の色な	茶瓶かけ	ふたり 二人	十も若いので	白丁と	じたらくに	獵師	源氏軍	くなし。
さかぞり	團扇は買ひ	おとる也	雛の	庭さん	村の色	茶瓶をかけ	ふたり 二人	十も若いので	白丁の	じたらくに	獵師	源氏軍	くなく。
七二〇	上	下	下	上	下	上	下	上	上	下	下	下	上
一四	八	五	三	八	二	六	一	二	八	五	七	一	四
やあゝ	顔三度来りや	白いも	舟	はなけたく	つツかけきしに	ぬき櫛	さすり人の	不沙汰に	桐に	なんぞかかぞくれる	駄られる	碁がすんで仕舞ふと	杭に是より
やあら	顔も三度来りや	白いも	母	はちけたへ	つツかけさうに	ぬき櫛	さすり人の	不沙汰に	桐に	なんぞかかぞくれる	駄られる	碁がすんで仕舞ふと	杭に是より
七二〇	上	下	下	上	下	上	下	上	上	下	下	下	上
一四	八	五	三	八	二	六	一	二	八	五	七	一	四
やあゝ	顔三度来りや	白いも	舟	はなけたく	つツかけきしに	ぬき櫛	さすり人の	不沙汰に	桐に	なんぞかかぞくれる	駄られる	碁がすんで仕舞ふと	杭に是より

芭蕉全集正誤表

頁 段 行 誤 正

八 中 三 「我爲に」の前に左の一句を加ふ

湖水から光り出しけり比良の雪

「又從來」より以下十行「でもありません」

まで全部消去す

二五 中 三 端物三 端物四

下 四 「詞から」の次へ左の文字及び三句を加ふ

集三

「日清文章評六」の三人が一編を著す事蹟は疑問
なれど、此三句を記したる評六の真蹟ありと
云へば、一編兩編二篇に依りて採録す

湖水より光り出しけり比良の雪 芭蕉

浪にまぶれていさゝとる人 丈草

歌よめと支二したる文ときて 許六

下 五 集三 共四

七三	下	七 小便の。
七二	上	二五 松とに。
七七	上	二六 寐付け得ず
〃	下	二一 落葉の頃
七九	上	一八 馬鹿ばやし
七二	上	一 女郎なり
七三	上	二〇 綿井町に
〃	下	二 藁からさ
七五	上	七 大地
七六	上	二〇 竹村札
七五	上	二二 遺う
〃	下	二〇 天地
七五	下	一三 會目には
七四	上	六 風かしりと
七四	上	二七 風かすじると
七四	上	八 あけ初め
七五	上	〃 無いに乳貰ひ
七五	上	〃 名主

昭和四年十二月十二日印刷
昭和四年十二月十五日發行



日本名著全集

第一卷 江戶文藝之部
附錄 索引

東京市日本橋區馬場町二丁目一番地

編輯 石川寅吉

日本名著全集刊行會

代售者 石川寅吉

發行所

日本名著全集刊行會

東京市日本橋區馬場町二丁目一番地

電話 漢花一八四〇 漢一八四一 漢
國語 東京 一八四四 漢

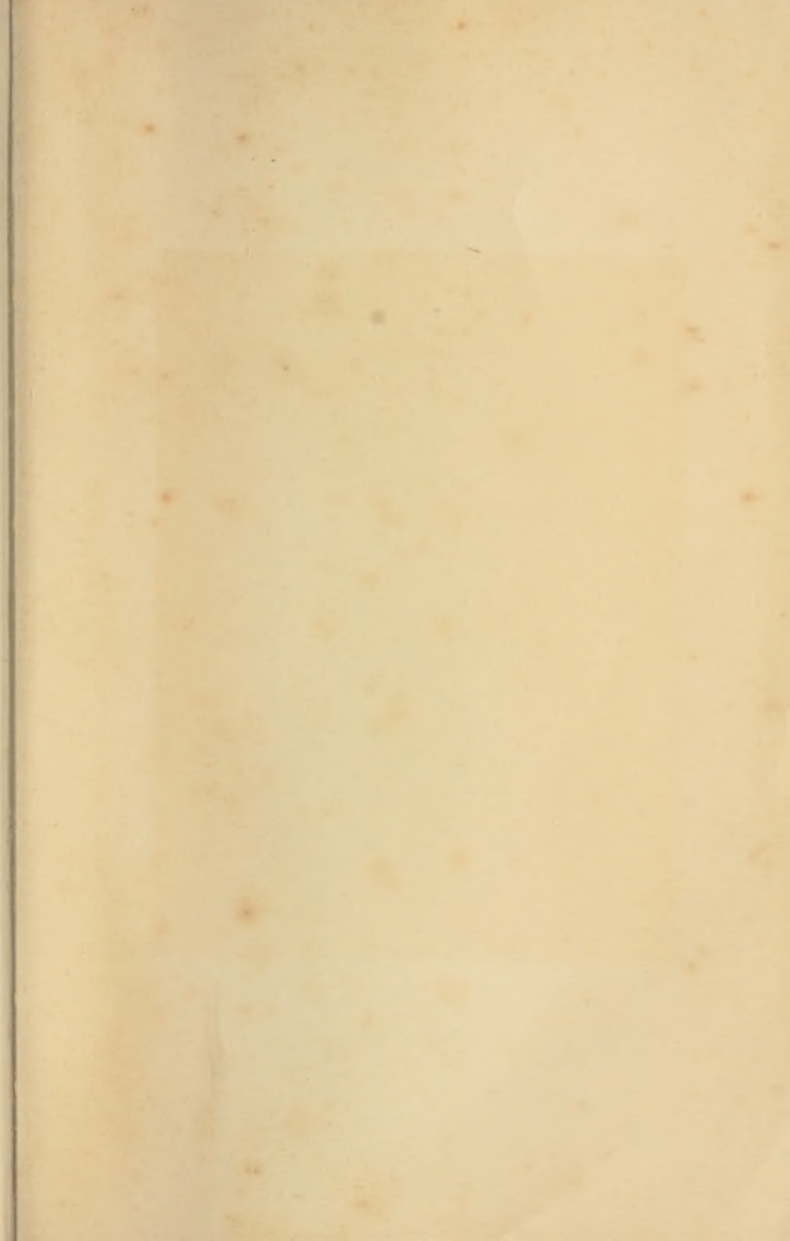


卷之五

五言古詩
五言律詩
五言絕句

五言古詩
五言律詩
五言絕句

五言古詩
五言律詩
五言絕句





UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

*purchased from
a gift by*

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5194



PL

755

N^o 35

5

V. 31